



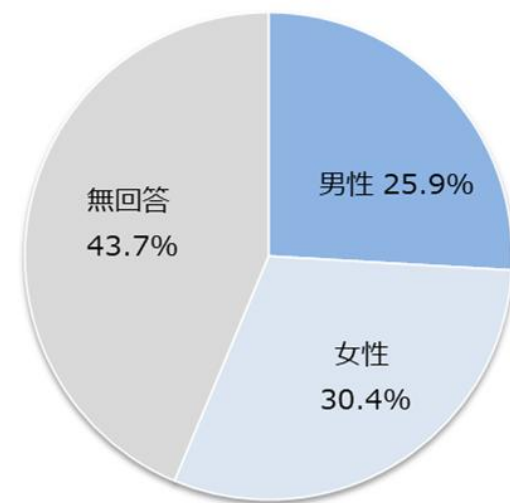
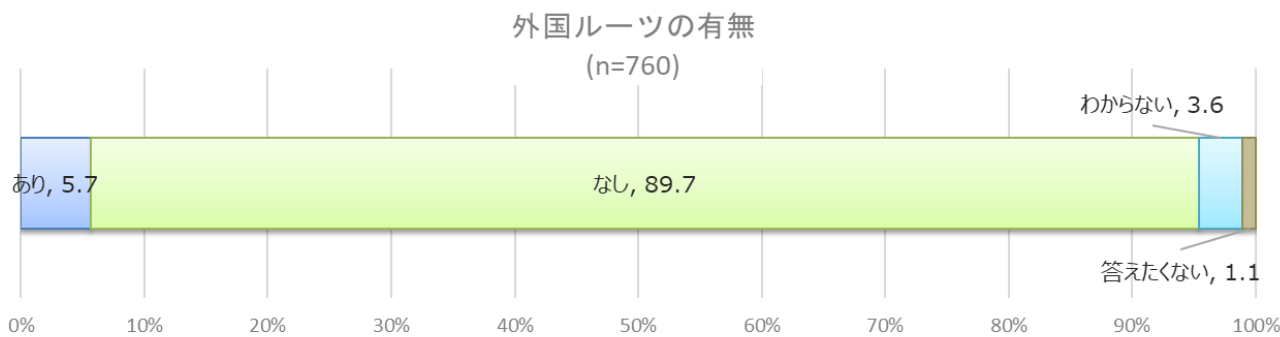
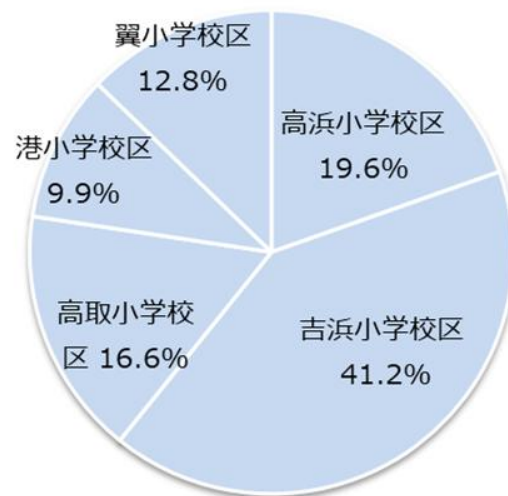
高浜市まぜこぜの居場所づくり実態調査報告



調査概要



調査時期	2025年10月27日～12月10日
調査対象	高浜市に住む10歳～29歳以下の子ども・若者
調査方法	Webアンケートフォームへの回答
回答数	760件
備考	小学校1年生～3年生に対しては、別途2025年12月にグループヒアリングを実施(44名)。





全体の概要

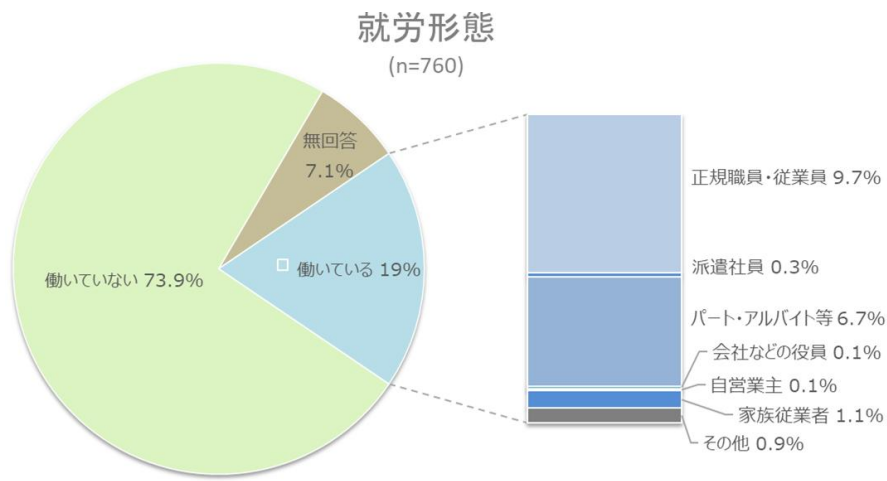
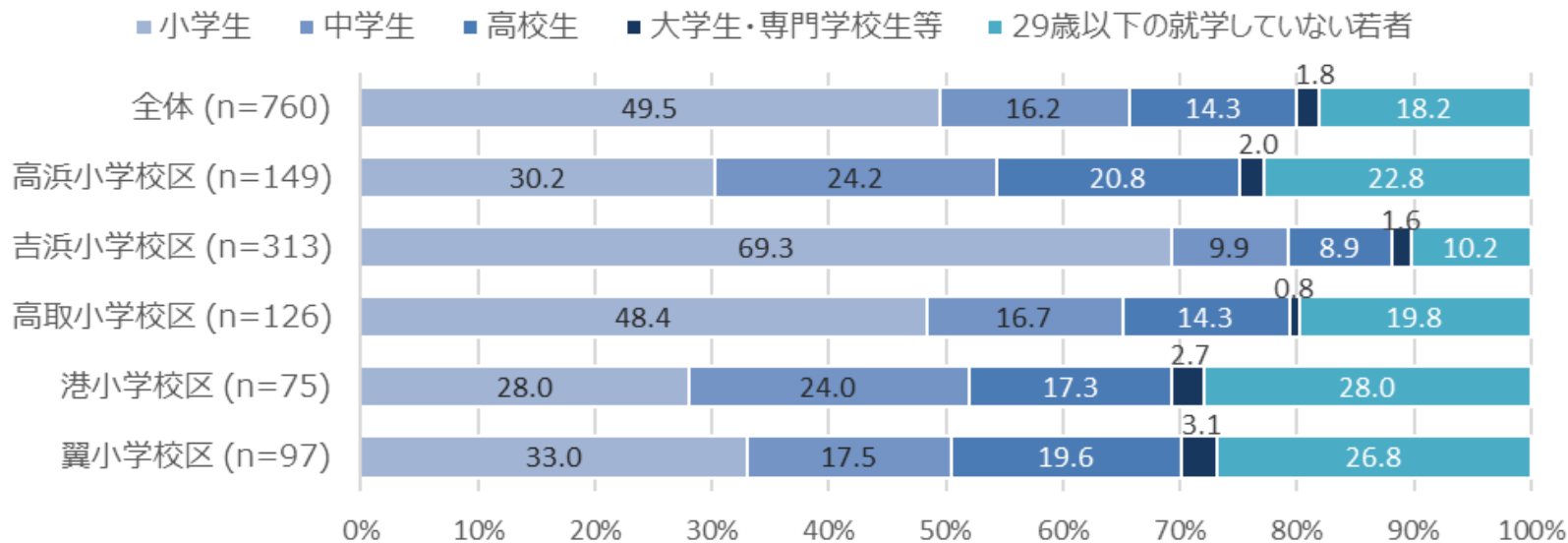
(居場所に関連する内容を中心に)



調査結果： 回答者は小学生が約5割、中高生が約3割



学区別、回答者の年齢層



- 回答者の約半数は小学生。
- 特に吉浜小学校区で小学生の回答が多い。
- 一方、港小学校区・翼小学校区では働いている若者の回答割合が高い。

調査結果： 学校が居場所は6割、第三の居場所ありは約半数

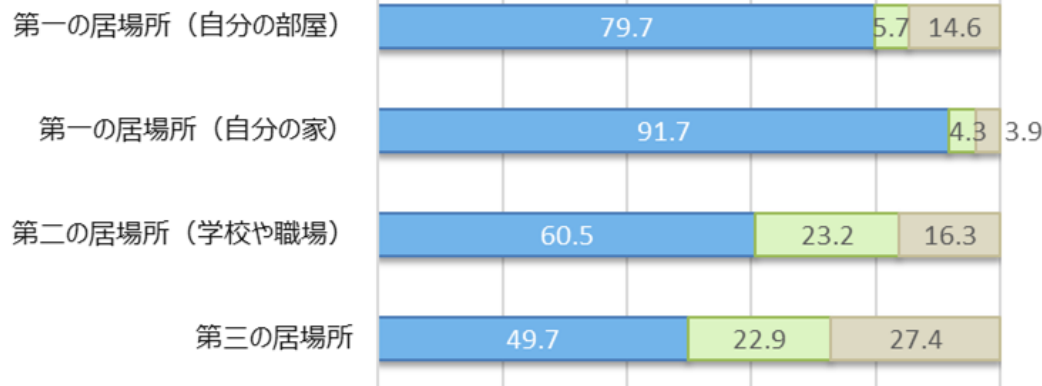


居場所の有無

(n=760)

■ある ■ない ■あてはまるものはない/分からない

0% 20% 40% 60% 80% 100%



- 自分の部屋や家が居場所であると回答したのは約80～90%。
- 学校（クラブ活動を含む）や職場が「居場所」と回答したのは約60%で、23.7%が「居場所と感じられない」と回答。
- 家や学校・職場以外の第三の居場所があると回答したのは、約半数だった。
- 学区別にみると、「学校・職場」が居場所になっている割合に差が見られ、高浜小学校区では高く、高取小学校区・港小学校区で低い傾向が見られた。

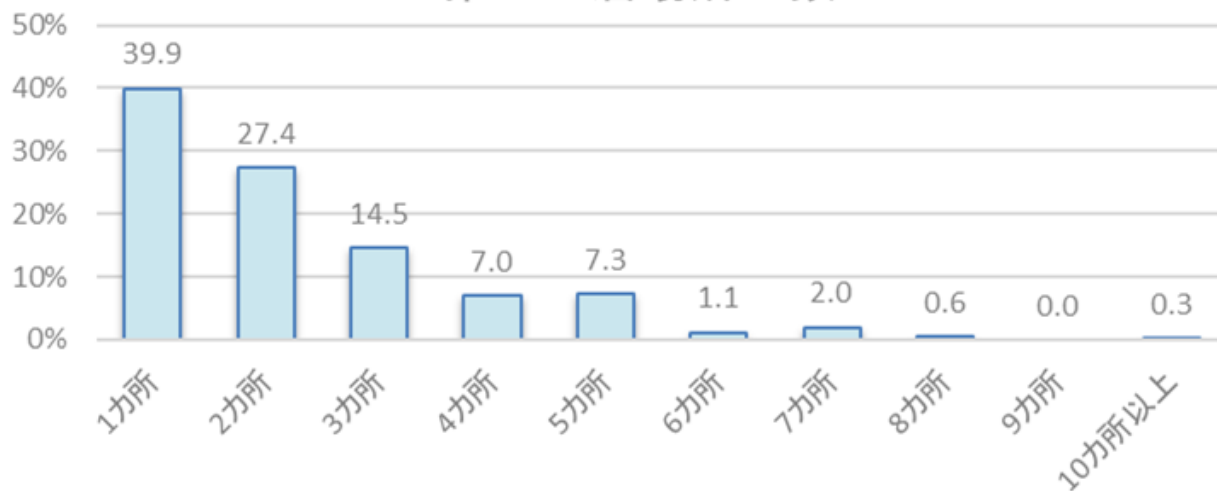
	第一の居場所 (自分の部屋)	第一の居場所 (家庭)	第二の居場所 (学校・職場)	第三の居場所
全体 (n=760)	79.7	91.7	60.5	49.7
高浜小学校区 (n=149)	79.9	88.6	69.8	54.4
吉浜小学校区 (n=313)	78.3	92.0	61.3	48.6
高取小学校区 (n=126)	76.2	92.1	53.2	43.7
港小学校区 (n=75)	84.0	96.0	52.0	56.0
翼小学校区 (n=97)	85.6	91.8	59.8	49.5

- 「第三の居場所がある」と答えた割合は、港小学校区、高浜小学校区で高い傾向が見られた。

調査結果： 第三の居場所は平均2.3カ所。



第三の居場所の数



- 第三の居場所の箇所数としては、平均2.3カ所。約40%が1カ所と回答。

学区別第三の居場所

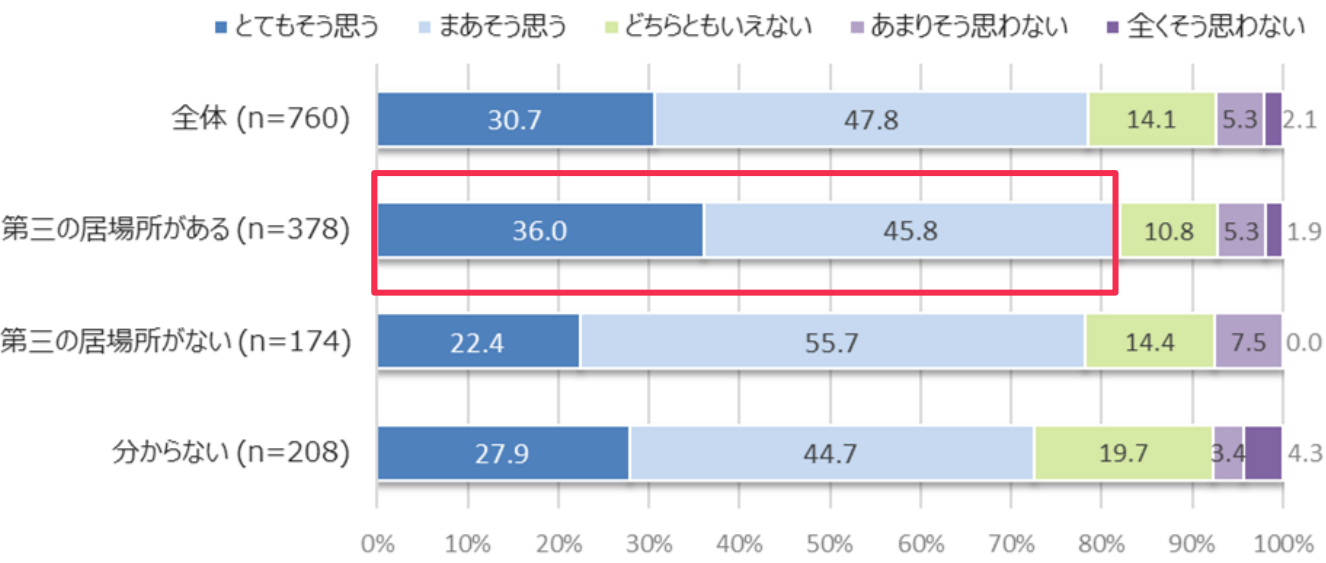
学区別第三の居場所	親族の家・ 友達の家	習い事や塾 など	地域の施設・ 場所	オンライン空間
全体 (n=375)	72.0	32.5	49.3	21.1
高浜小学校区 (n=80)	71.3	36.3	47.5	12.5
吉浜小学校区 (n=151)	72.8	37.7	50.3	21.9
高取小学校区 (n=55)	76.4	29.1	36.4	32.7
港小学校区 (n=42)	71.4	14.3	59.5	21.4
翼小学校区 (n=47)	66.0	29.8	55.3	19.1

- 学区別に第三の居場所を見てみると、「港小学校区」および「翼小学校区」で「習い事や塾」が低く「地域の施設・場所」が高い傾向がある。一方で、「高取小学校区」は「地域の施設・場所」の割合が低く、「オンライン空間」が高い傾向にある。



調査結果： 地域への愛着は約8割、第三の居場所があると高い傾向

地域に愛着があるか



- 78.5%が地域への「愛着がある」と回答。「愛着があると思わない」は7.4%
- さらに、第三の居場所がある場合には、地域への「愛着がある」が81.7%となった。

- 全国のこども・若者に対する調査では、「今住んでいる地域が好きですか」に対して「好き」と回答したのは72.1%、「今住んでいる地域で良いと思うところはありますか」に対して「愛着がある」は31.2%となっていた。

【参考】 こども家庭庁（2023）『我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査』

Q24 あなたは、あなたの今住んでいる地域（市町村）が好きですか。（回答は1つ）
(%)

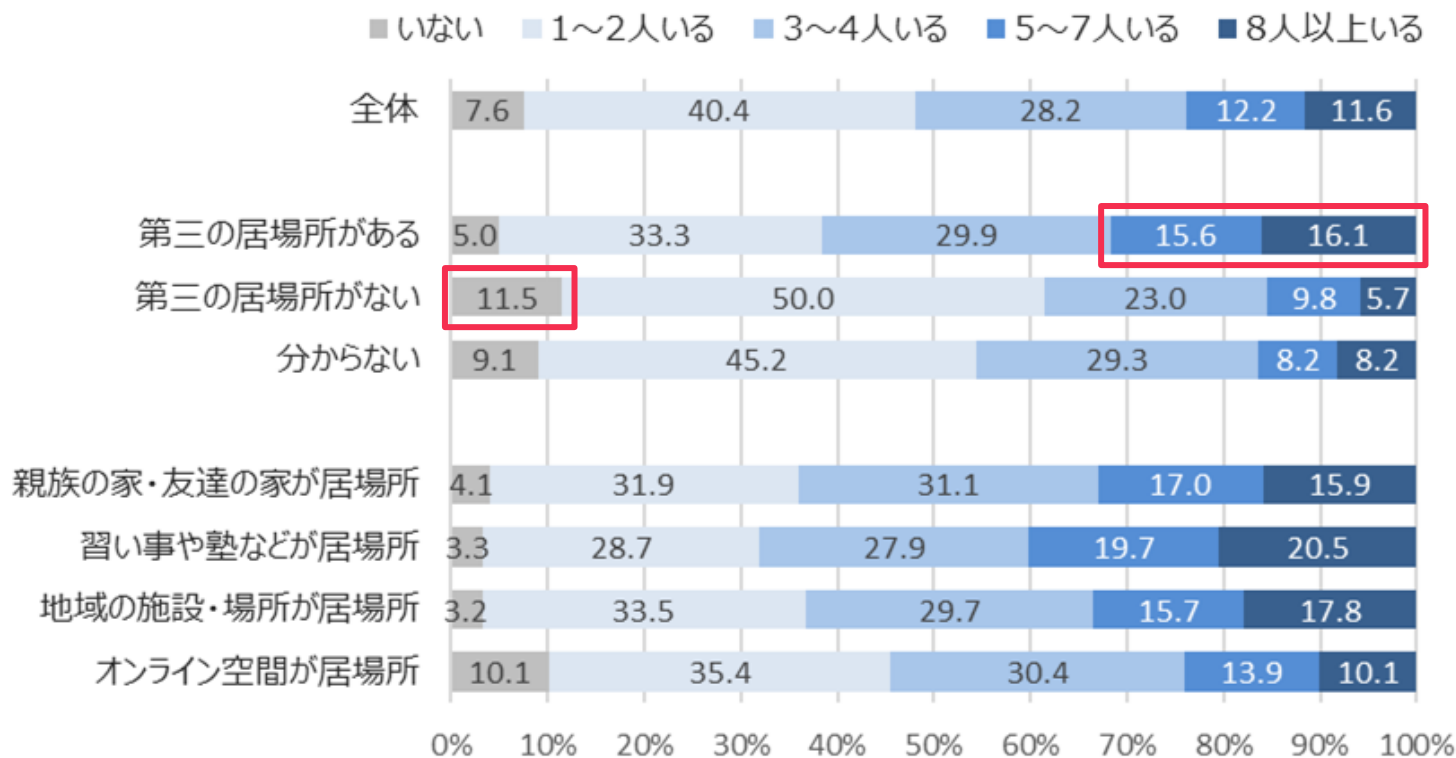
	好きである	どちらかといえば好きである	どちらかといえば好きでない	きらいである	わからない	好きである (計)	きらいである (計)
令和5年度調査 (n=1089)	26.2	45.9	11.6	5.1	11.3	72.1	16.6
平成30年度調査 (n=1134)	27.7	46.8	9.8	5.1	10.6	74.5	14.9

第三の居場所がある場合、相談できる人が多い傾向



- 第三の居場所がある場合、相談できる人の数が多い傾向がある。特に「8人以上いる」が16.1%、「5人以上いる」では31.7%となっていた。
- 第三の居場所の中では、「習い事や塾」「親族の家・友達の家」「地域の施設・場所」などが居場所の場合、「5人以上」が多い傾向があったが、「オンライン空間」が居場所の場合についてはその傾向はみられなかった。

相談できる人の人数 (n=760)





居場所の有無と各年代との交流状況

	第三の居場所の有無	普段、話したり遊んだりする相手					
		就学前児童	小学生	中高生	若者 (30歳未満)	大人	高齢者
小学生 (n=376)	ある	54.0	94.7	43.9	19.3	62.0	48.1
	ない	49.3	86.7	22.7	6.7	48.0	38.7
	分からない	39.5	88.6	44.7	14.0	43.9	29.8
中学生 (n=123)	ある	32.1	62.5	98.2	33.9	66.1	58.9
	ない	24.2	39.4	84.8	15.2	54.5	36.4
	分からない	23.5	44.1	100.0	11.8	61.8	44.1
高校生 (n=109)	ある	17.5	33.3	87.7	43.9	73.7	54.4
	ない	11.5	15.4	96.2	30.8	73.1	46.2
	分からない	19.2	26.9	96.2	26.9	53.8	34.6
大学生・専門 学校生等 (n=14)	ある	0.0	0.0	50.0	75.0	75.0	25.0
	ない	33.3	33.3	33.3	100.0	66.7	50.0
	分からない	25.0	25.0	25.0	75.0	50.0	0.0
29歳以下の 就学していない 若者 (n=138)	ある	24.3	25.7	47.3	74.3	85.1	44.6
	ない	8.8	20.6	32.4	70.6	70.6	41.2
	分からない	33.3	30.0	46.7	70.0	73.3	46.7

- 第三の居場所がある人は、異なる年代との交流機会が「ある」の割合が高い傾向が見られた。
- 特に、第三の居場所がある場合、大人や高齢者との交流がある割合が高くなる傾向があり、特に小学生や中高生でその傾向が見られた。
- 就学していない29歳以下の若者においても、第三の居場所がある場合、就学前児童や中高生、30歳以上の大人との交流が高い傾向が見られた。



居場所と孤独感との関連

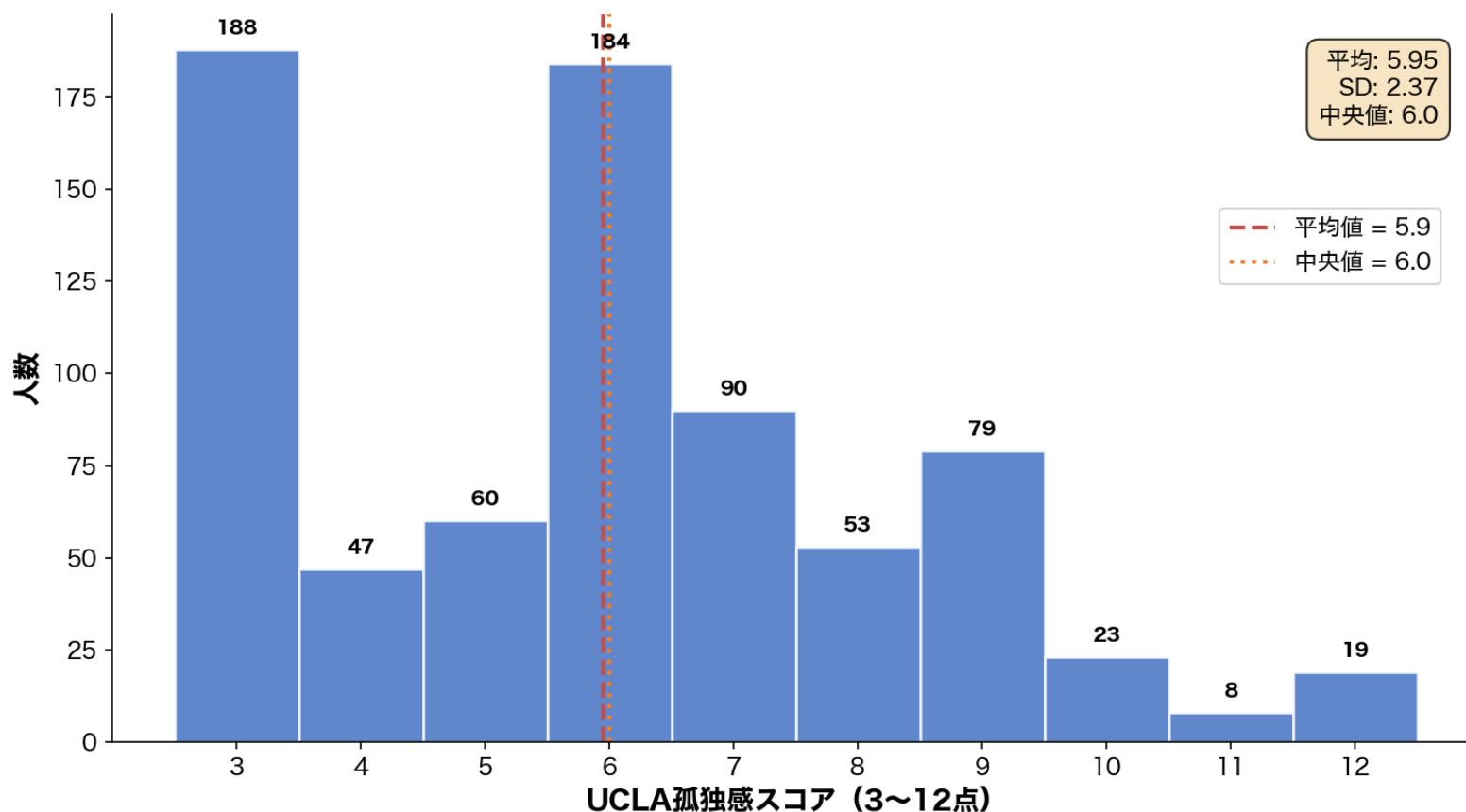




UCLA孤独感尺度の分布

- 全体平均 5.57 (SD=2.29)。最頻値は3点 (最低得点) で全体の27.0%を占める。
- 右に裾を引く分布であり、多くの保護者は低い孤独感を示すが、高得点者も一定数存在。

UCLA孤独感スコアの分布 (N=763)

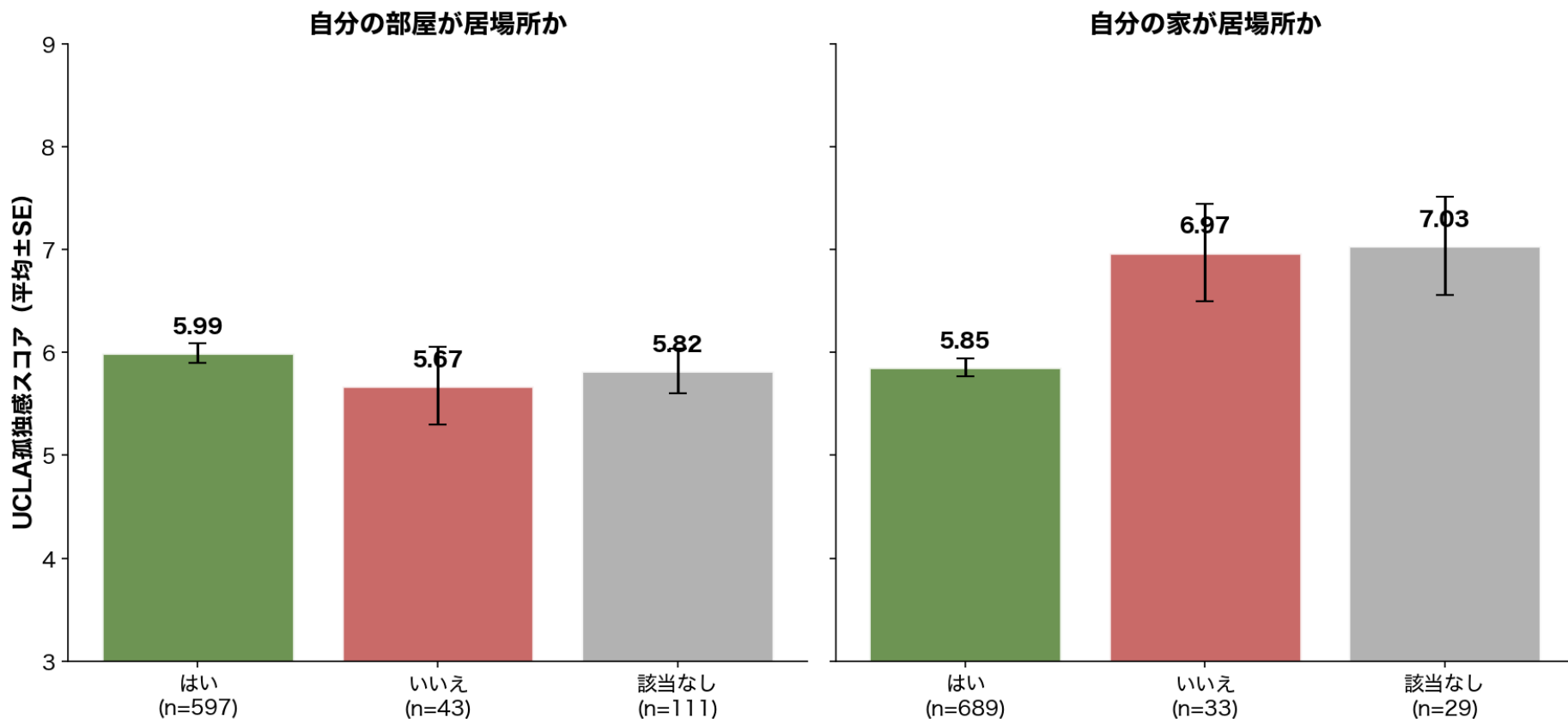




家庭が居場所だと、孤独感は低い

- 自分の部屋が居場所及び自分の家が居場所と回答しているほど、孤独感が低い傾向
- 家庭内での居場所の有無が、孤独感と関連している可能性を示唆

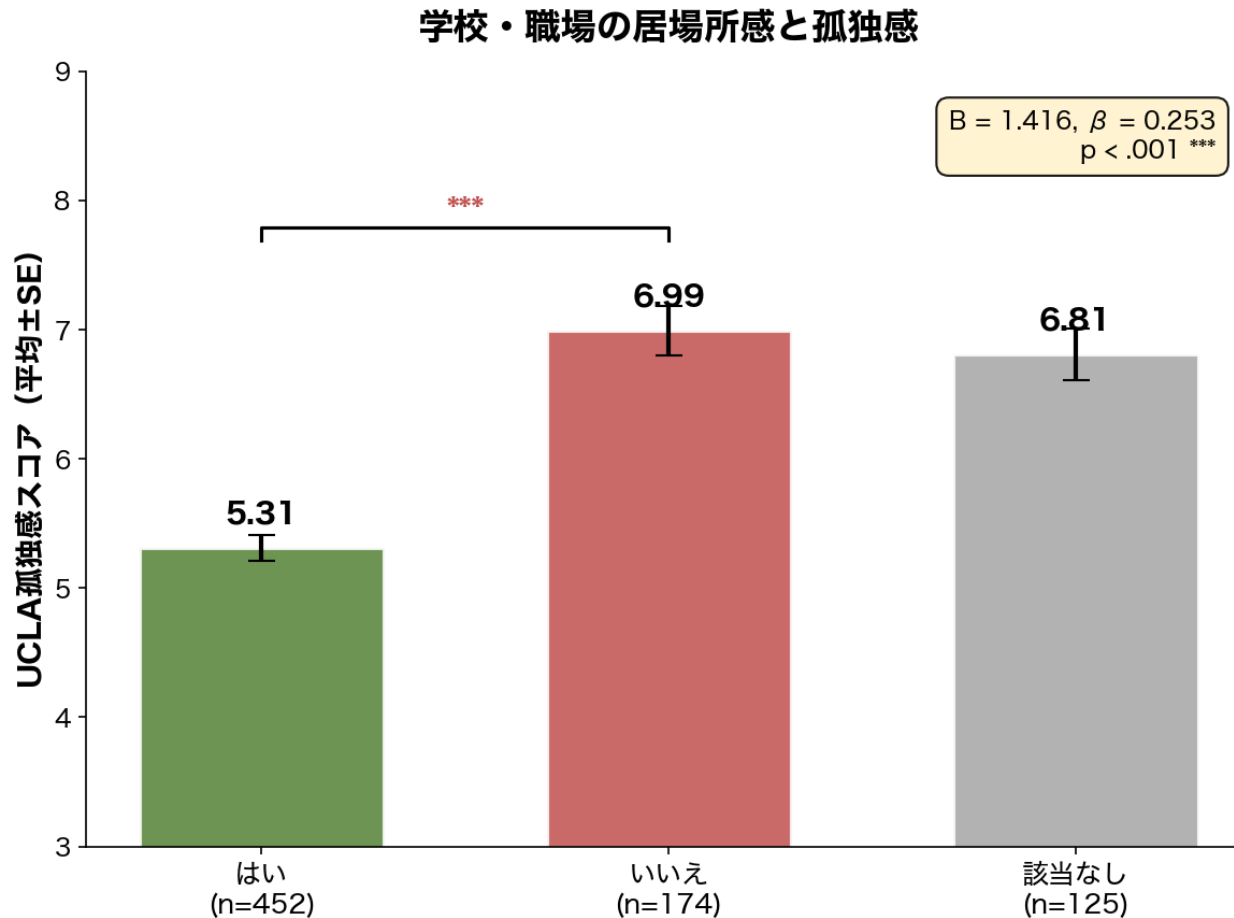
1st/2nd Place (自分の部屋・家) の居場所感と孤独感





学校・職場が居場所だと、孤独感が低い

- 学校・職場における居場所の有無と、孤独感に関連がある。
- 学校・職場が居場所である（はい）と答えている者より、いいえと答えていると1.68点孤独感が高い。

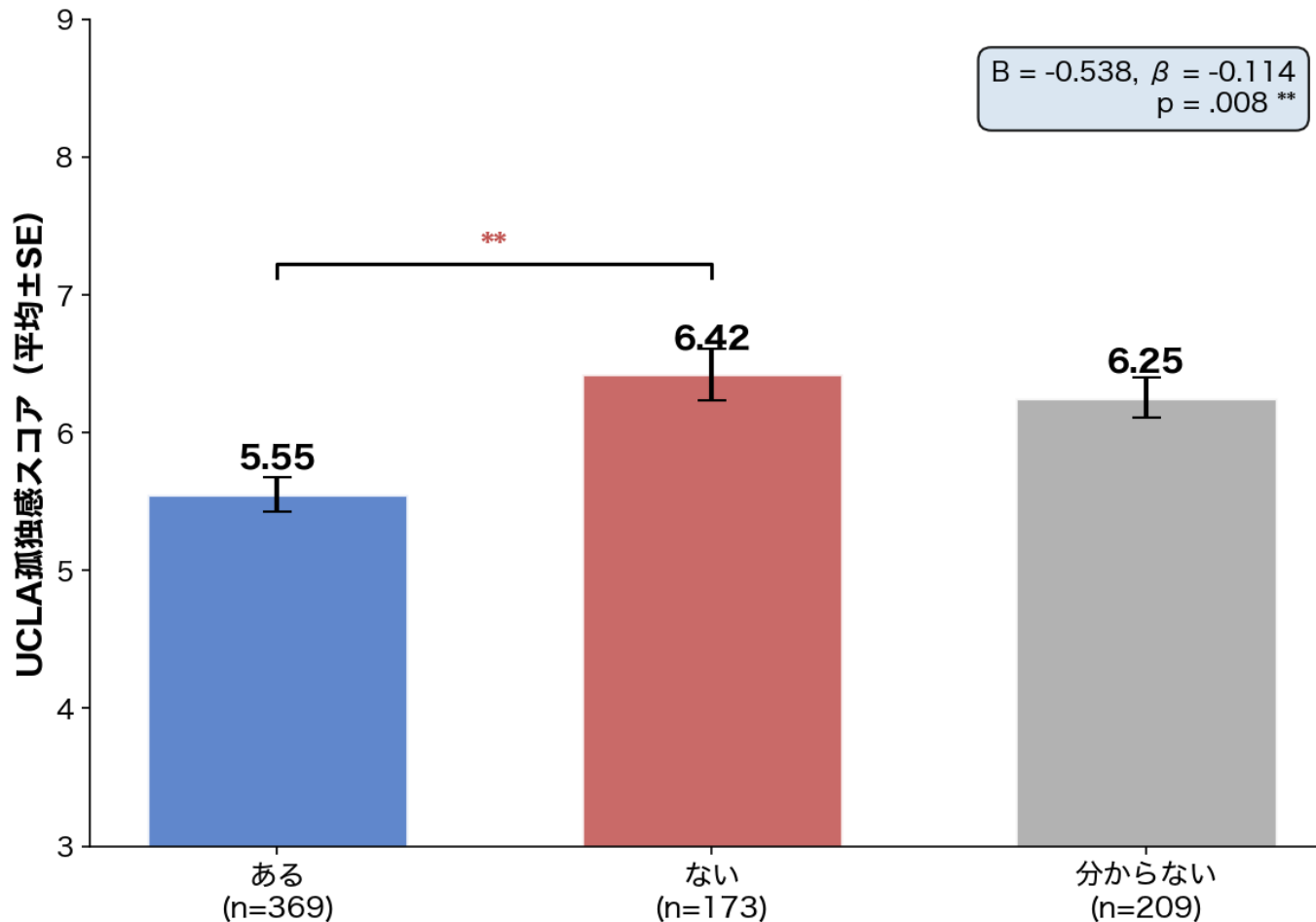




サードプレイスがあると、孤独感が低い

- サードプレイスがあると回答していると、孤独感が約0.8ポイント低い。

サードプレイス(第三の居場所)の有無と孤独感

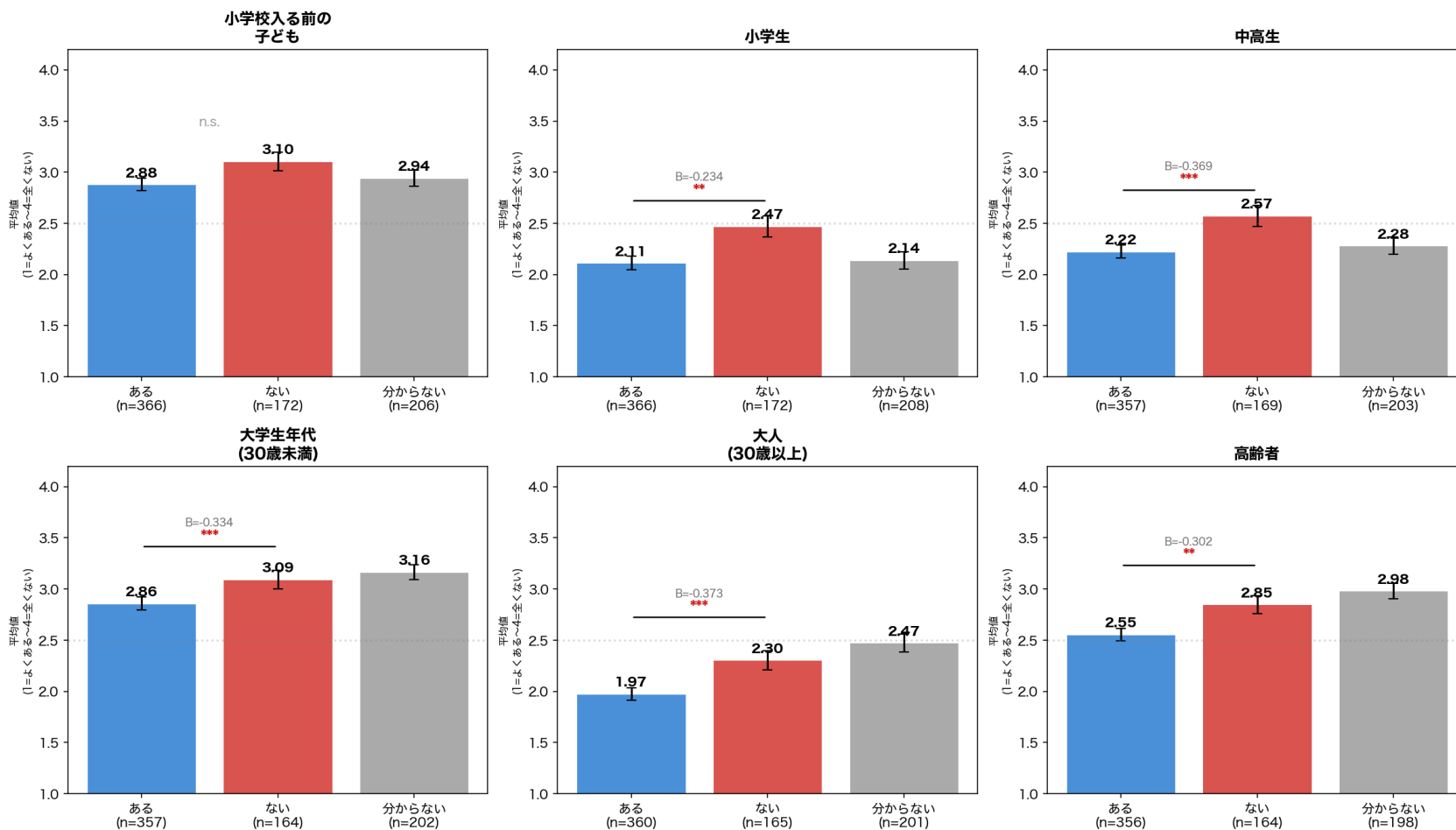


サードプレイスがあると、世代間交流頻度が高い



- サードプレイスがあると、多世代（高齢者・小学生等）との交流頻度が高い
- 地域の世代間交流がサードプレイスと孤独感を媒介する可能性

サードプレイスの有無と多世代交流

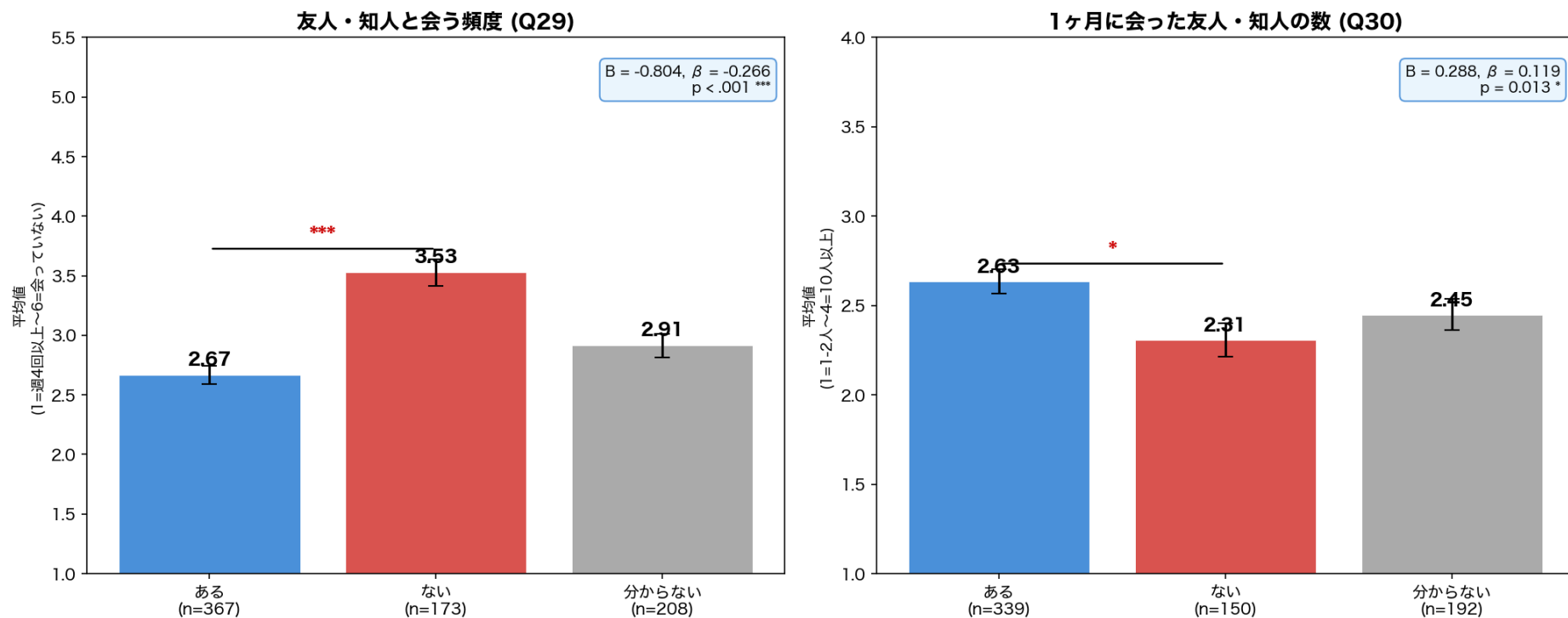


サードプレイスがあると、友人との接触頻度や人数が多い



- サードプレイスが友人ネットワークを豊かにしている可能性がある

サードプレイスの有無と友人・知人との接触

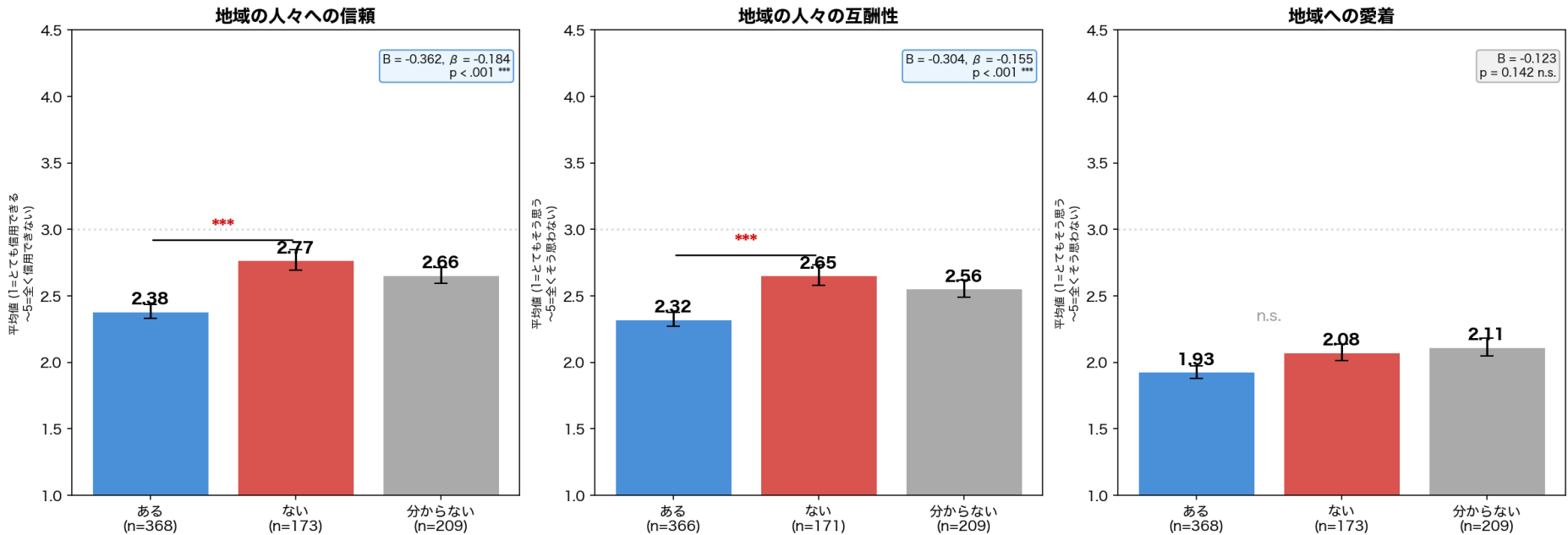


サードプレイスがあると、 ソーシャル・キャピタルが豊かになる



- 地域の信頼感・互酬性（ソーシャル・キャピタル）がサードプレイスあり群で高い
- サードプレイスがソーシャル・キャピタルを醸成し、孤独感低減につながる可能性

サードプレイスの有無とソーシャルキャピタル



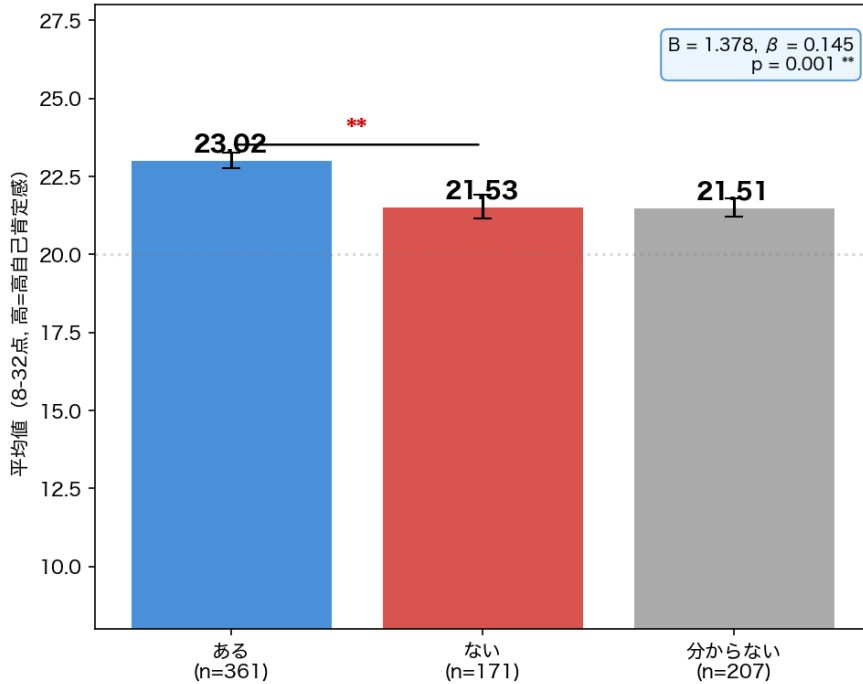
サードプレイスがあると、自己肯定感が高い



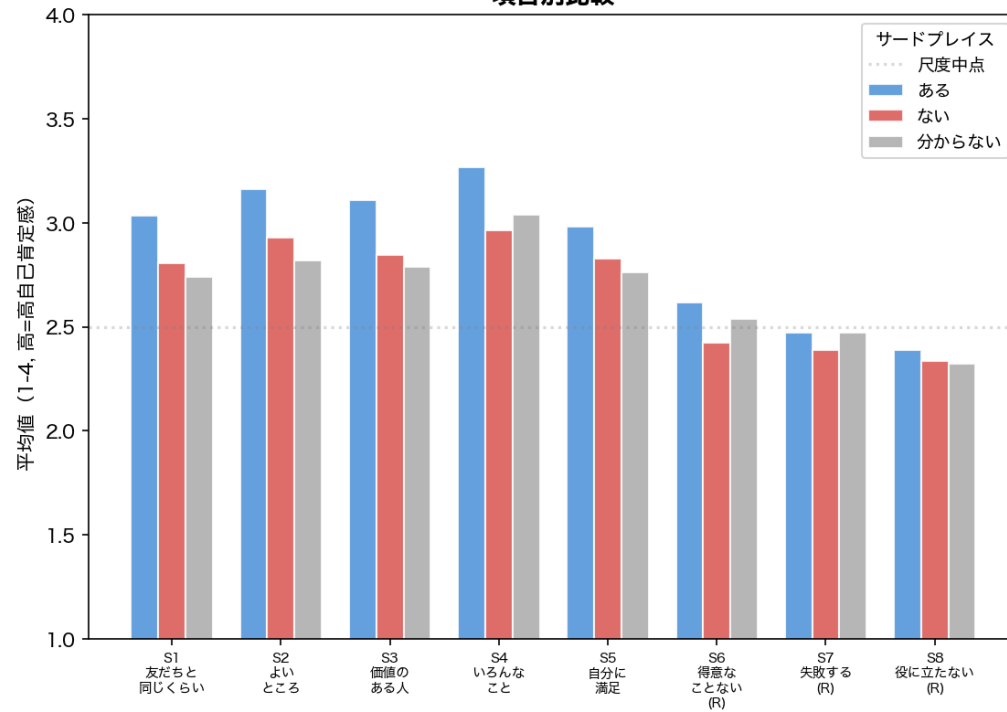
- サードプレイスがあると答えていると、自己肯定感が高い傾向
- 自己肯定感尺度の各項目別でも同様の傾向を示している

サードプレイスの有無と自己肯定感

自己肯定感合計スコア



項目別比較

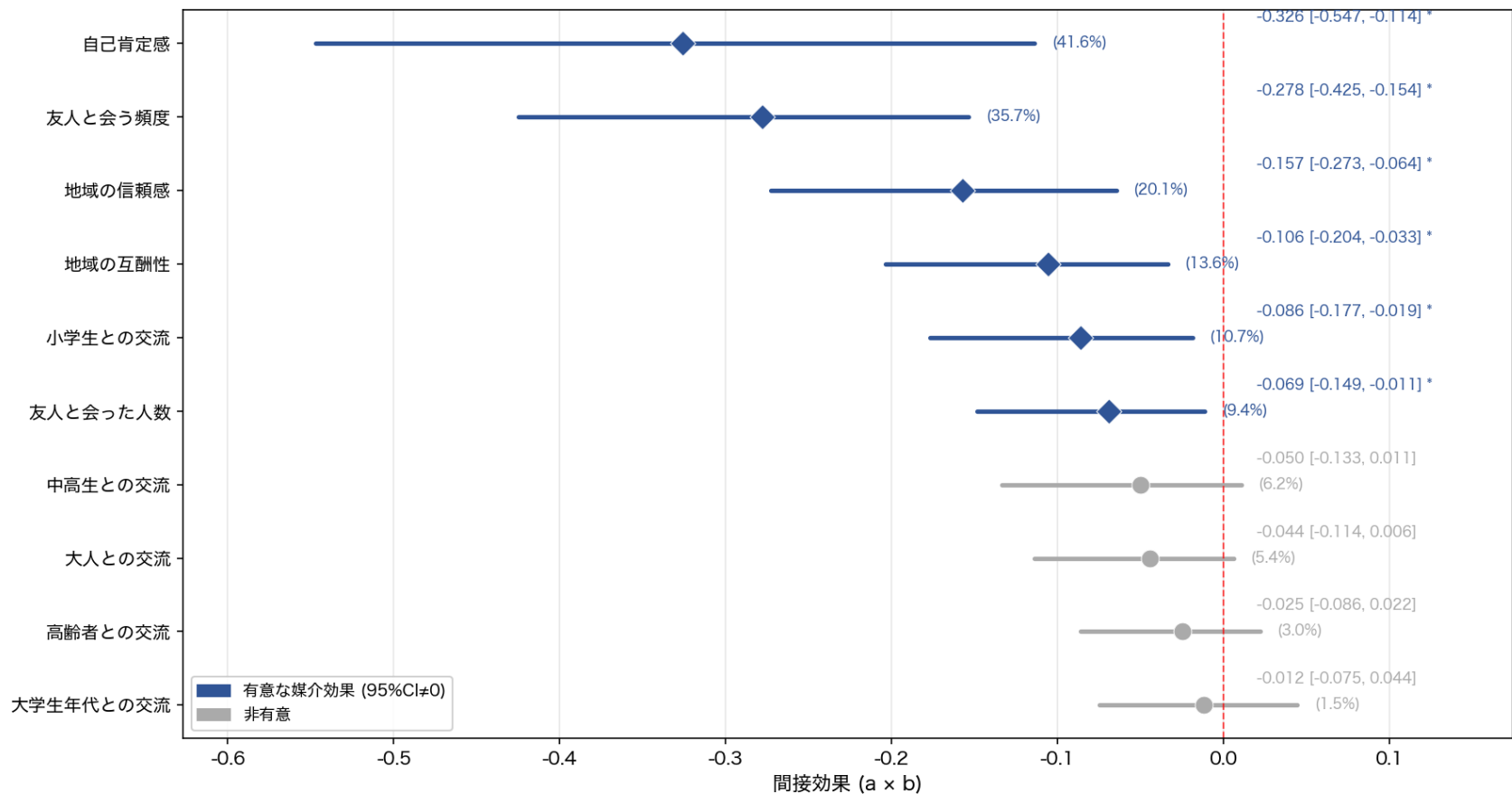


想定される中間要因別（メカニズム）の検討 サードプレイスと孤独感の関連における中間要因



- 自己肯定感と友人と会う頻度との関連が最も強い
- サードプレイスがあることで、友人との接触頻度や自己肯定感が高まり、孤独感が低くなっている可能性を示唆

ブートストラップ媒介分析: 間接効果と95%信頼区間
(サードプレイス → 媒介変数 → UCLA孤独感)

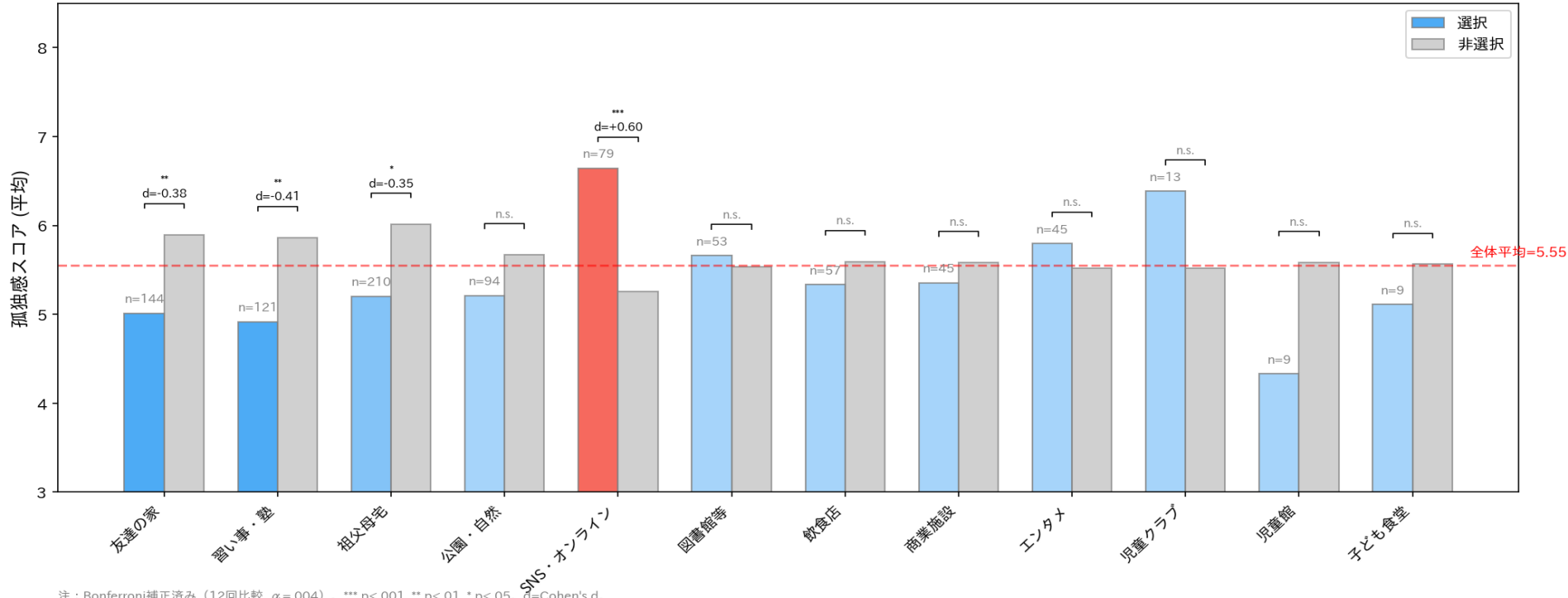


どの種類のサードプレイスが有効か？



- サードプレイスの種類別では、友人の家、習い事・塾、祖父母宅が関連を示した
- 他方で、SNS・オンラインの居場所は、孤独感を高める傾向
- その他、図書館、飲食店、商業施設、エンタメ、児童クラブ、児童館、こども食堂は関連を示さなかったが、サンプル数が少ないことの影響は今後の課題である

居場所の種類別 孤独感スコア（居場所あり群）



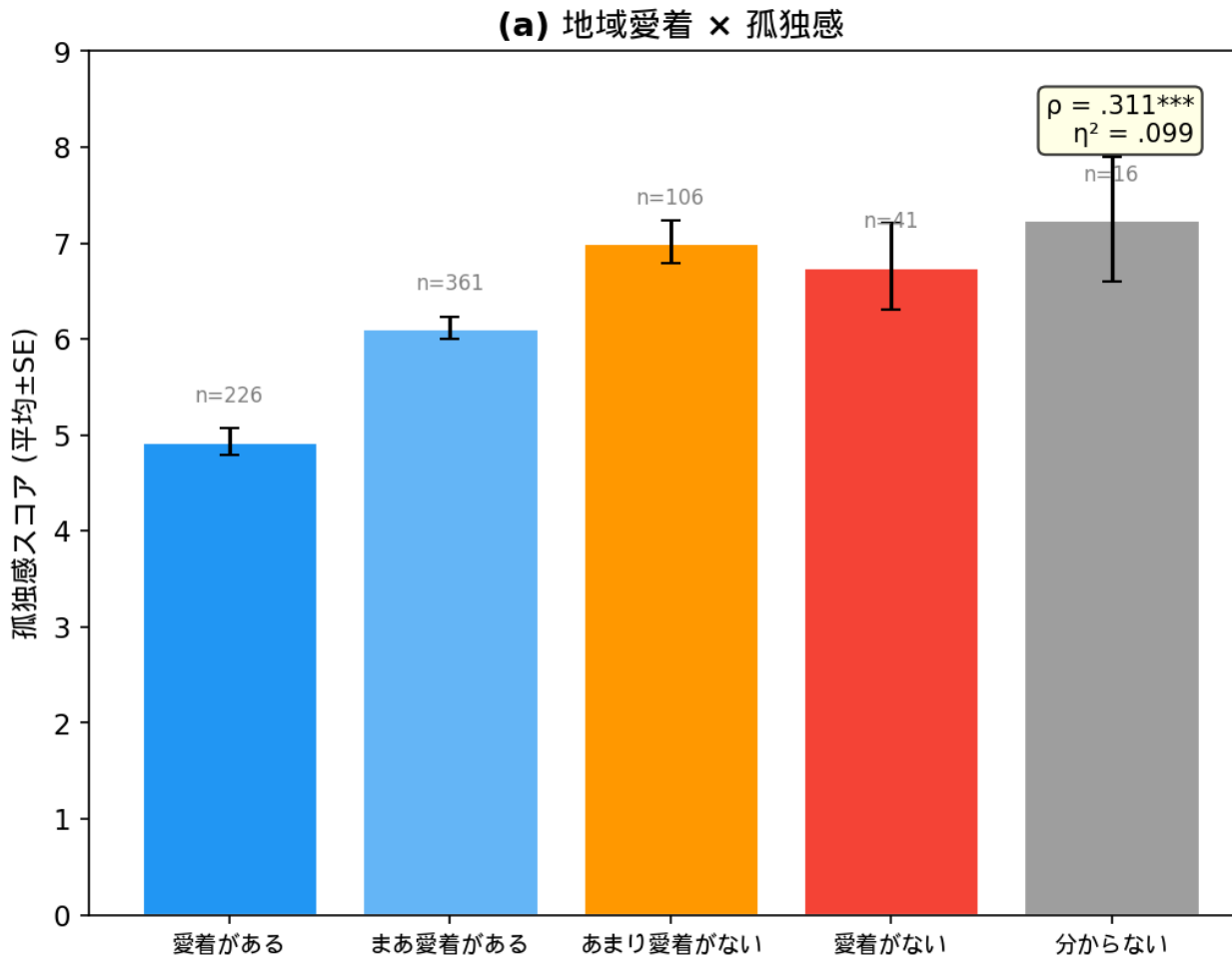
注：Bonferroni補正済み（12回比較， $\alpha=.004$ ）。*** $p<.001$ ，** $p<.01$ ，* $p<.05$ 。d=Cohen's d。

青色=孤独感が有意に低い、赤色=孤独感が有意に高い、薄色=有意差なし

地域への愛着があると、孤独感が低い



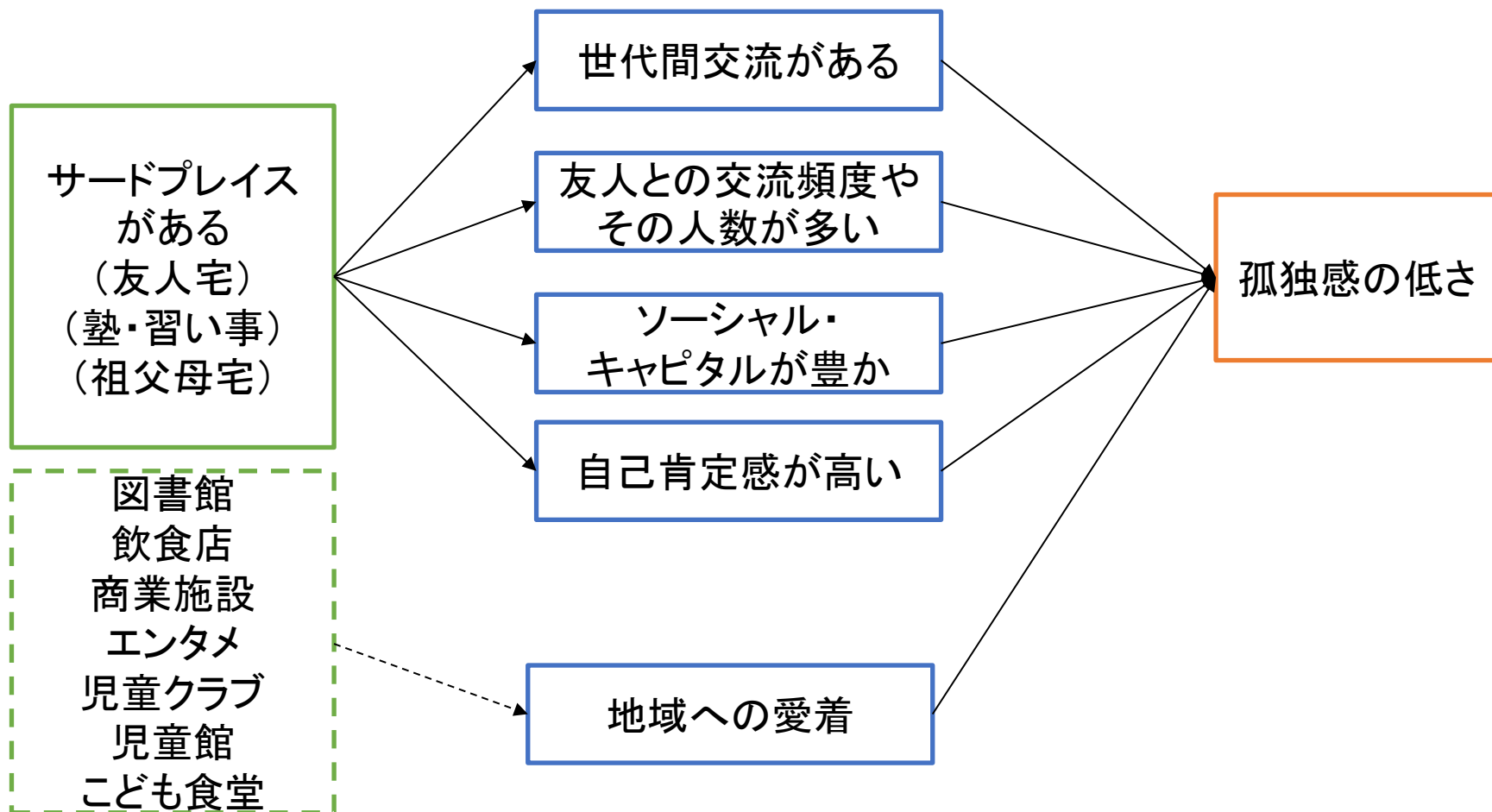
- 地域への愛着があると、孤独感が低いことは関連していた。
- サードプレイス別の種類の中でも、関連を示さなかった居場所（図書館、飲食店、商業施設、エンタメ、児童クラブ、児童館、こども食堂）が豊かになることで、地域への愛着が高まり、孤独感が低くなるという仮説の検証は、今後の課題である。



分析結果のまとめ



- ここまでの分析結果をまとめると、以下のような関係性となる
- サードプレイスがあると、世代間交流があり、友人との交流頻度やその人数が多く、ソーシャル・キャピタルが豊かで、自己肯定感が高いので、孤独感の低さにつながる





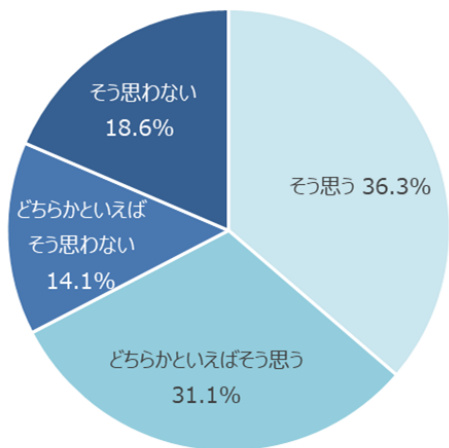
今後の居場所づくりに向けて





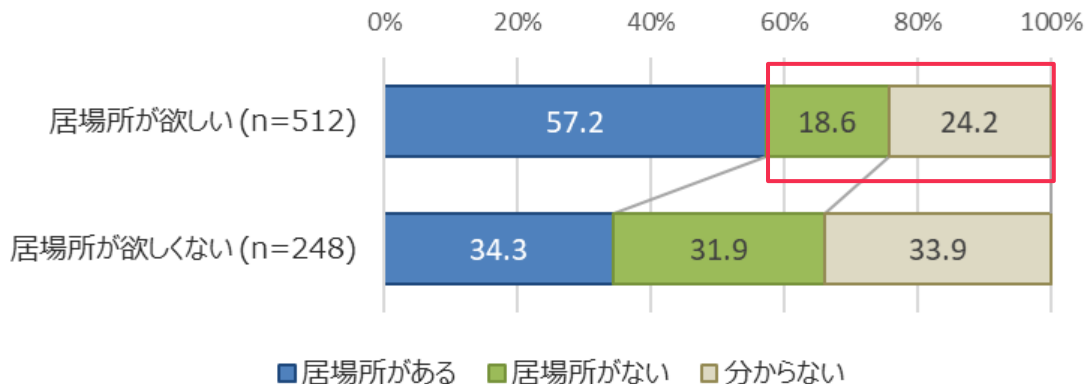
第3の居場所が欲しいか

(n=760)



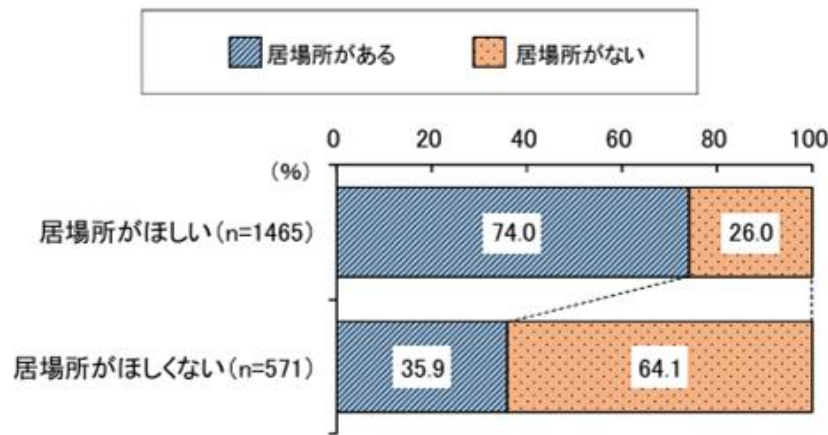
- 「第三の居場所がほしい」と67.4%が回答。2022年実施のWeb調査の72.0%より低い結果となった。
- 居場所の有無との関係では、「第三の居場所が欲しい」と思う人の過半数は「居場所がある」と回答していた一方、「居場所がない」が18.6%、「居場所があるかどうか分からない」も24.2%となった。居場所がない・分からない人においても居場所に対するニーズが一定数存在していることがうかがえた。

居場所ニーズ別、居場所の有無



【参考】2022年実施内閣官房によるWeb調査
内閣官房（2023）『こどもの居場所づくりに関する調査研究』

図表 38 居場所のニーズ³³別、居場所の有無³⁴



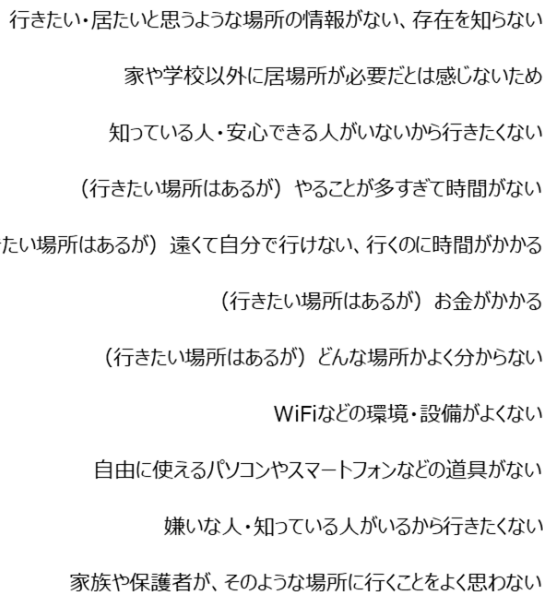
調査結果： 居場所がないのは「情報が無い」が5割以上



居場所がない理由

(n=174)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60%



- 第三の居場所がない理由として最も多かったのは「行きたい・居たいと思うような場所の情報がない、存在を知らない」の57.5%。居場所についての情報の不足が壁になっている可能性がある。
- 「行きたい場所はある」ものの、「時間がない」「遠くて自分で行けない」「お金がかかる」などの制約も15%程度となった。
- 翼小学校区では、情報の不足は43.5%に留まった

- 特に、高浜小学校区では、情報の不足、吉浜小学校は居場所真での距離、港小学校区では設備の不足や知り合いの不在が原因にあげられる傾向が見られた。

学区別、居場所がない理由	行きたい・居たいと思うような場所の情報がない、存在を知らない	(行きたい場所はあるが) やることが多すぎて時間がない	(行きたい場所はあるが) 遠くて自分で行けない、行くのに時間がかかる	(行きたい場所はあるが) お金がかかる	(行きたい場所はあるが) どんな場所がよく分からない	自由に使えるパソコンやスマートフォンなどの道具がない	WiFiなどの環境・設備がよくない	知っている人・安心できる人がいないから行きたくない	嫌いな人・知っている人がいるから行きたくない	家族や保護者が、そのような場所に行くことをよく思わない	家や学校以外に居場所が必要だとは思えないため
全体 (n=174)	57.5	15.5	15.5	13.8	7.5	5.2	6.3	16.1	3.4	2.3	33.3
高浜小学校区 (n=33)	72.7	27.3	12.1	21.2	3.0	6.1	12.1	12.1	6.1	3.0	33.3
吉浜小学校区 (n=66)	51.5	16.7	24.2	18.2	12.1	4.5	1.5	15.2	3.0	1.5	30.3
高取小学校区 (n=34)	58.8	5.9	5.9	0.0	5.9	8.8	2.9	11.8	2.9	0.0	41.2
港小学校区 (n=18)	66.7	5.6	5.6	11.1	5.6	5.6	22.2	33.3	5.6	5.6	11.1
翼小学校区 (n=23)	43.5	17.4	17.4	13.0	4.3	0.0	4.3	17.4	0.0	4.3	47.8

調査結果：

地域の居場所は「もっと長く」いられるようになってほしい



- 第三の居場所がある人の中で、居場所の種類ごとに居場所に求めることをみると、「地域の施設・場所」を居場所と感じている人では、「居場所にいることにお金がかからなくなってほしい」「開いている時間がもっと長くなってほしい」「もっと近くにあって通いやすくなってほしい」「自由に使えるWiFi環境やタブレット等があってほしい」が比較的高い傾向が見られた
- 地域の居場所については、「開いている時間」「より身近な場所」等、場所としての物理的な制約の緩和が求められており、「いつでも行ける・いられる場所」としてのニーズの高さが見られた

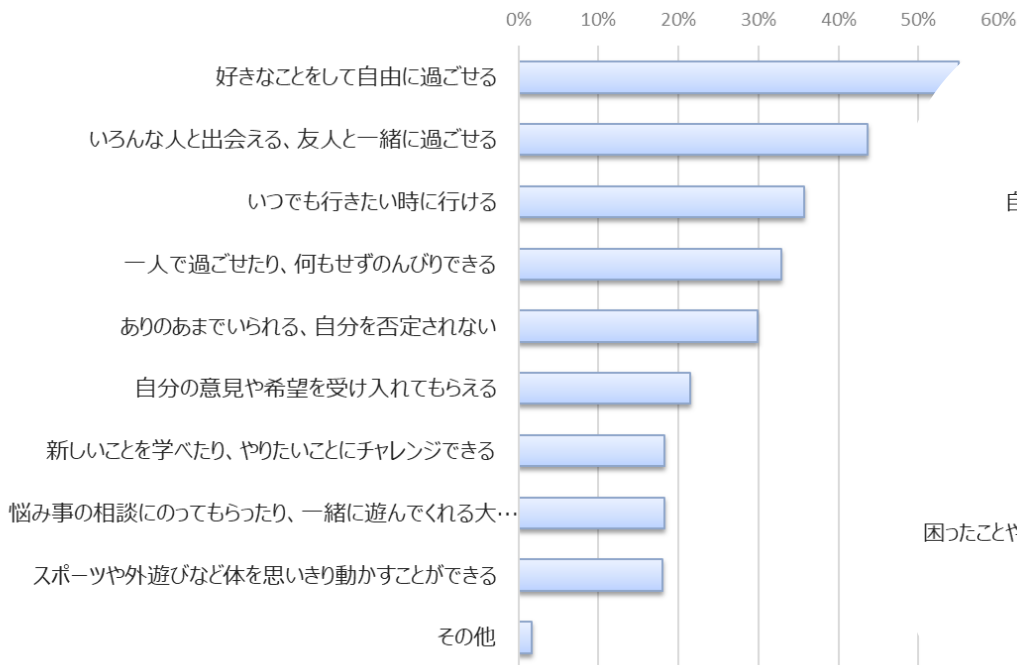
居場所の種類別、居場所に求めること	自分が好きなことや、興味のあることをしたい	自分が知らないことや新しいことに取り組みたい	あまり大人が口出ししないほしい	決まりやルールを減らして、自由にさせてほしい	話したいときに、自分の話を聞いてほしい	困っていることや悩み事を話したときに、味方になってほしい	大人に、子ども（自分たち）がどうしたいか聞いてほしい	大人に、子ども（自分たち）が取り組んでみたいことを応援してほしい	居場所にいることにお金がかからなくなってほしい	開いている時間ももっと長くなってほしい	もっと近くにあって通いやすくなってほしい	自由に使えるWiFi環境やタブレット等があってほしい	特になし
全体 (n=760)	53.2	27.2	23.8	23.2	20.3	18.4	8.9	9.5	24.9	16.4	22.8	27.9	15.8
親族の家・友達の家 (n=270)	47.0	30.7	18.1	20.4	17.0	15.9	7.8	10.0	14.8	13.3	19.6	21.5	22.6
習い事や塾など (n=122)	46.7	36.1	20.5	22.1	18.9	19.7	6.6	9.8	18.0	16.4	23.8	23.0	23.8
地域の施設・場所 (n=185)	49.7	34.1	24.9	24.3	19.5	15.7	7.6	11.4	24.3	22.2	27.6	29.7	14.6
オンライン空間 (n=79)	50.6	30.4	25.3	20.3	19.0	13.9	3.8	7.6	19.0	13.9	16.5	17.7	15.2

調査結果：居場所は「自分の好きなことができる場所」が5割超



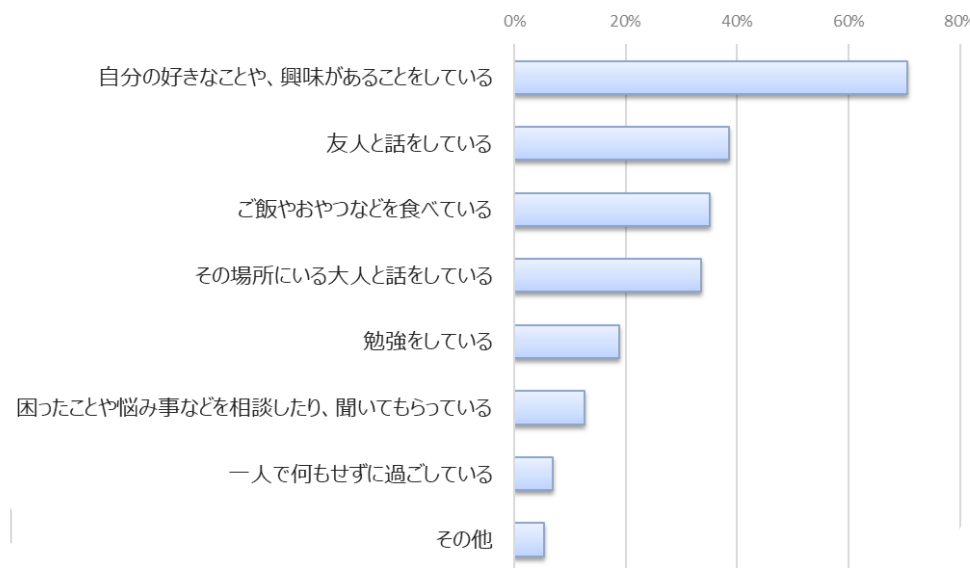
居場所の理由

(n=378)



居場所での過ごし方

(n=378)



- 居場所は「好きなことをして自由に過ごせる」場所と55.0%が感じており、実際に70.6%が「自分の好きなことや興味があること」をして過ごしていると回答した
- 「いろんな人と出会える、友人と一緒に過ごせる」ことも居場所の理由として43.7%が挙げており、実際に「友人」や「その場にいる大人」と話しているという回答もそれぞれ30%~40%となった

こども食堂の支援を通じて、誰も取りこぼさない社会をつくる。



認定NPO法人 全国こども食堂支援センター



<ロゴに込めた思い>

私たちは、「地域ににぎわいをつくりたい。そして、そこからこぼれる子どもをなくしたい」という思いで、全国こども食堂支援センター・むすびえを設立しました。その思いを少しでも共有してくださる方が、ここで結び会って欲しいという思いを込めて「むすびえ（結び会）」と名付けました。むすびえのロゴには、「こども食堂」「こども食堂の支援者」「未来の子どもたち」が結ばれ、彩のあるやさしい未来をつくりたいという思いを込めています。



參考資料





調査結果：中学生は「友達」、高校生は「ありのまま」が居場所の理由

学校年代別、居場所になった理由	一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる	いろんな人と出会う、友人と一緒に過ごせる	いつでも行きたい時にいける	ありのままでいい、自分を否定されない	好きなことをして自由に過ごせる	自分の意見や希望を受け入れてもらえる	新しいことを学べたり、やりたことにチャレンジできる	悩み事の相談にのってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる	スポーツや外遊びなど体を思いきり動かすことができる	その他
全体 (n=378)	32.8	43.7	35.7	29.9	55.0	21.4	18.3	18.3	18.0	1.6
小学生 (n=187)	28.3	46.5	33.7	24.1	54.5	25.1	21.4	18.2	26.2	1.6
中学生 (n=56)	25.0	53.6	30.4	23.2	46.4	16.1	21.4	16.1	21.4	1.8
高校生 (n=57)	36.8	28.1	43.9	43.9	61.4	24.6	14.0	26.3	5.3	3.5
大学生・専門学校生等 (n=4)	50.0	0.0	25.0	50.0	50.0	0.0	25.0	25.0	25.0	0.0
29歳以下の就学していない若者 (n=74)	45.9	43.2	39.2	37.8	58.1	14.9	10.8	13.5	4.1	0.0

学校年代別、居場所での過ごし方	自分の好きなことや、興味があることをしている	友人と話をしている	その場所にいる大人と話をしている	勉強をしている	困ったことや悩み事などを相談したり、聞いてもらっている	ご飯やおやつなどを食べている	一人で何もせずに過ごしている	その他
全体 (n=378)	70.6	38.6	33.6	18.8	12.7	35.2	6.9	5.3
小学生 (n=187)	73.3	38.5	35.8	20.3	12.8	42.2	3.7	5.9
中学生 (n=56)	71.4	48.2	37.5	23.2	16.1	26.8	5.4	8.9
高校生 (n=57)	64.9	28.1	40.4	17.5	10.5	31.6	12.3	3.5
大学生・専門学校生等 (n=4)	75.0	25.0	25.0	0.0	25.0	25.0	25.0	0.0
29歳以下の就学していない若者 (n=74)	67.6	40.5	20.3	13.5	10.8	27.0	10.8	2.7

● 学校年代別では、小学生にとっては「思いきり体を動かせる」、中学生では「友達と一緒に」、高校生では「ありのまま・自由に過ごせる」、就学していない若者にとっては「何もせずのんびり」が比較的重要となっていることが分かった。

調査結果：地域の居場所は「相談等によってくれる大人」が低い傾向

- 地域の施設や場所については「いつでも行きたいときに行ける」傾向があるものの、「悩みの相談によってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる」は低い傾向にあった。
- 学区別では、「翼小学校区」では、「いろいろな人と出会える、友人と一緒に過ごせる」「悩みの相談に乗ってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる」が高い傾向があった。

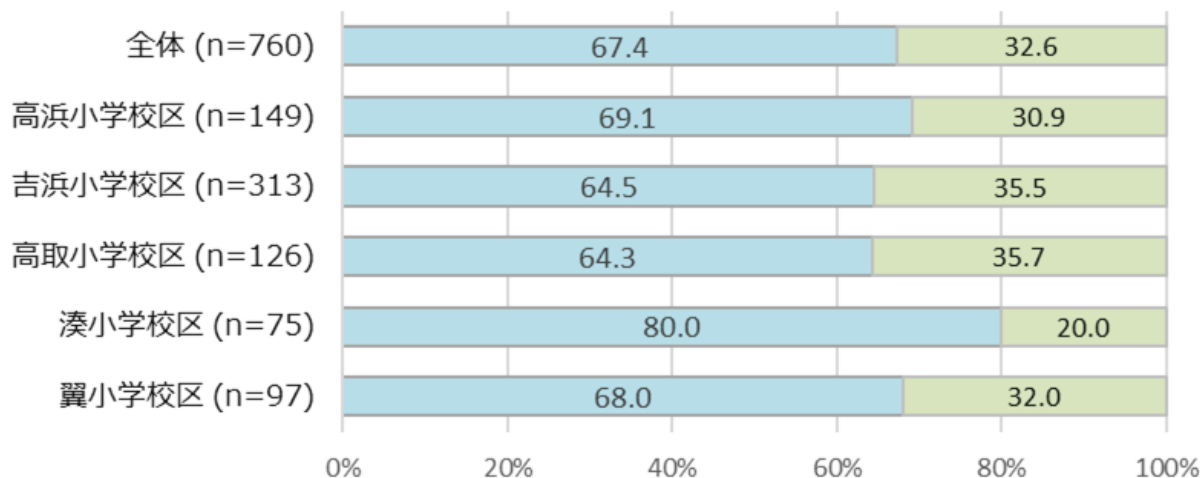
1番の居場所とその理由	一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる	いろいろな人と出会える、友人と一緒に過ごせる	いつでも行きたいときに行ける	ありのままでいられる、自分を否定されない	好きなことをして自由に過ごせる	自分の意見や希望を受け入れてもらえる	新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる	悩み事の相談によってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる	スポーツや外遊びなど体を思いきり動かすことができる	その他
全体 (n=378)	32.8	43.7	35.7	29.9	55.0	21.4	18.3	18.3	18.0	1.6
親戚の家・友達の家 (n=209)	31.6	36.4	39.2	30.6	56.5	27.3	12.4	21.1	10.5	0.5
習い事や塾など (n=49)	8.2	59.2	4.1	20.4	28.6	16.3	57.1	24.5	51.0	2.0
地域の施設・場所 (n=67)	41.8	46.3	43.3	17.9	56.7	4.5	11.9	4.5	28.4	4.5
オンライン空間 (n=43)	53.5	55.8	37.2	51.2	76.7	25.6	11.6	20.9	2.3	0.0

学区別、居場所の理由	一人で過ごせたり、何もせずのんびりできる	いろいろな人と出会える、友人と一緒に過ごせる	いつでも行きたいときに行ける	ありのままでいられる、自分を否定されない	好きなことをして自由に過ごせる	自分の意見や希望を受け入れてもらえる	新しいことを学べたり、やりたいことにチャレンジできる	悩み事の相談によってもらったり、一緒に遊んでくれる大人がいる	スポーツや外遊びなど体を思いきり動かすことができる	その他
Total (n=378)	32.8	43.7	35.7	29.9	55.0	21.4	18.3	18.3	18.0	1.6
高浜小学校区 (n=81)	28.4	44.4	35.8	28.4	50.6	17.3	11.1	18.5	16.0	2.5
吉浜小学校区 (n=152)	33.6	42.8	36.2	26.3	53.3	21.7	21.7	16.4	19.7	2.0
高取小学校区 (n=55)	47.3	40.0	32.7	40.0	61.8	23.6	20.0	12.7	10.9	0.0
湊小学校区 (n=42)	33.3	40.5	42.9	33.3	61.9	28.6	19.0	21.4	23.8	0.0
翼小学校区 (n=48)	20.8	52.1	31.3	29.2	54.2	18.8	16.7	27.1	18.8	2.1

調査結果： 第三の居場所が欲しいのは？



■ 第三の居場所が欲しい ■ 第三の居場所が欲しいとは思わない



- 学区別に見てみると、湊小学校区で「第三の居場所が欲しい」が80.0%となっており、ニーズの高さがうかがえる結果となった。

- その他、「第三の居場所が欲しい」が高い傾向にあったのは、以下の通り（カッコ内は回答割合）
 - 自分の配偶者・子どもと同居している場合（82.4%、76.2%）、一人暮らしの場合（76.2%）
 - 働いている場合（77.1%）
 - 両親が離婚している場合（81.8%）。
 - 海外ルーツがある場合（74.4%）。
 - 家計の不安がある場合（72.2%）。
 - 自分の家が居場所になっていない場合（81.8%）。
 - 地域、友達の家、インターネット空間、習い事や趣味のサークルが第三の居場所になっている場合（85.9%、84.6%、82.3%、74.6%）
 - 相談できる相手がいない場合（74.1%）
 - 朝食を食べない場合（76.7%）
 - 夕食を一人で食べている場合（80.0%）、または一人で夕食を食べる日がある場合（77.1%）。

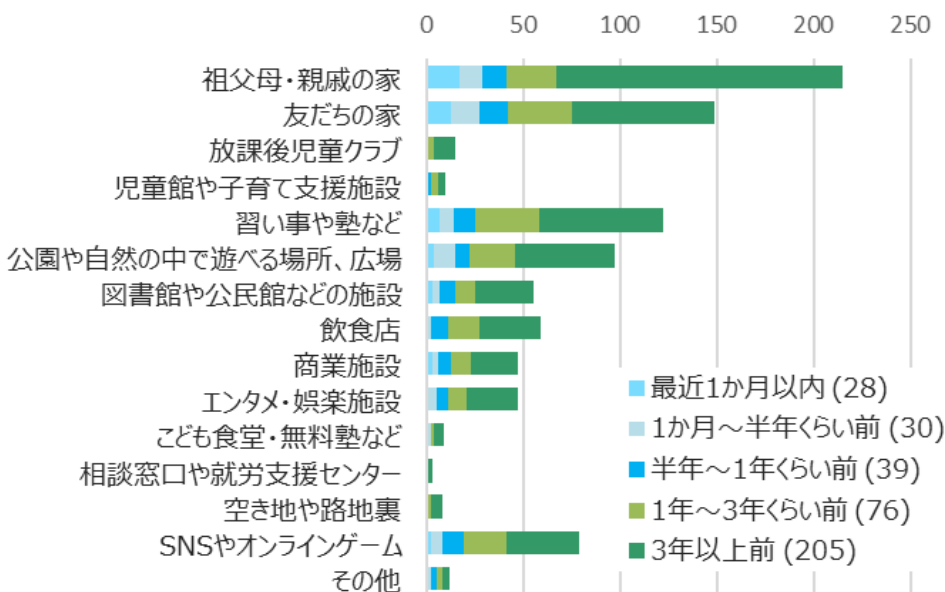
「週に1回以上」居場所に行くが5割以上



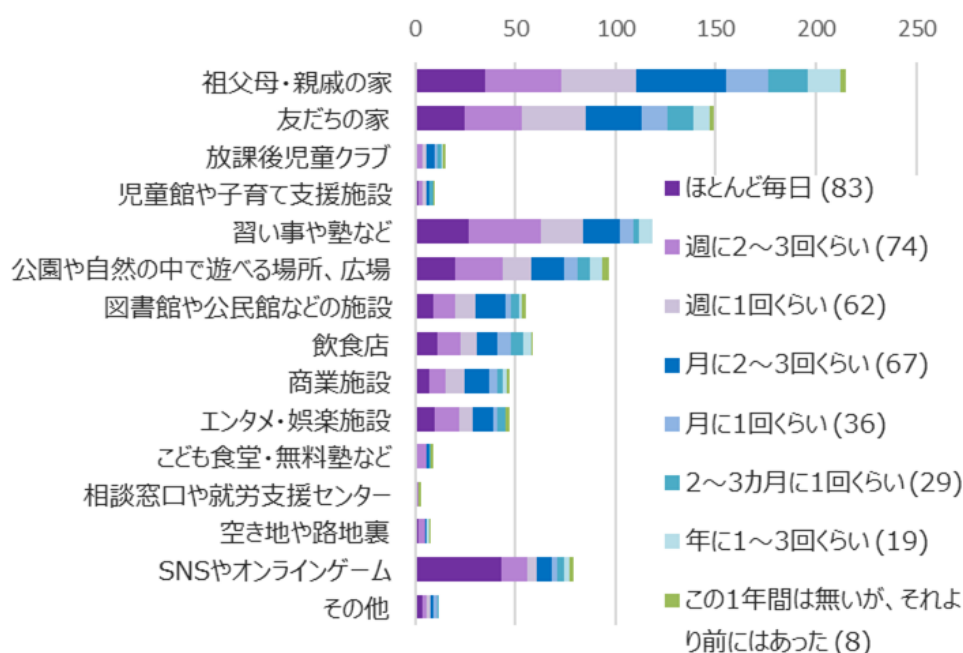
- 居場所になった時期については、「1年以上前から」居場所になっているという回答が74.3%。
- 特に「放課後児童クラブ」「児童館」「祖父母・親戚の家」で高い傾向があった。

- 居場所に行く頻度としては、57.9%が「週に1回以上」居場所に行っているという回答。
- 特に「SNSやオンラインゲーム」「習い事や塾など」において「週に1回以上」の割合が高かった（それぞれ、77.2%、68.9%）。

いつから居場所になっているか (n=378)

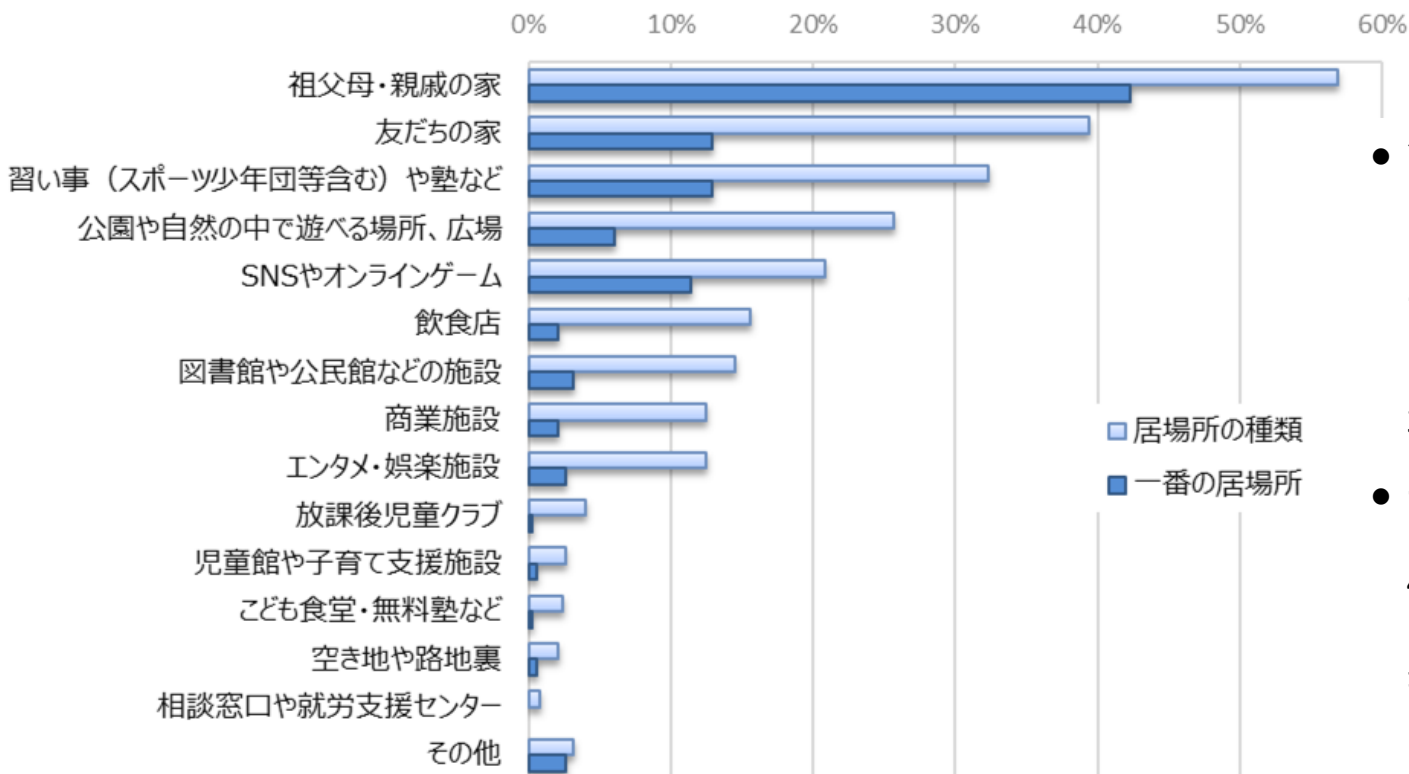


居場所に行く頻度 (n=378)





居場所の種類 (居場所がある人 n=378)



- 第三の居場所があると回答した人のうち、56.9%が「祖父母・親戚の家」が第三の居場所と回答。次いで、「友だちの家」が39.4%、「習い事や塾など」が32.3%。
- 一番の居場所としては、「祖父母・親戚の家」が42%と最も高く、次いで「友だちの家」「習いごとや塾など」「SNSやオンラインゲーム」が11~13%となった。

- 特に、「祖父母・親戚の家」や「SNSやオンラインゲーム」については「一番の居場所」と回答した割合が高く、反対に「公園や自然の中で遊べる場所、広場」や「飲食店」「図書館や公民館などの施設」は複数ある中の一つの居場所となっている傾向が見られた。
- その他としては、「サークル」「馬小屋」「お寺」「駅、電車内」「車」「高浜ふれあいプラザ」「夜の無人の公園」など。



調査結果： 小中学生では「習い事や塾」「公園など遊べる場所」が高い

- 学校年代別では、第三の居場所の有無に有意な違いはなかった。
- 第三の居場所の種類をしてみると、
 - 小学生では「祖父母・親戚の家」「習い事や塾」「公園や自然の中で遊べる場所」が多い傾向
 - 中学生では「公園や自然の中で遊べる場所」が多い傾向
 - 高校生では「図書館や公民館などの施設」「飲食店」が多い傾向
 - 29歳以下の就学していない若者では「SNSやオンラインゲーム」が多い傾向

第三の居場所 (年代別内訳)	祖父母・親戚の家	友だちの家	放課後児童クラブ	児童館や子育て支援施設	習い事(スポーツ少年団等含む)や塾など	公園や自然の中で遊べる場所、広場	図書館や公民館などの施設	飲食店	商業施設	エンタメ・娯楽施設	こども食堂・無料塾など	相談窓口や就労支援センター	空き地や路地裏	SNSやオンラインゲーム
全体 (n=378)	56.9	39.4	4.0	2.6	32.3	25.7	14.6	15.6	12.4	12.4	2.4	0.8	2.1	20.9
小学生 (n=187)	65.8	44.4	6.4	3.7	44.9	31.6	13.9	8.6	7.5	8.0	4.8	1.1	3.2	16.6
中学生 (n=56)	53.6	41.1	3.6	5.4	39.3	32.1	14.3	16.1	14.3	10.7	0.0	0.0	0.0	16.1
高校生 (n=57)	45.6	31.6	0.0	0.0	14.0	17.5	19.3	21.1	14.0	15.8	0.0	0.0	1.8	26.3
大学生・専門学校生等 (n=4)	50.0	50.0	0.0	0.0	25.0	25.0	25.0	25.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
29歳以下の就学していない若者 (n=74)	45.9	31.1	1.4	0.0	9.5	12.2	12.2	28.4	23.0	21.6	0.0	1.4	1.4	32.4

参考（小学低学年生へのグループインタビュー/アンケートから） 居場所になっているのは、自分の家や商業施設など



居場所

自分の家	38
自分の部屋	4
お兄ちゃんの部屋	1
家のソファ	3
こたつ	1
車・バイク	3
学校	11
図書室	1
第三の居場所	65
祖父母の家	14
友だちの家	8
塾・習い事	2
地域にある場所	18
商業施設・飲食店	23
オンライン空間	0
不明	2
無回答	1
合計	44

1番の居場所と過ごし方

自分の家	25	ゲーム、いつもの場所
自分の部屋	1	読書
学校	1	遊ぶ
第三の居場所	14	
祖父母の家	4	遊ぶ、タブレット
友だちの家	2	遊ぶ
地域にある場所	3	友だちと遊ぶ、読書、作品を作る
商業施設・飲食店	5	遊ぶ
オンライン空間	0	

公園、クラブ室、
児童センター、
ふれあいプラザ

スポッチャ、ドミー、
イオン、マック

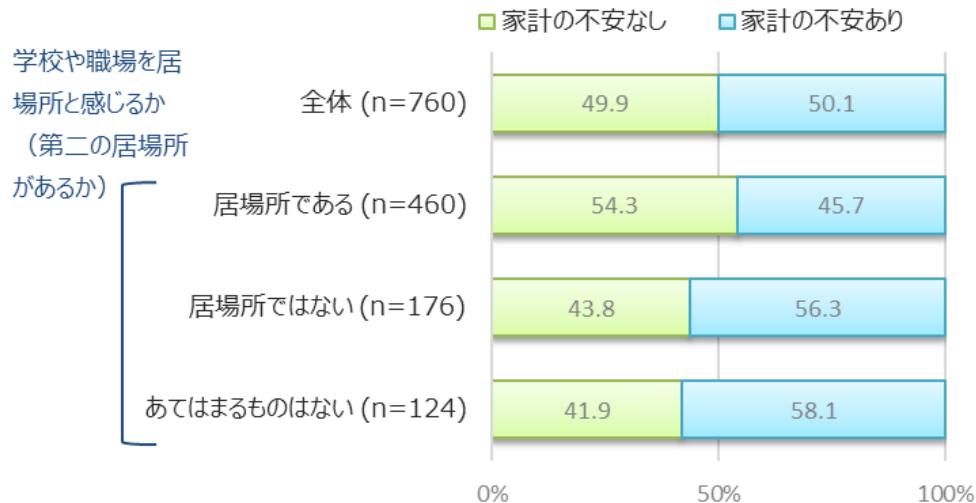
- 「自分の家」については、居場所として最初にあげられた割合が最も高かった。
- 第三の居場所としては、「祖父母の家」の他、様々な場所が記載されていた。

調査結果：

学校や職場が居場所でない場合、第三の居場所も「ない」傾向



自分の家の経済状況についての不安
(第二の居場所別)



- 学校（クラブ活動を含む）や職場など、「第二の居場所」があるかどうかで家計への不安を比較すると、第二の居場所がない場合、家計の不安が高い結果となった。
- また、第二の居場所がある場合、両親と同居している割合、両親が結婚している割合が高い。
- 第三の居場所との関係を見てみると、学校や職場が第二の居場所になっていない場合、第三の居場所も「ない」割合が高く、第二の居場所にあてはまるものがない場合、第三の居場所があるかどうか「分からない」が高い。

→ 第二の居場所がない層に、第三の居場所を提供する取り組みが必要となっていることがうかがえる。

		第三の居場所		
		ある	ない	分からない
全体 (n=760)		49.7	22.9	27.4
学校や職場	居場所になっている (n=460)	+++57.0	---19.6	---23.5
	居場所になっていない (n=176)	---38.6	+++32.4	29.0
	あてはまるものはない (n=124)	--38.7	21.8	+++39.5

調査概要（調査デザイン）

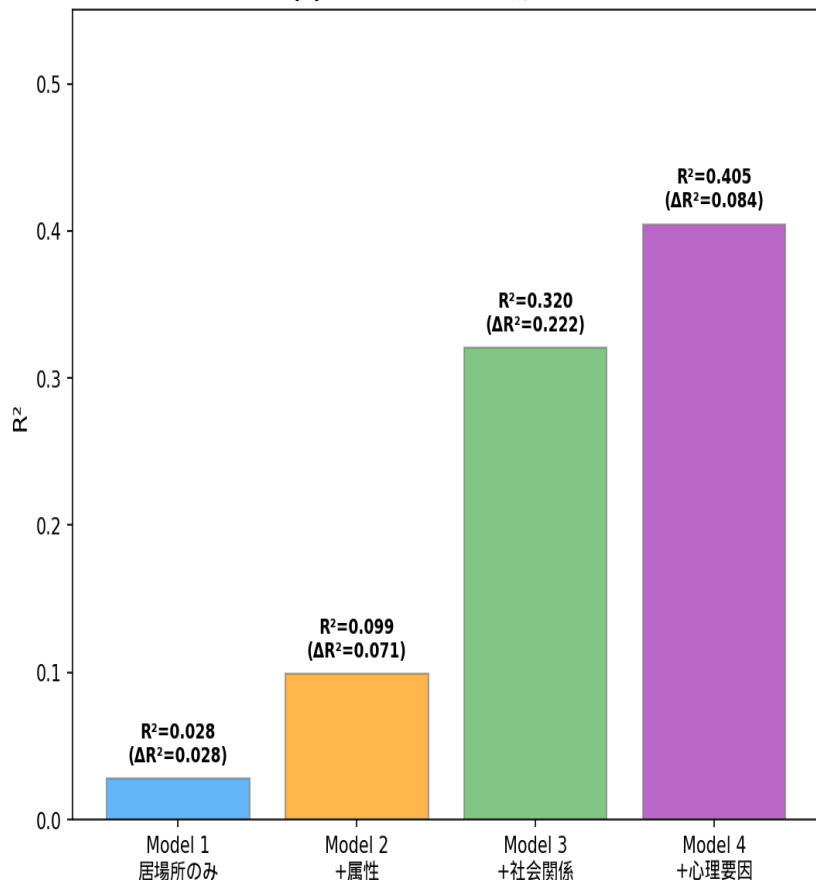


項目	内容
調査名称	高浜市「まぜこぜの居場所」実態調査 2025
調査方法	郵送によるオンライン回答（Questant利用）
調査対象	高浜市在住の小学4年生～30歳未満（5,000人抽出） 10～18歳: 4,000人 / 19～29歳: 1,000人（14歳以下は親が代理回答）
有効回答	N = 760名
多言語対応	ベトナム語・ポルトガル語の翻訳版あり
基本属性	生年月日、性別、住所／小学校区、家族構成、学歴・職歴、家庭の経済状況、親の学歴
説明変数	居場所（種類・参加頻度・理由）、SC（信頼感・地域参加・助け合い）、家族関係、外出頻度、食事
目的変数（アウトカム）	孤独感（UCLA） 、生活満足度、協調的幸福感（IHS）、主観的幸福感、自己肯定感、レジリエンス

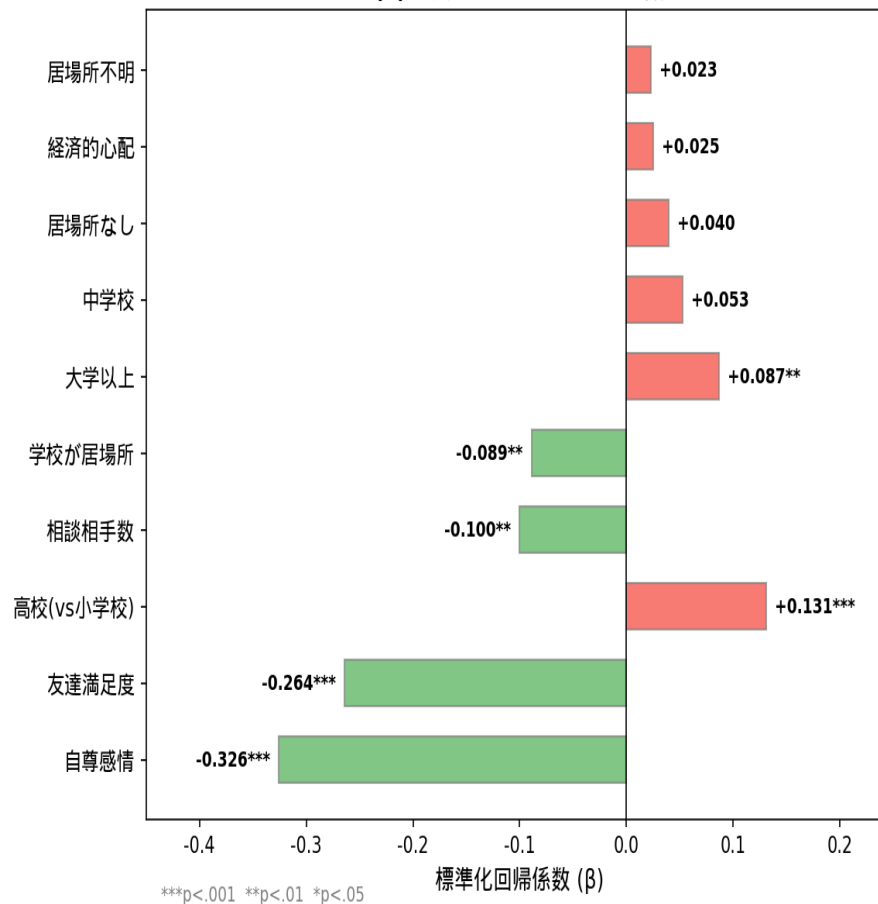
階層的重回帰分析の結果



(a) 階層的重回帰分析：説明力の推移



(b) 最終モデル：標準化回帰係数

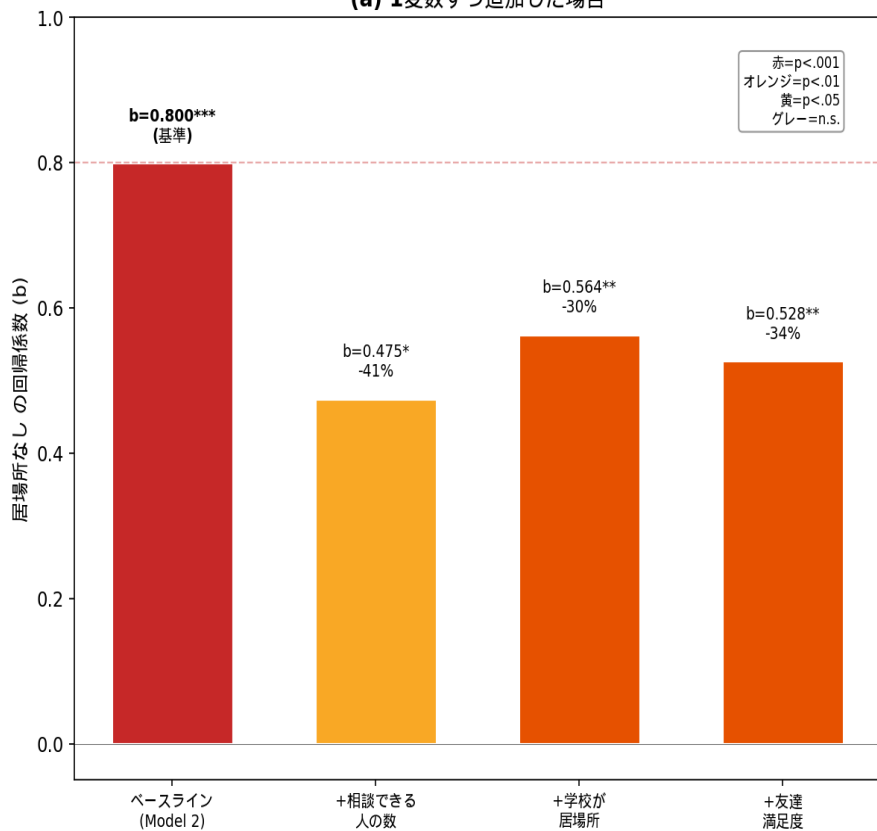


媒介分析：居場所→愛着→孤独感

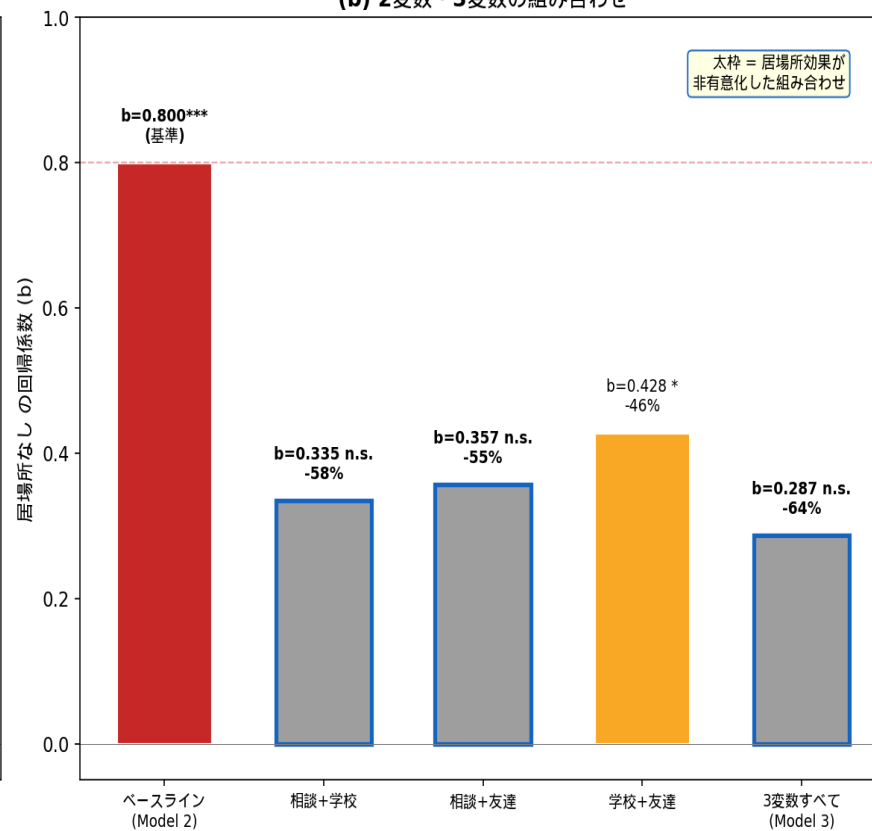


Model 3の社会関係変数：居場所効果の媒介分析

(a) 1変数ずつ追加した場合



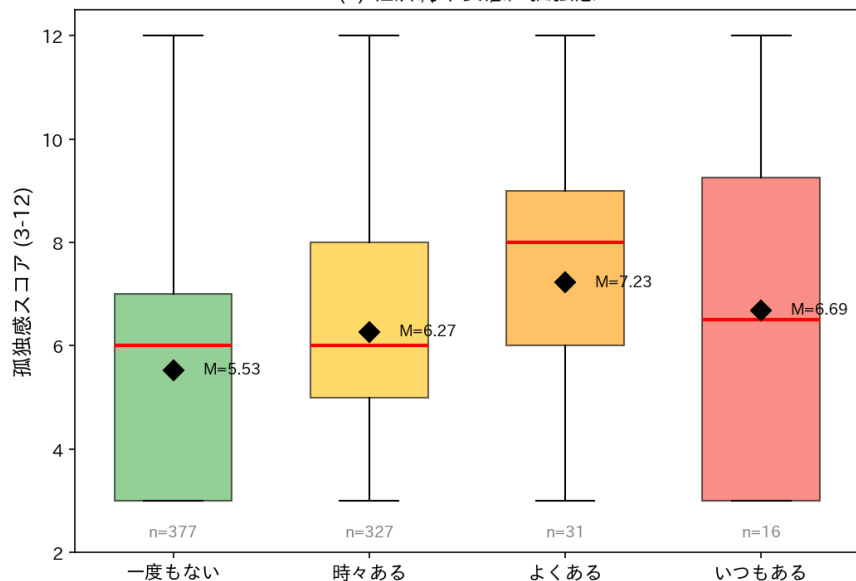
(b) 2変数・3変数の組み合わせ



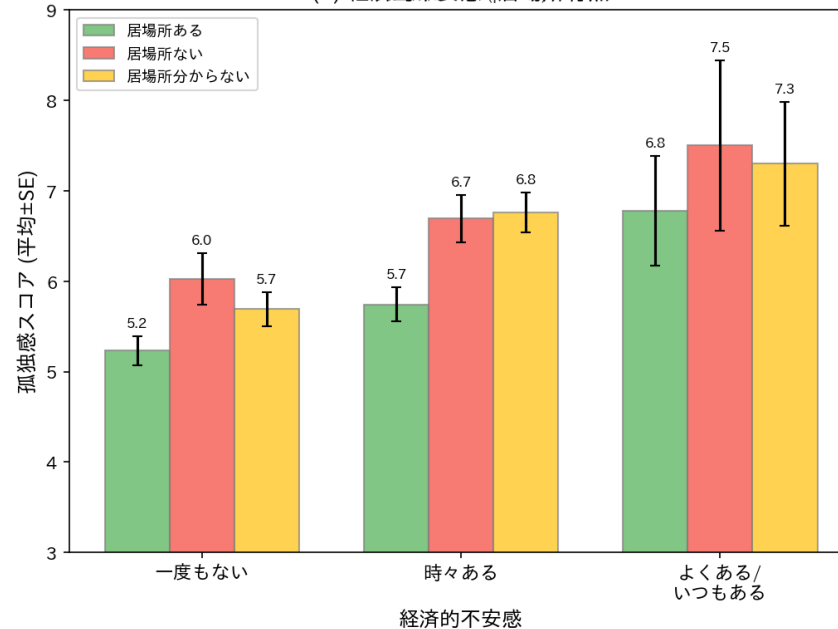
経済的不安感と孤独感



(a) 経済的不安感と孤独感



(b) 経済的不安感×居場所所有無



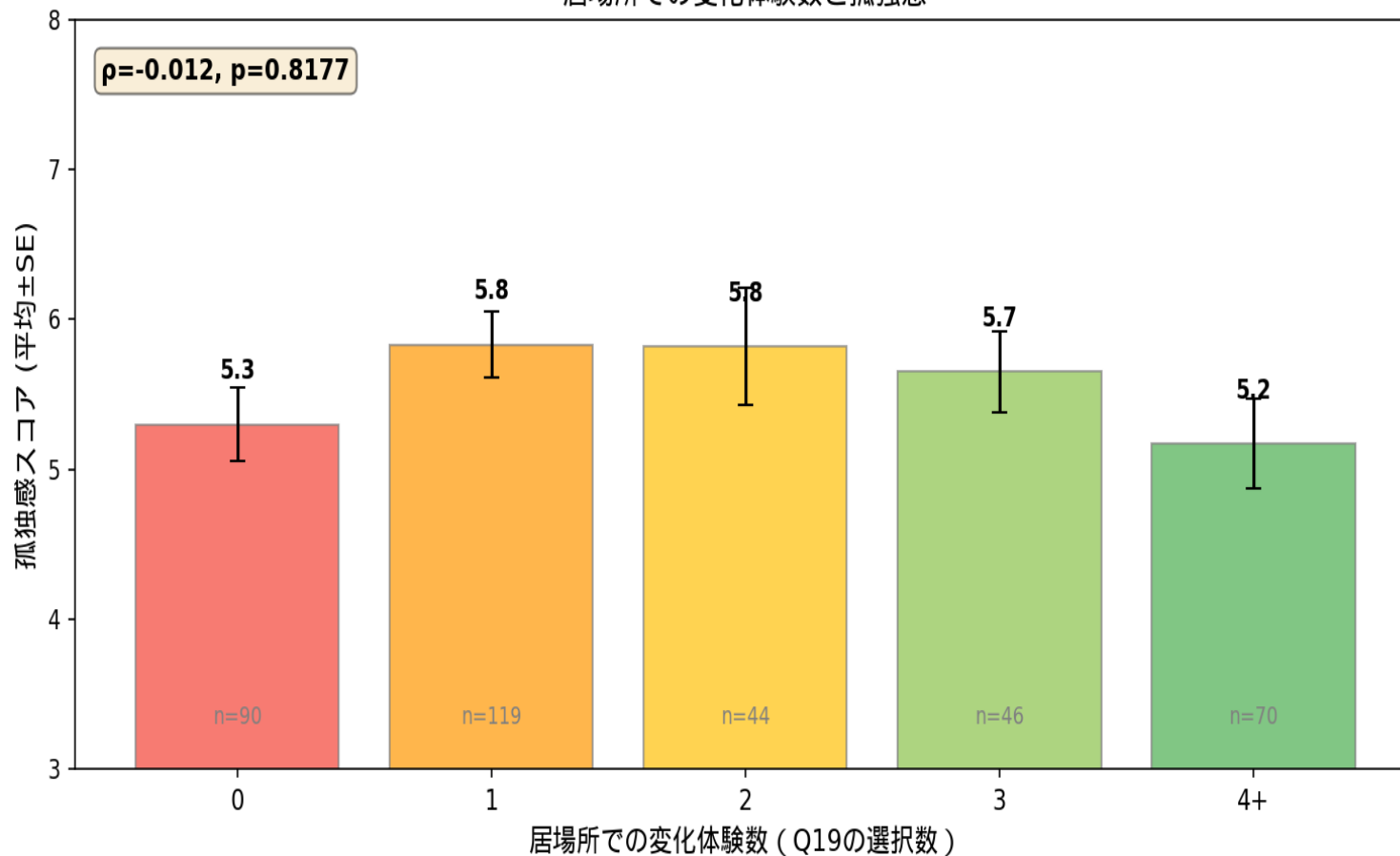
二変量: $F=9.82, p<.001, \eta^2=.038$ / 多変量 (心理要因統制後): $\beta=0.049, n.s. (p=.10)$ / 交互作用 (居場所×経済不安): $n.s. (p=.99)$

→ 経済的不安感は単独では孤独感と関連するが、自己効力感・愛着を統制すると独自の説明力は消失。心理的要因を介した間接的影響の可能性。

居場所での変化体験と孤独感



居場所での変化体験数と孤独感





1. 対面型居場所の拡充

習い事・塾 ($d=-0.41$)、友達の家 ($d=-0.38$)、祖父母宅 ($d=-0.35$) が有意に孤独感を低下。対面での継続的な人間関係を伴う場が重要。

2. SNS依存への対応

SNSを居場所とする群は孤独感が最も高い ($d=+0.60$)。因果の方向は要検討だが、オンラインに依存する子どもへの対面型居場所への橋渡し支援が必要。

3. 愛着形成を促す場づくり

愛着 ($\beta=-0.246$) が居場所効果の媒介変数。安定した大人との関係性を育む環境設計が居場所施策の核心。

4. 自己効力感の支援

自己効力感 ($\beta=-0.316$) は最大の保護因子。居場所での「変化体験」（新しいことへの挑戦、自己決定の経験など）が孤独感低減に寄与。成功体験を積める活動プログラムの設計が有効。

5. 相談体制の整備

相談人数 ($\beta=-0.089$) が独立した保護因子。0人群 ($M=7.3$) は深刻なリスク群。相談相手のいない子どもの早期発見と信頼できる大人とのマッチングが急務。

6. 経済的困窮への留意

経済的不安感は二変量では有意だが、心理要因を介した間接効果の可能性。経済支援と心理支援の両輪アプローチが重要。



分析の要約

高浜市の子ども・若者（n=751）を対象にUCLA孤独感尺度短縮版（3-12点）を用いて分析。
居場所の有無、種類、心理的メカニズム、経済的不安感との関連を多面的に検討した。

主要な知見

- (1) 居場所「ある」群は「ない」群より孤独感が有意に低い（ $\eta^2=.028$ ）。学校適応の効果量は大（ $d=0.73$ ）。
- (2) 居場所の種類では、習い事・友達の家・祖父母宅が保護的、SNSはリスク要因（Bonferroni補正後も有意）。
- (3) 階層的回帰の結果、自己効力感（ $\beta=-0.316$ ）と愛着（ $\beta=-0.246$ ）が最も強い保護因子。
- (4) 居場所の効果は愛着を媒介して間接的に孤独感を低減する（媒介分析で確認）。
- (5) 経済的不安感は二変量では有意（ $\eta^2=.038$ ）だが、心理要因を統制すると非有意（ $\beta=0.049, n.s.$ ）。

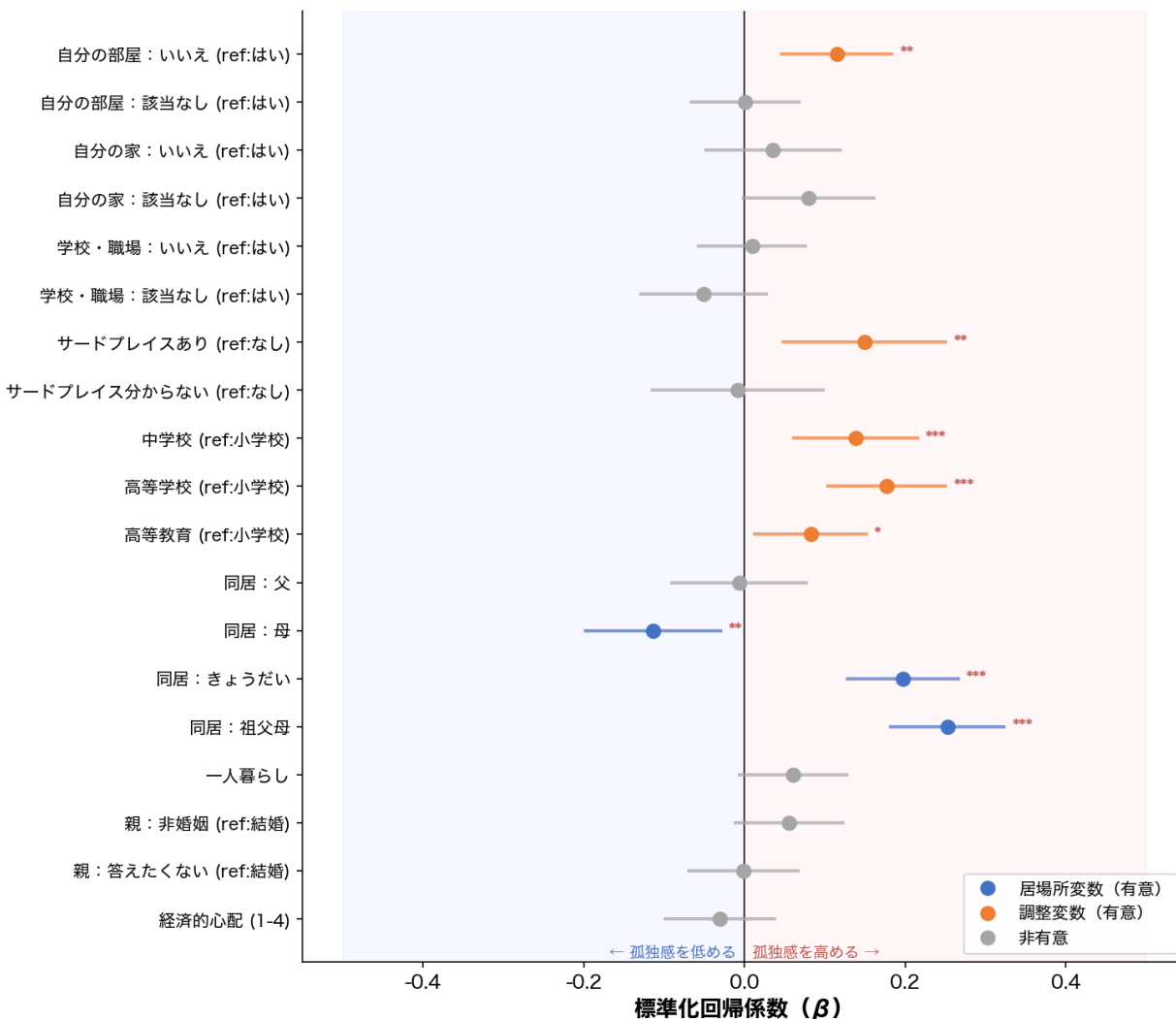
実践への示唆

対面型・関係性重視の居場所整備、SNS依存の子どもへの対面型橋渡し支援、
愛着形成と自己効力感を高めるプログラム設計、相談相手のいない子どもの早期把握が重要。

様々な要因を同時に考慮しても関連がある



標準化回帰係数 (β) と95%信頼区間



- 分析Model 1 (基本調整変数のみ)

サードプレイス「ある」の $B = -0.78$ ($p < .001$)、調整済み $R^2 = 0.100$

- 分析Model 2 (居場所感Q10追加)。サードプレイス「ある」の $B = -0.36$ ($p = .06$)、調整済み $R^2 = 0.178$

- Model 2で居場所を投入するとサードプレイスの効果が減少したことは、**効果の一部 (-0.78から-0.36に約54%減少) が居場所を媒介していることを示唆する。**

- 自己肯定感・友人接触・地域信頼が媒介経路として有力。



居場所と孤独感との関連

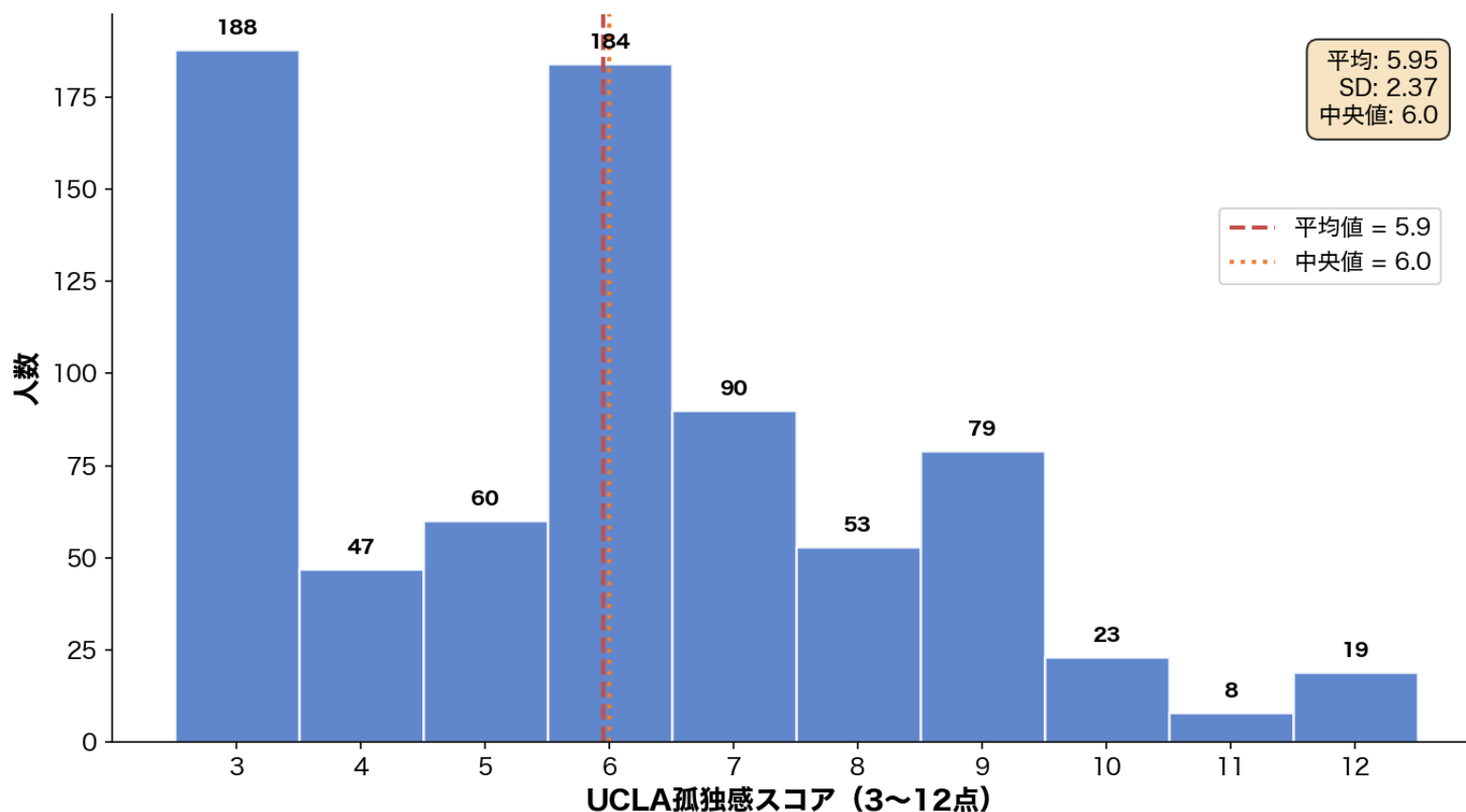




UCLA孤独感尺度の分布

- 全体平均 5.57 (SD=2.29)。最頻値は3点 (最低得点) で全体の27.0%を占める。
- 右に裾を引く分布であり、多くの保護者は低い孤独感を示すが、高得点者も一定数存在。

UCLA孤独感スコアの分布 (N=763)

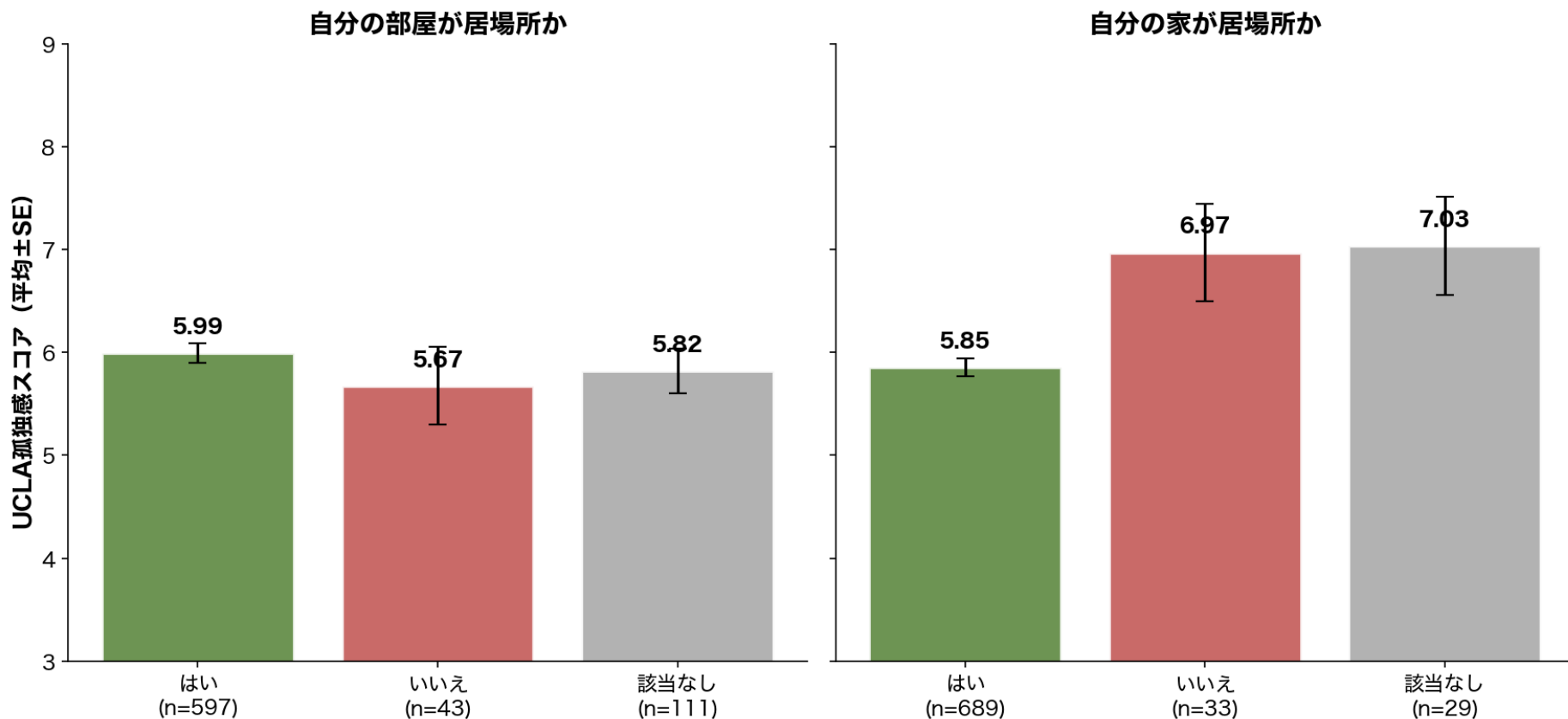


家庭の居場所（第1の居場所）と孤独感



- 自分の部屋が居場所及び自分の家が居場所回答しているほど、孤独感が低い傾向。
- 家庭内での居場所の有無が、孤独感と関連している可能性を示唆。

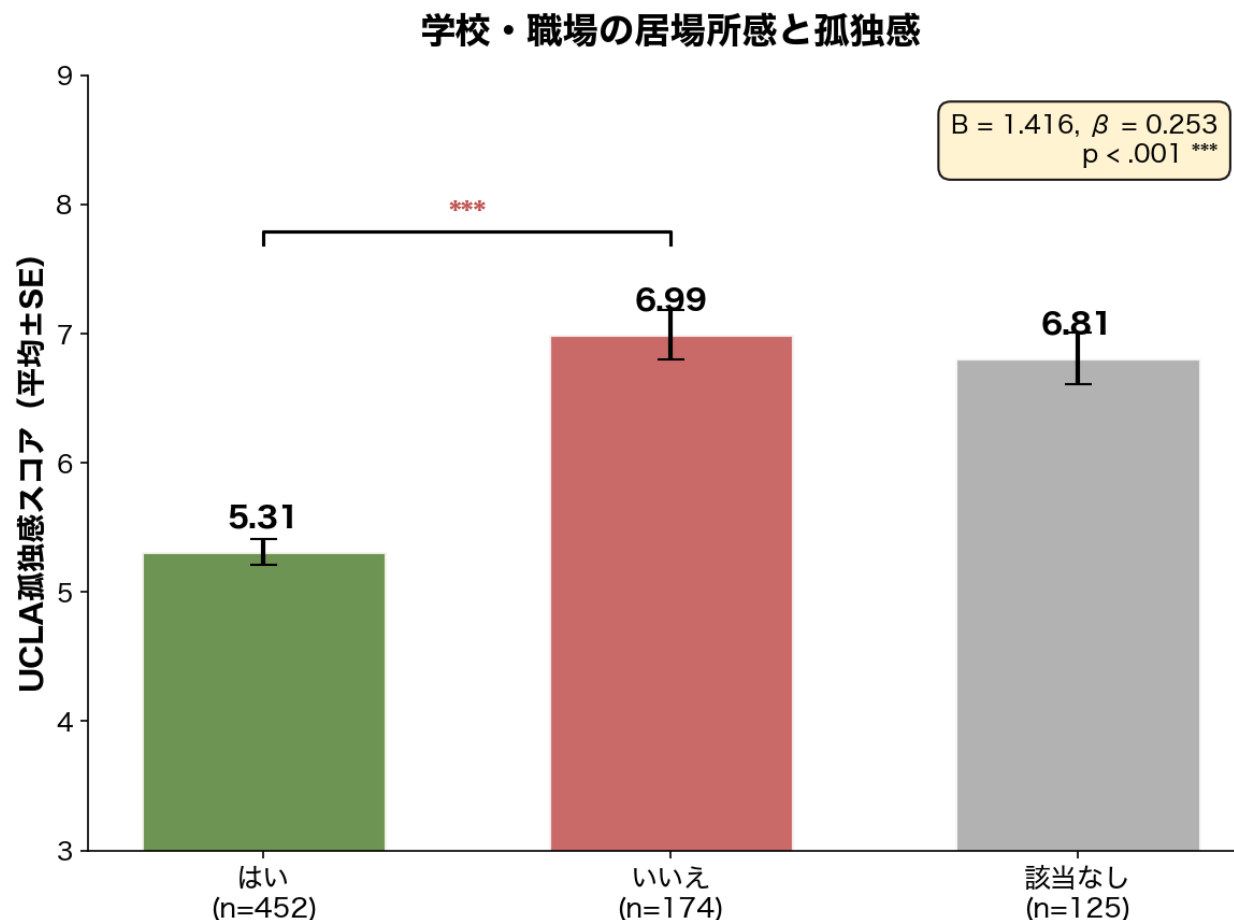
1st/2nd Place（自分の部屋・家）の居場所感と孤独感



学校・職場（第2の居場所）と孤独感



- 学校・職場における居場所の有無と、孤独感は関連がある。
- 学校・職場が居場所である（はい）と答えている者より、いいえと答えていると1.68点孤独感が高い。

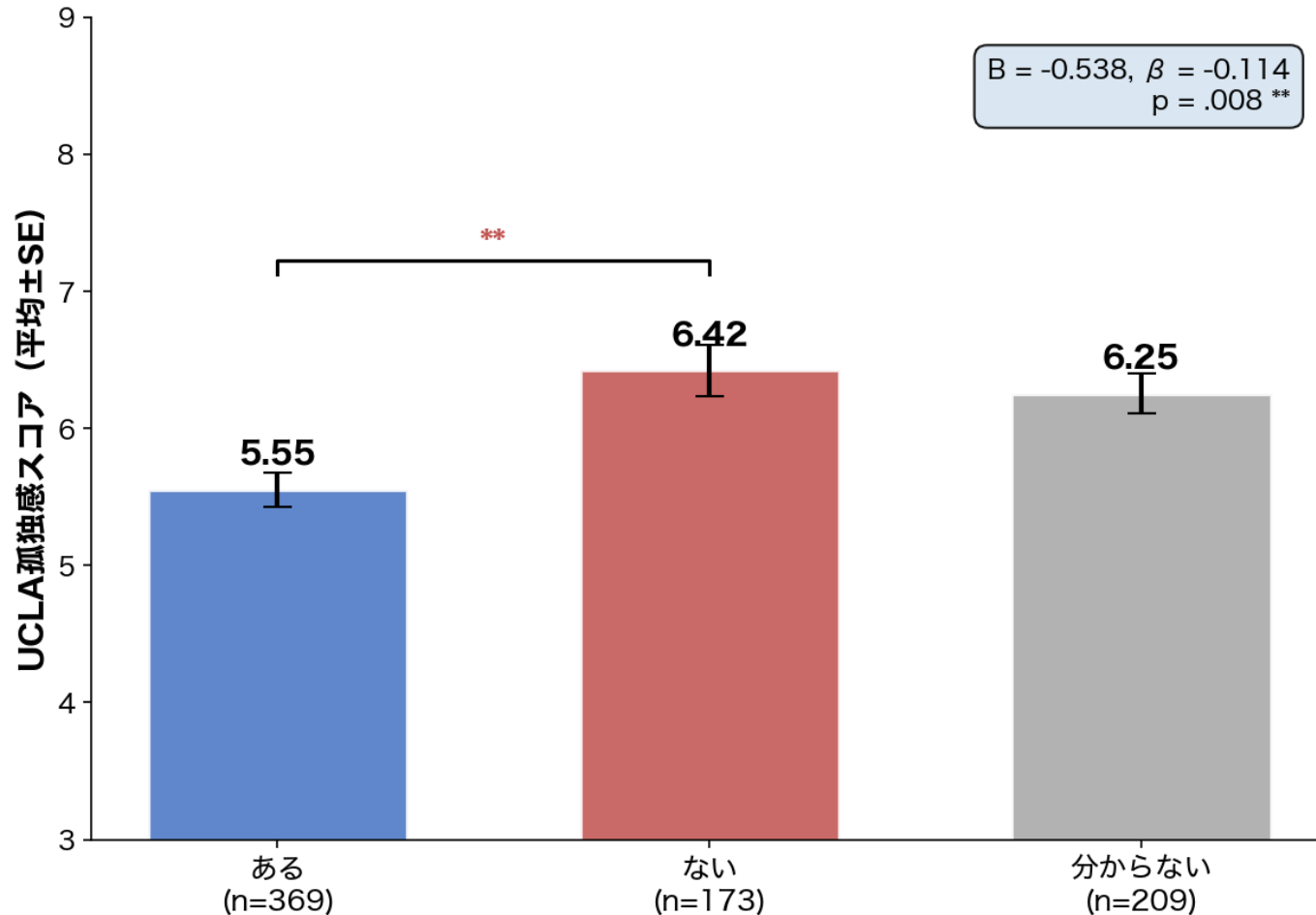


サードプレイス（第3の居場所）と孤独感



- サードプレイスがあると回答していると、孤独感が約0.8ポイント低い。

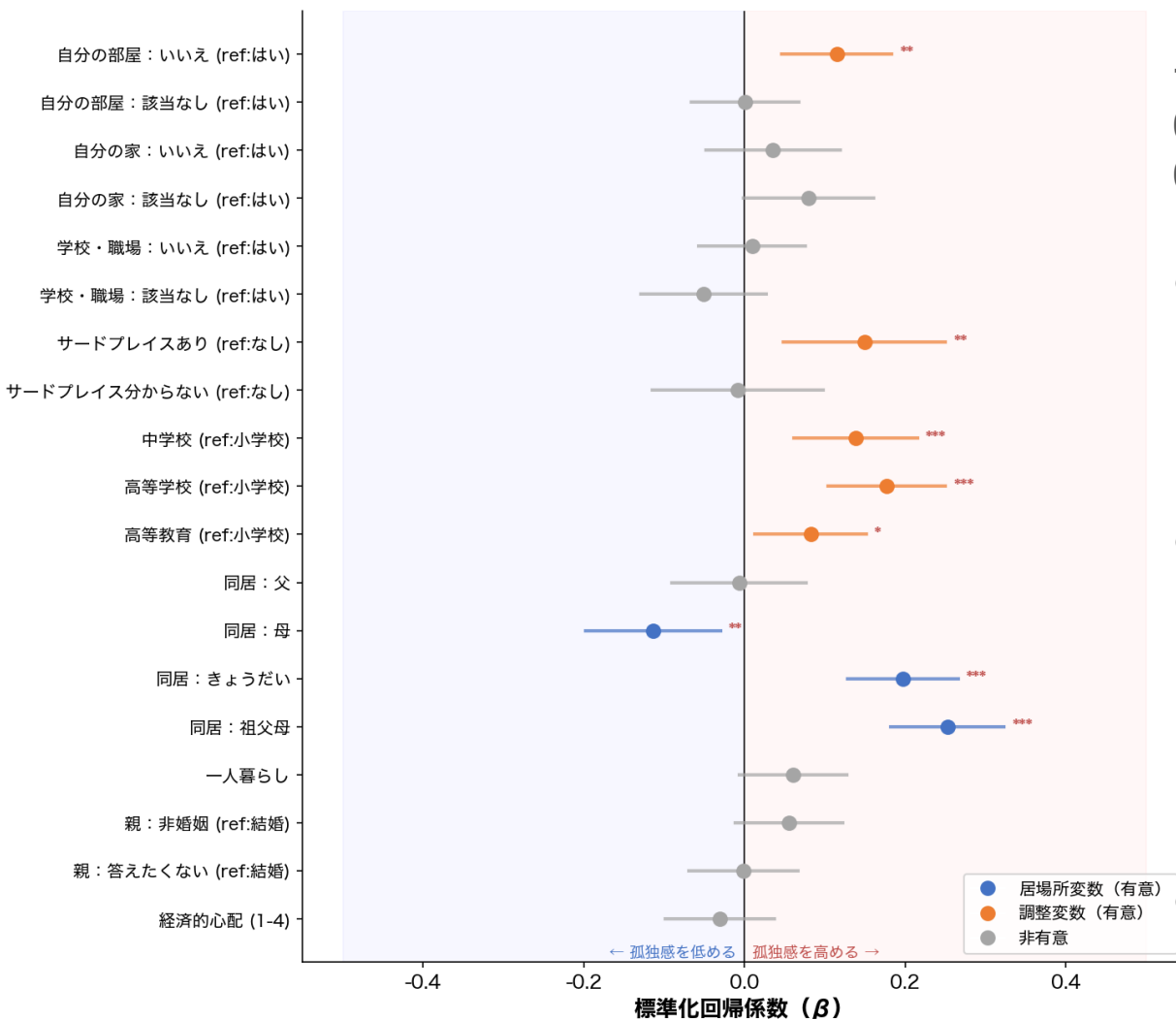
サードプレイス（第3の居場所）の有無と孤独感



様々な要因を同時に考慮しても関連がある



標準化回帰係数 (β) と95%信頼区間



- 分析Model 1 (基本調整変数のみ)

サードプレイス「ある」の $B = -0.78$ ($p < .001$)、調整済み $R^2 = 0.100$

- 分析Model 2 (居場所感Q10追加)。サードプレイス「ある」の $B = -0.36$ ($p = .06$)、調整済み $R^2 = 0.178$

- Model 2で居場所感を投入するとサードプレイスの効果が減少したことは、**効果の一部 (-0.78から-0.36に約54%減少)**が居場所感を媒介していることを示唆する。

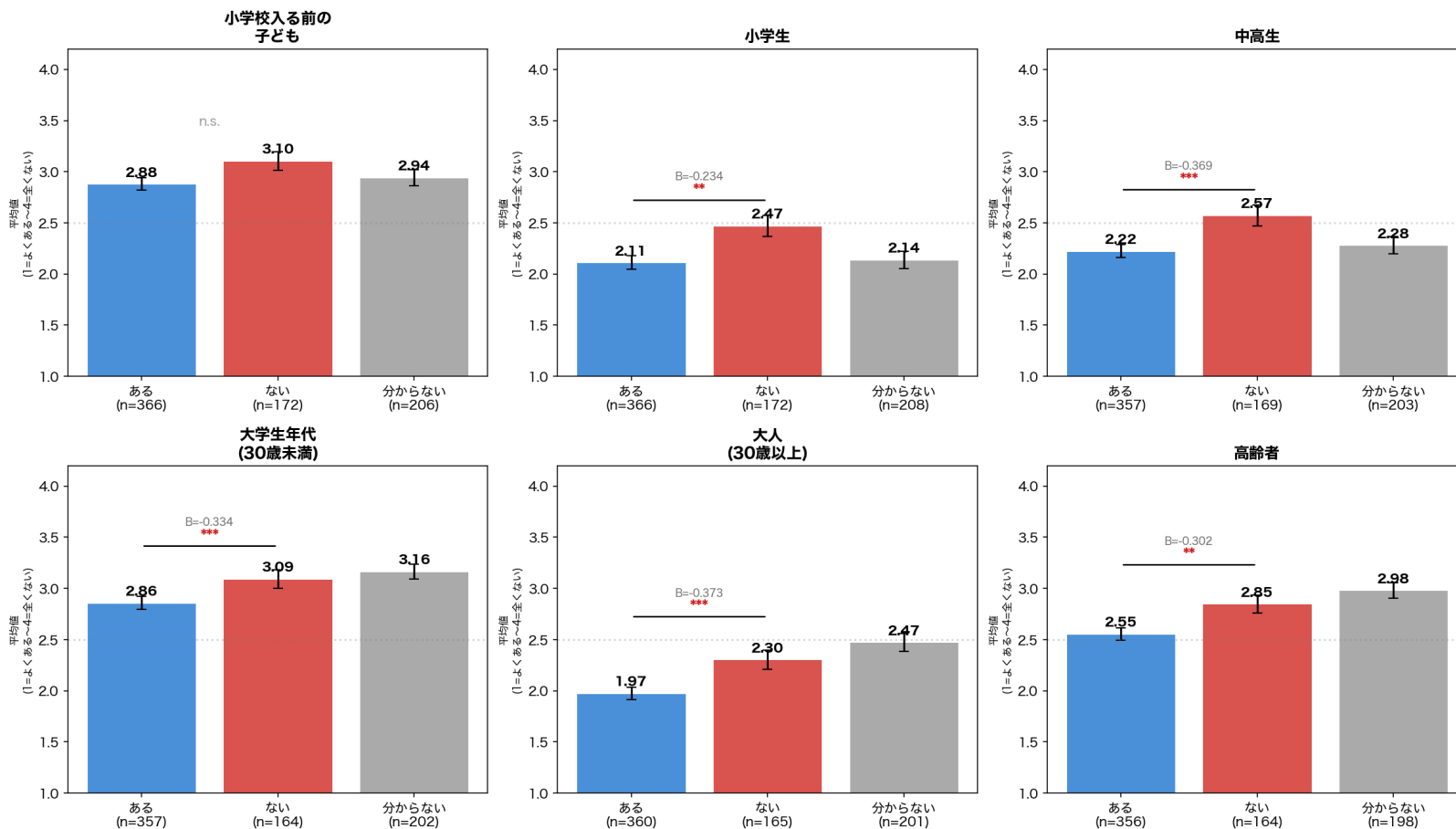
- 自己肯定感・友人接触・地域信頼が媒介経路として有力。

世代間交流と孤独感



- サードプレイスありの保護者は多世代（高齢者・小学生等）との交流頻度が高い。
- 地域の世代間交流がサードプレイスと孤独感を媒介する可能性。

サードプレイスの有無と多世代交流

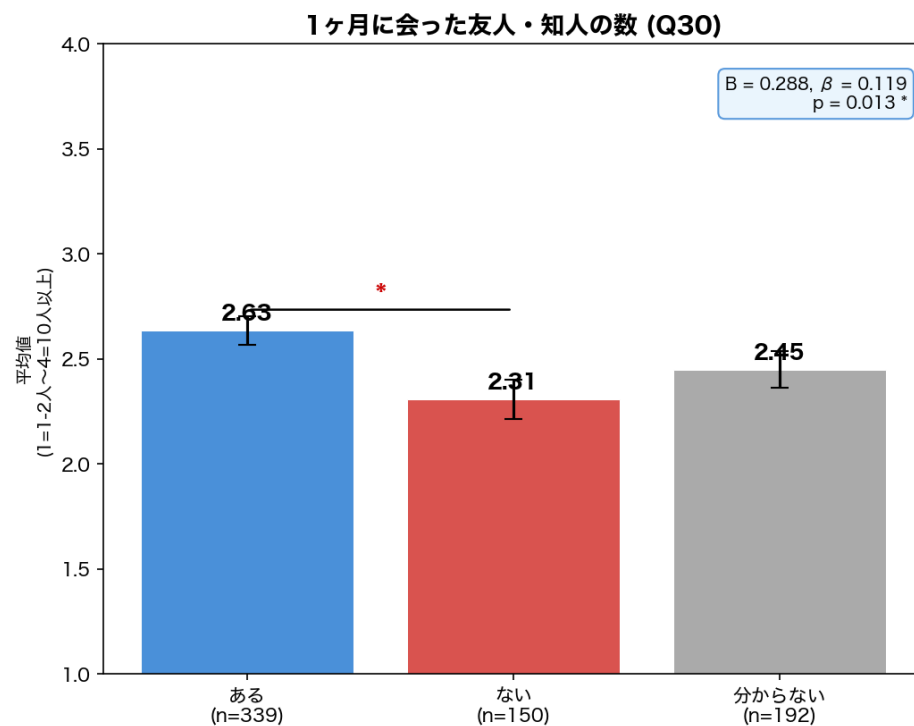
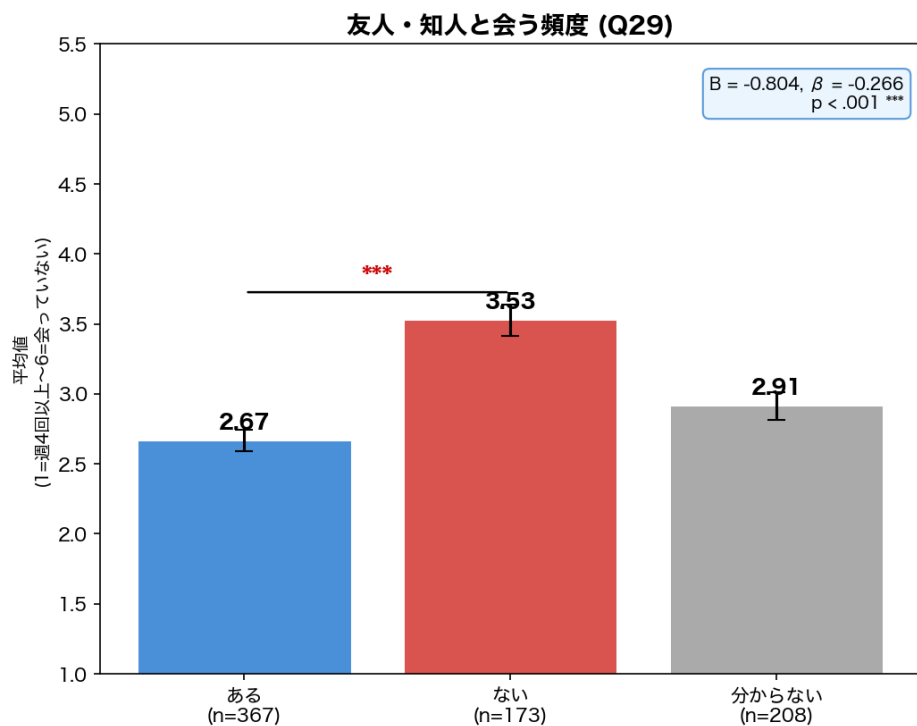


友人との接触頻度と孤独感



- サードプレイスあり群は友人との対面接触頻度・人数ともに多い
- 友人ネットワークの豊かさがサードプレイスの孤独感低減効果を媒介する

サードプレイスの有無と友人・知人との接触

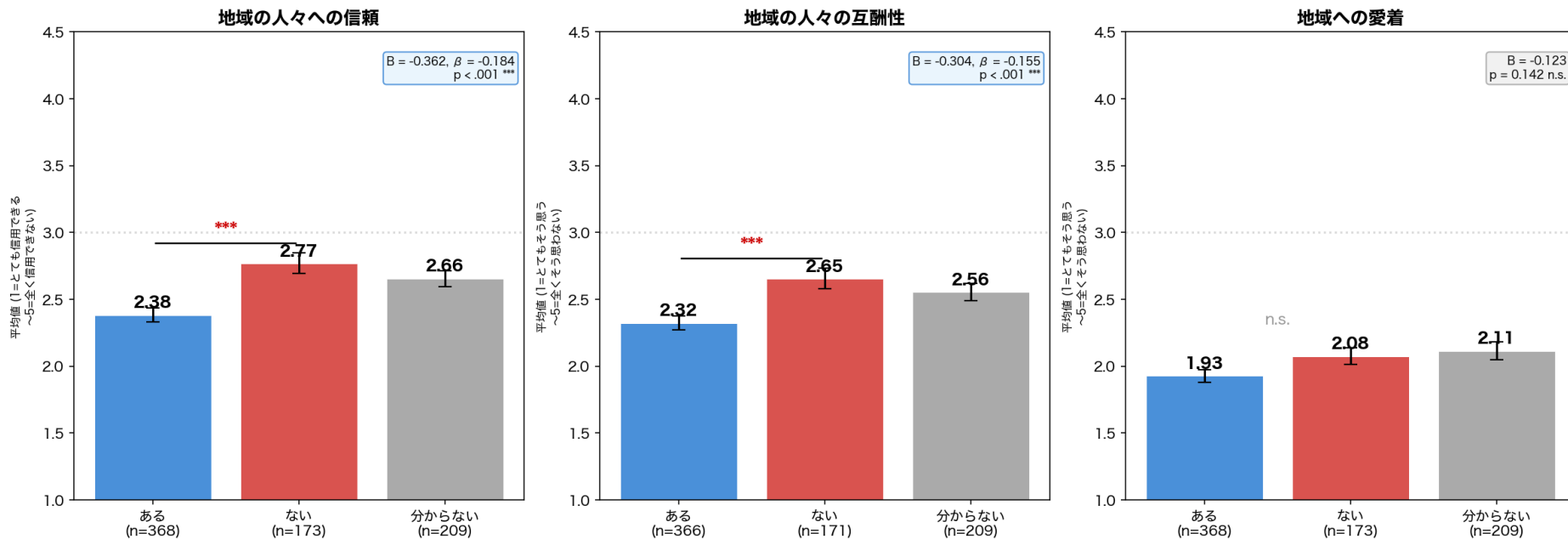


ソーシャルキャピタル関連指標と孤独感



- 地域の信頼感・互酬性（ソーシャルキャピタル）がサードプレイスあり群で高い
- サードプレイスが、地域の社会関係資本を醸成し、孤独感低減につながる可能性

サードプレイスの有無とソーシャルキャピタル



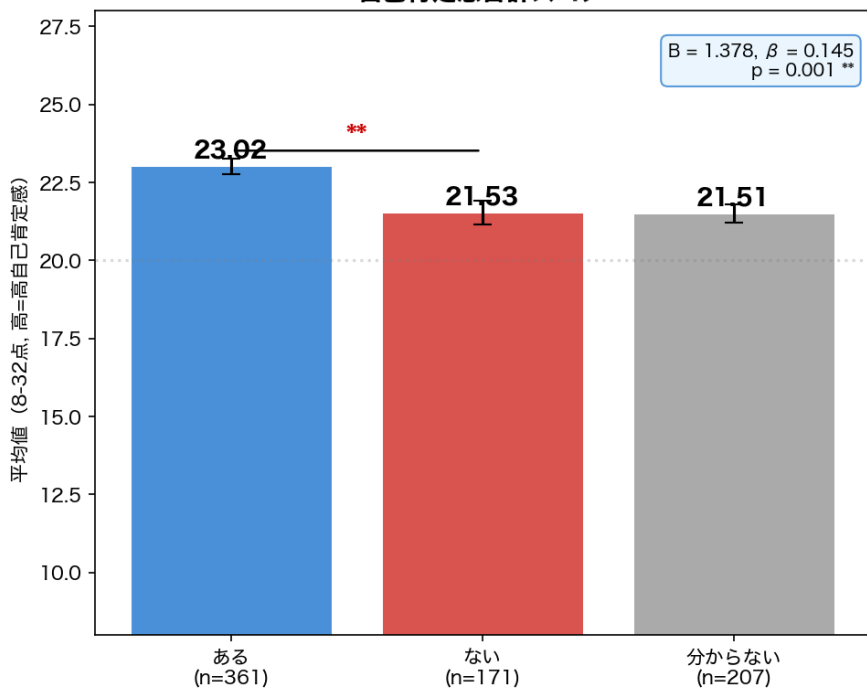
自己肯定感と孤独感



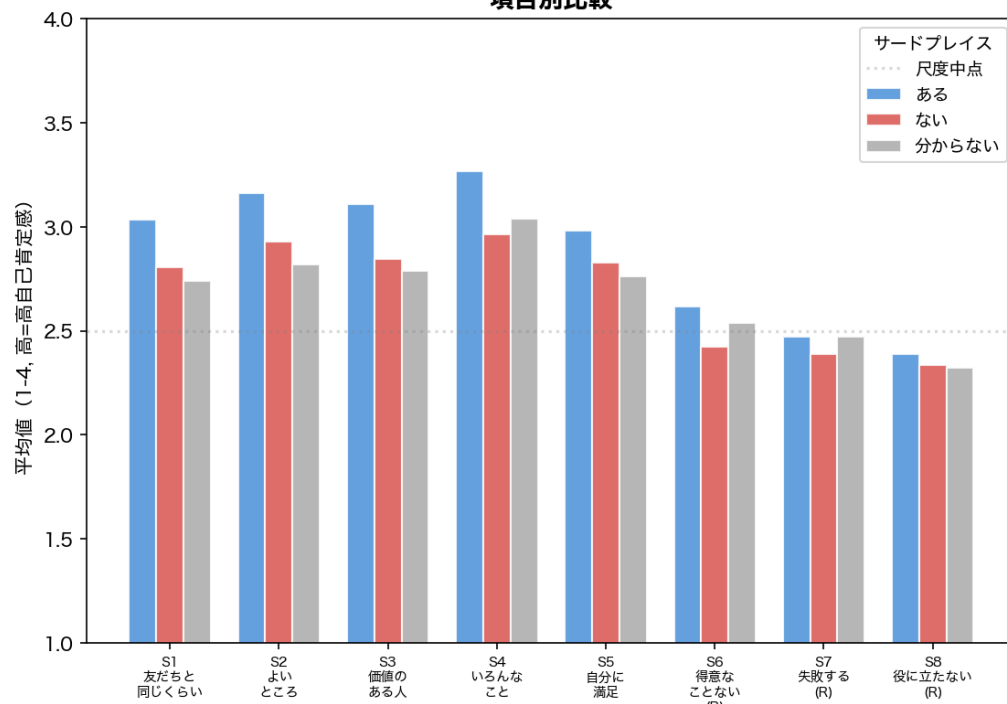
- サードプレイスあり群は自己肯定感（Rosenberg尺度、 $\alpha=0.858$ ）が有意に高い

サードプレイスの有無と自己肯定感

自己肯定感合計スコア



項目別比較

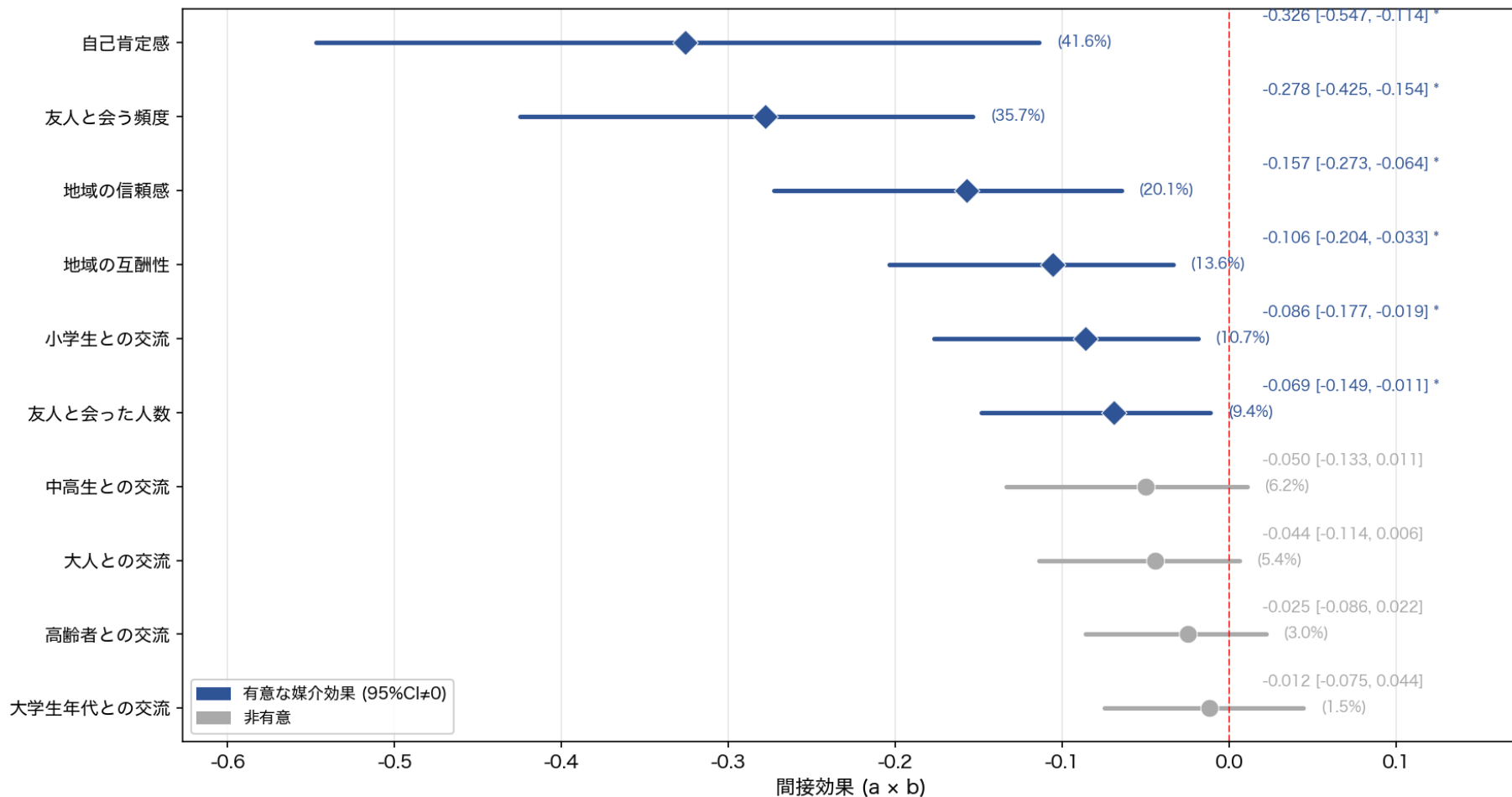


居場所→友人接触頻度・自己肯定感→孤独感



- 友人接触頻度と自己肯定感との関連が強い。

ブートストラップ媒介分析: 間接効果と95%信頼区間
(サードプレイス → 媒介変数 → UCLA孤独感)





おまけ





Published in final edited form as:

JAMA Pediatr. 2015 September ; 169(9): 822–829. doi:10.1001/jamapediatrics.2015.1475.

子どもの貧困・脳の発達・学業達成の関連

Association of Child Poverty, Brain Development, and Academic Achievement

Nicole L. Hair, PhD, Jamie L. Hanson, PhD, Barbara L. Wolfe, PhD, and Seth D. Pollak, PhD

概要 (At a Glance)

- 本研究は、小児期の貧困と学業成績の低下の関係を、脳の構造的発達が媒介しているかどうかを検証したものである。
- 4～22歳の、経済的背景が多様で、通常の発達を示す389名の子どもを対象に、MRI（磁気共鳴画像法）による脳画像を分析した。
- その結果、経済的資源の限られた家庭の子どもたちでは、前頭葉、側頭葉、海馬に体系的な構造的差異がみられた。
- 前頭葉および側頭葉における発達の違いは、**低所得家庭の子どもたちの学力不足の最大20%を説明**しうる可能性がある。

At a Glance.

- This study tests whether childhood poverty
- Magnetic resonance imaging of children aged 4 to
- Children from families with differences in the level of
- Developmental differences in low-income children



① JAGES調査データの分析（対象は高齢者）

- こども食堂への参加（2025年コア項目、速報値は各市町村で概ね参加率1%前後）
- 305,940配布、222,397回収（回収率72.1%）
- こども食堂に関わりのある高齢者概ね2,200人程度）
- 多世代交流の項目（2019年、2022年バージョン項目）

② むすびえ調査データ

- こども食堂参加者・非参加者調査（横断n=2,000、パネルn=1,200）
- こども食堂認知度調査
- こども食堂運営者への実態・困りごと調査
- 愛知県高浜市こども・若者の居場所調査



2024年11月28日

「こども食堂が参加者の変化や地域のwell-being向上、特定課題の改善に寄与していることを示す定量調査の基礎となる論文サーベイ」
調査報告書

1. 先行研究調査の進め方（多世代交流）

- 多世代交流の先行研究調査においては、「多世代交流」「つながり」「効果」などの検索キーワードを組み合わせた文献検索を実施
- 検索した文献のうち、有用そうなものについては、文献で引用されている参考文献を追加調査し、各文献から得られた示唆を図式化
- 両者を合わせて、オープンデータの138件はデータを手し、内容を確認・分析した。



【A】 論文検索①

- 試行的にいくつか検索キーワードを組み合わせて、検索してリスト化
- 対象のデータベース：Cinii Research
- 論文の出版年：2000年以降
- 対象とする文献の種類：学術論文に限定せず、研究データ、論文、本、博士論文、プロジェクトなどすべて
キーワード例：「多世代交流」×「つながり」×「効果」

※「住民の自己実現」への効果については、調査対象が広範になるため、本事業においては対象外とした
※具体的なキーワードの組合せと検索ヒット数、検索結果のリストは、別紙②（Excel）参照
※検索リストのうち、オープンデータである94件はデータを手し内容を確認、むすび様にもご共有

【B】 論文検索②

- 「【A】論文検索①」の結果、理想としている文献（「多世代の交流の居場所の提供が、相互理解や、交流拠点を越えた面的なひととのつながりの拡大（近所の緩い関係性の拡大など）に展開することや、地域での活動量の増加につながることを定量的に調査した論文」）は抽出されず
- そのため、「【A】論文検索①」によって抽出された文献のうち、理想としている文献に近い文献について、文献で引用されている参考文献を追加調査した。参考文献については、引用先の文献で紹介されている内容等に照らして、以下の2つの観点から有益な情報を含んでいると考えられるものに絞り込んで追加検索・リスト化した（オープンデータの文献については、文献データ本体を手しして研究内容を分析）

- ①変化などが生じる過程や要因のモデル（依拠する仮説）
- ②具体的な定量調査手法

※検索結果のリストは、別紙③（Excel）参照
※検索リストのうち、オープンデータである44件はデータを手し内容を確認、むすび様にもご共有

【C】 【A】【B】でリスト化した論文から得られた情報の図式化

- 「【A】論文検索①」「【B】論文検索②」の結果、各文献から確認されたモデルや研究結果を整理し、「多世代が交流する居場所から生じる変化の仮説」として図式化

※【A】【B】論文検索のリストは別紙②・③参照

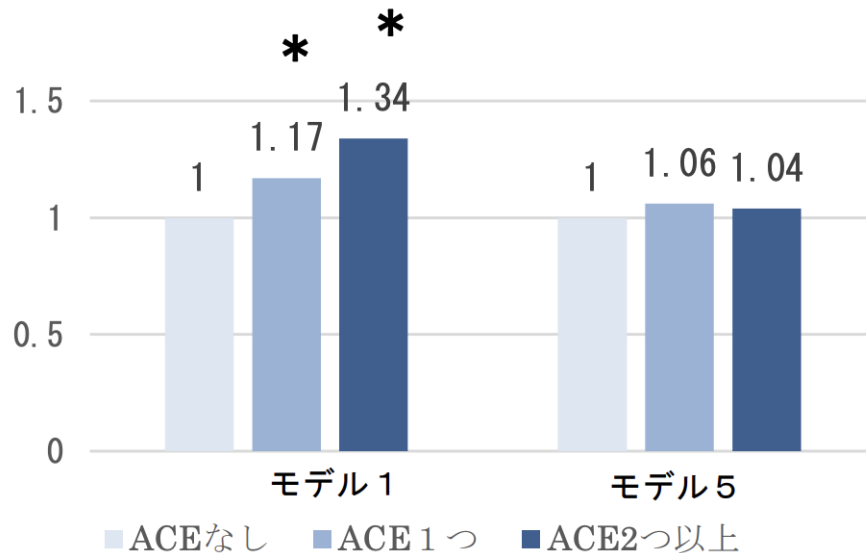
25

子どもの頃に逆境体験があった高齢者は、野菜・果物不足になりやすい可能性

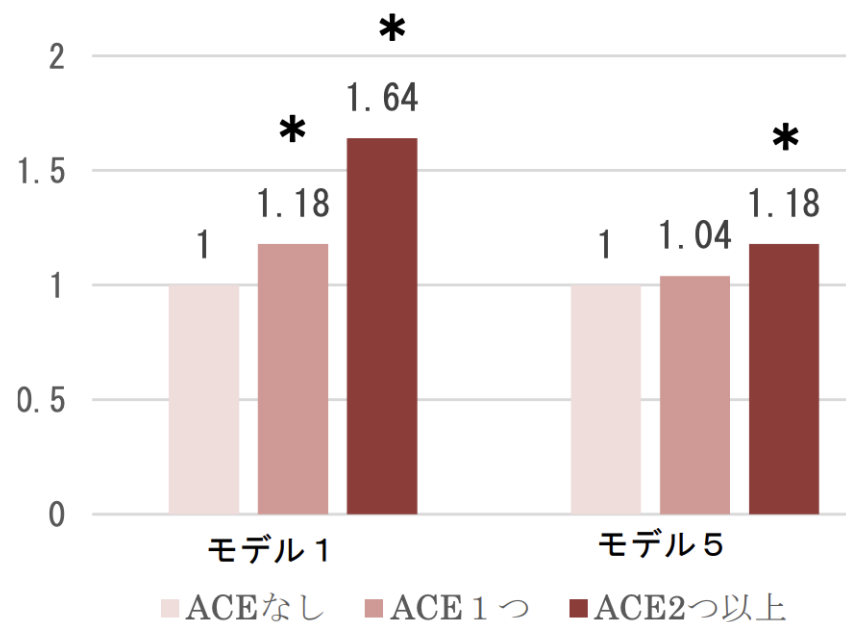


- 逆境体験が2つ以上ある人は、高齢期の野菜・果物を毎日食べない割合が、そのような体験のない人に比べて男性で34%、女性で64%多いことがわかりました。
- 逆境体験の種類別の解析では、精神的ネグレクトに関する結果で関連が認められました。

野菜・果物を毎日食べない割合の比



子どもの頃の逆境体験数(男性) n=11,268

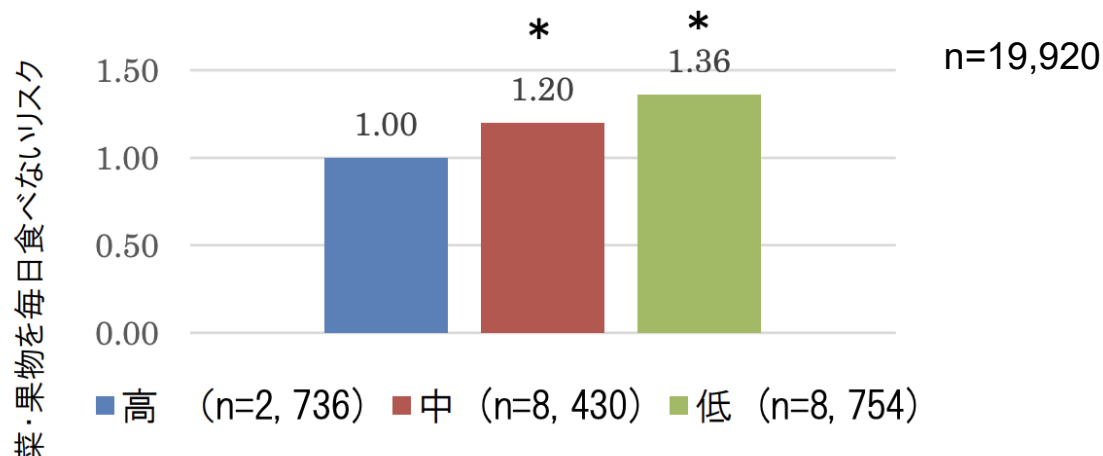


子どもの頃の逆境体験数(女性) n=13,003

子ども時代の貧困で高齢期の野菜不足リスク1.4倍に

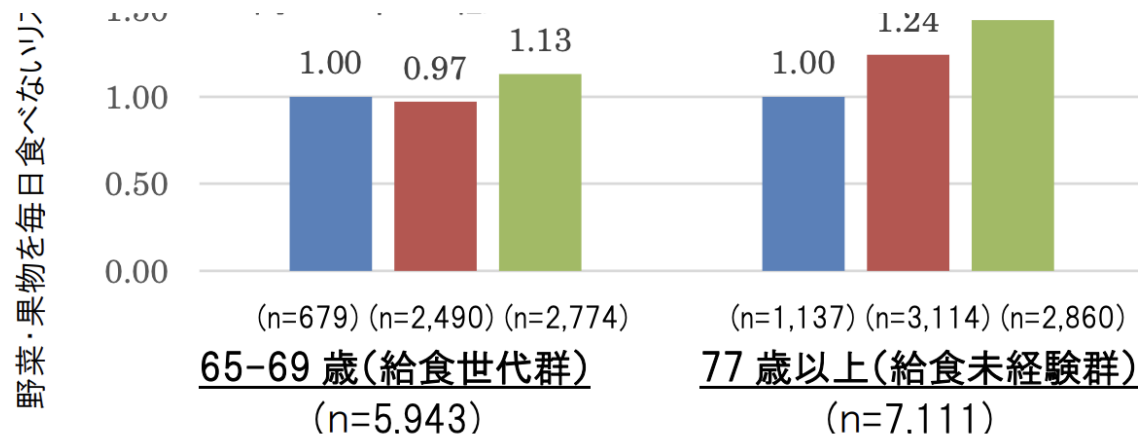


図1 全対象者
(N=19,920)
(性別と年齢で調整済)
* 統計学的に
意味のある関連



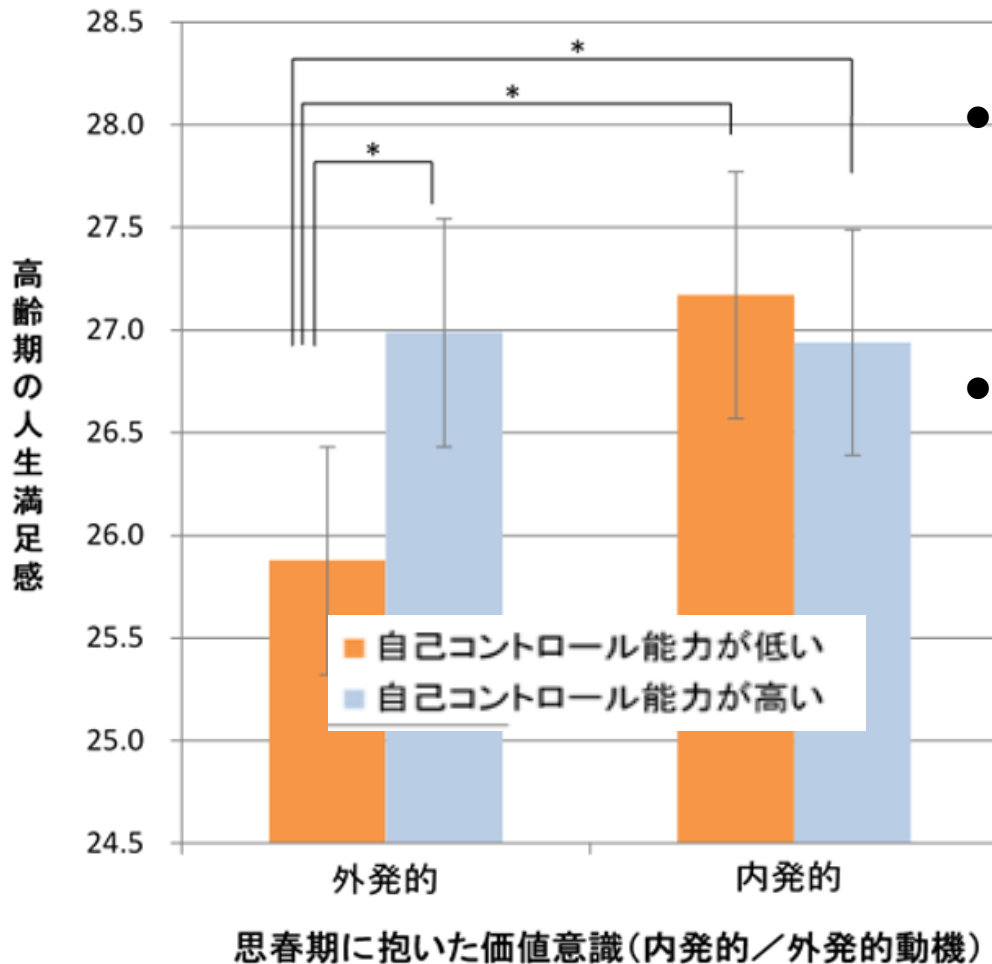
子どもの頃の社会経済的状況と高齢期の野菜・果物摂取頻度の関連を分析した結果、子ども期の生活レベルが低かった人では高齢期に野菜・果物を毎日食べないリスクが36%高い。

図2 戦後の学校給食の普及を考慮した年代別解析
(性別と年齢で調整済)
* 統計学的に
意味のある関連



子ども期の社会経済的状況

思春期の時点で抱いていた価値意識が 高齢期の幸福感を予測する



- 本研究では、60年以上にわたる大規模追跡調査により、思春期の時点で「興味や好奇心を大切にしたい」という価値意識（内発的動機）を強く抱いた若者は、高齢期の人生満足感が高いことを実証しました。
- さらに、自己コントロール能力が低い若者が、「金銭や安定した地位を大切にしたい」という価値意識（外発的動機）を強く抱いた場合、高齢期の人生満足感が顕著に低くなることも分かりました。

Yamasaki, S., Nishida, A., Ando, S., Murayama, K., Hiraiwa-Hasegawa, M., Kasai, K., & Richards, M. (2020). Interaction of adolescent aspirations and self-control on wellbeing in old age: Evidence from a six-decade longitudinal UK birth cohort. *The Journal of Positive Psychology*, 16(6), 779–788. <https://doi.org/10.1080/17439760.2020.1818809>



父親の産後うつへの調査データは少ない 記述的な研究は意義が高い

- 2019年12月に「成育過程にある者及びその保護者並びに妊産婦に対し必要な成育医療等を切れ目なく提供するための施策の総合的な推進に関する法律」（通称：成育基本法）が施行されました。

（父親の孤立）

出産や育児への父親の積極的な関わりにより、母親の精神的な安定をもたらすことが期待される一方、**父親の産後うつが課題となっている**。母親を支えるという役割が期待される父親についても、支援される立場にあり、父親も含めて出産や育児に関する相談支援の対象とするなど、父親の孤立を防ぐ対策を講ずることが急務である。母親に限らず、父親を含め身近な養育者への支援も必要であることについて、社会全体で理解を深めていくことが必要である。

父親の「産後うつ」9人に1人

日本経済新聞朝刊
2024年12月23日

産後の孤立とされる。育児への言動、
治体や一部の企業では、父親となす
「好きなはずの仕事な
のにやる気が出ない」。
静岡県在住の男性会社員
（34）は第一子の誕生か
ら3カ月間の育児休業を
取った。2024年8月、
職場に復帰すると業務
中、以前に比べて集中力
が低下するなど不調を感
じ始めた。
会議に出席しても、内
容が頭に入っていない。
「このままではまずい」。
まもなく病院で医師から
「うつ病」と診断を受け、
休職を決めた。
子どもの誕生で生活リ
ズムが大きく変化したこ
とが不調の原因だったと
いう。夜泣きやミルクの
用意で夜は数時間ごとに
起きる必要がある。睡眠
が十分に取れなかった。
仕事とのバランスにも
悩んだ。「子どもが一番
大事。でも仕事も大事」。
育児も仕事も全力投球し
たいが、終業後の子の世
話を考えると、以前のよ
うに仕事をするのは体力
的に難しく、葛藤した。
男性の育児取得率は過
去最高の3割に達する一
方、父親の「産後うつ」
も見逃せなくなっている。

国立成育医療研究セン
ターは20年、午後1歳未
満の子がいる2人親
家庭約3500世帯の分
析結果を公表した。夫婦
のうち精神的な不調のリ
スクがあると判定された
父親は11%と、母親の10
・8%と同水準だ。夫婦
同時に不調と判定された
世帯は3・4%あった。

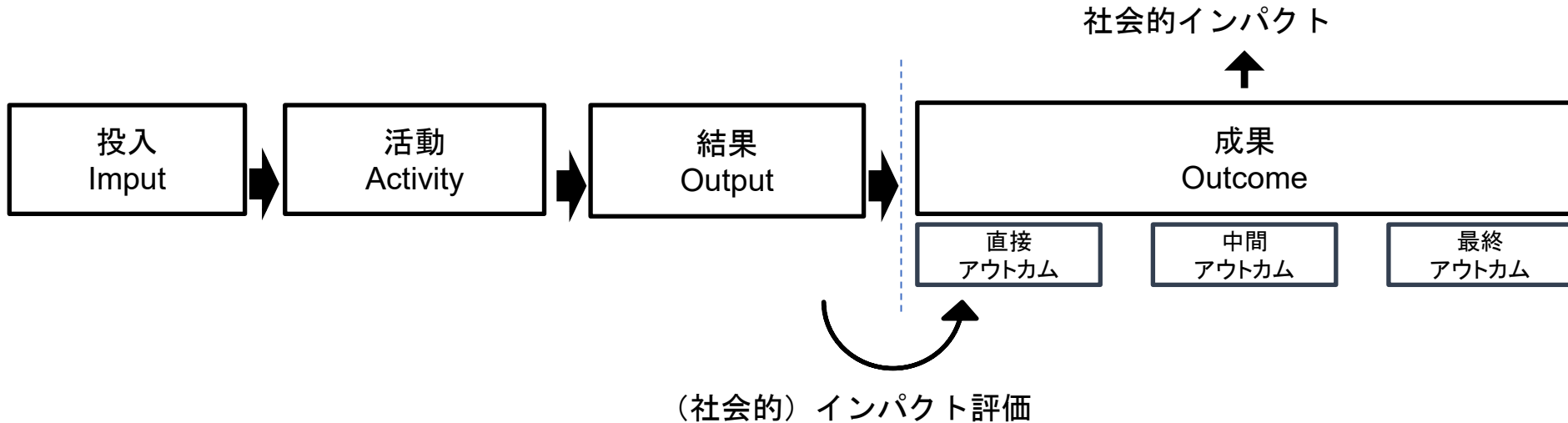
父親が精
至る要因は
家事・育児
が挙げら
る。担当し
長は「母親
の支援策が
に迫ると、
影響しやす
もにサポー
が、父親の
まだ十分に
課題を履
業員向けの
心企業も出
後のメンタ
さんにもあ
月上旬にオ
かれたセミ
が呼びかけ
ンサルテイ
るワーク・
ス（東京・
に臨む男性
親学級）だ
企業が定
に申し込め
や男性の育
理取組の
用できる。
学校には育
得予定の男
上司ら17
した。これ
以上が受講
仕事との回
を教える。
いても触れ
性別役割分
トレスの原
意した。
セミナー

ロジックモデルとは



インプット（投入）～アウトカム（成果）の因果関係を図式化した論理構造図

※ロジックモデルは、インプット、活動、アウトプット、アウトカムの4つの要素による構成が基本的考え方。

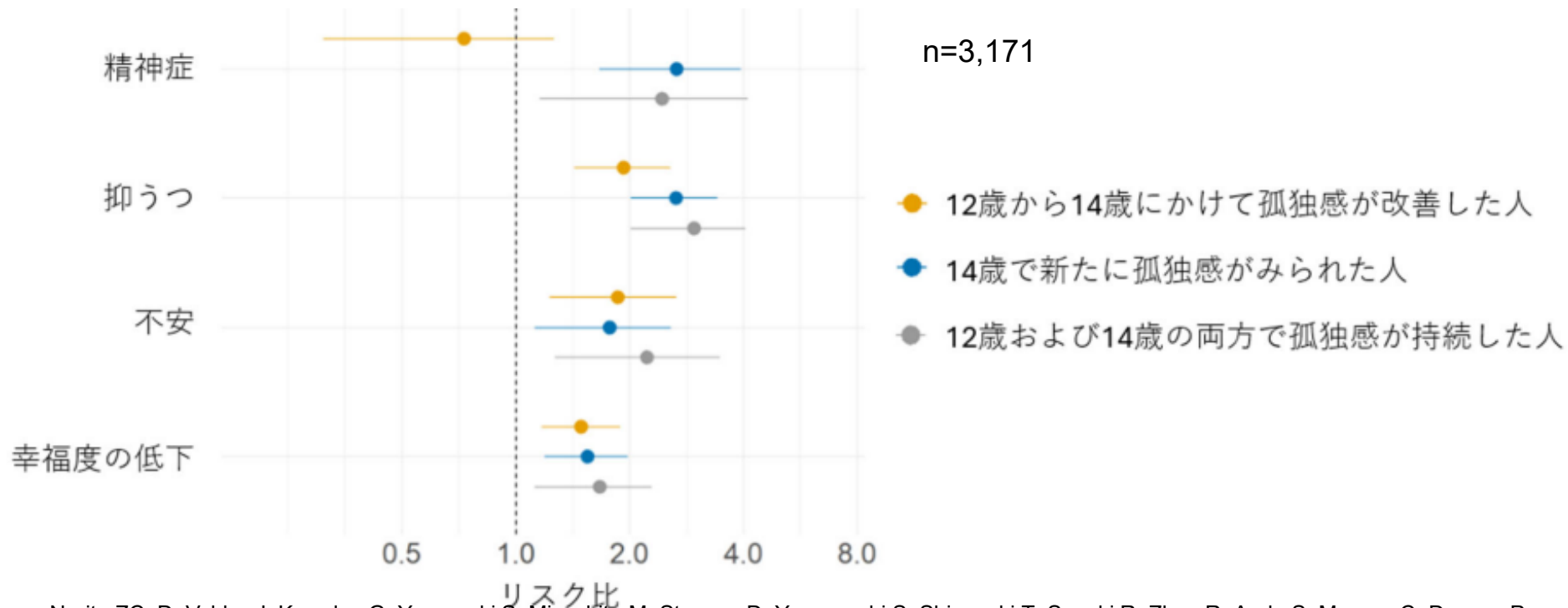


- ①投入 (Input) : 施策や事業に費やした資金、人、物などの資源
- ②活動 (Activity) : 施策や事業の実施
- ③結果 (Output) : 施策や事業を実施して、実施主体側に生じたこと
- ④成果 (Outcome) : 施策や事業が、働きかけた対象にもたらした変化
- ⑤(社会的) インパクト : アウトプットがアウトカムに及ぼした影響

思春期に孤独感が持続すると 精神症・抑うつ・不安・幸福度低下につながる



- 12歳および14歳の両方で孤独感が持続していた場合、孤独感がみられなかった場合と比べて、16歳時点で精神症は約2.4倍、抑うつは約3.0倍、不安は約2.2倍、幸福度低下は約1.7倍のリスク。
- 一方で、12歳時点では孤独感がみられたものの、14歳までに孤独感が改善した場合には、精神症との関連は消失し、抑うつ、不安、幸福度低下との関連も軽減される。



Narita ZC, DeVlyder J, Knowles G, Yamasaki S, Miyashita M, Stanyon D, Yamaguchi S, Shinozaki T, Sasaki R, Zhou R, Ando S, Morgan C, Dazzan P, Furukawa TA, Kasai K, Kelleher I, Nishida A. Loneliness patterns across time and subsequent risk of psychotic experiences, depression, anxiety, and diminished well-being in adolescents. *J Child Psychol Psychiatry*. 2026 Jan 22. doi: 10.1111/jcpp.70114. Epub ahead of print. PMID: 41567036.

図1. 孤独感の経時的パターンとメンタルヘルス不調リスクの関連

困難な家庭環境で育った人は、他者への信頼が低い





Psychoneuroendocrinology

Volume 121, November 2020, 104840



Oxytocin Receptor Gene (OXTR) and Childhood Adversity Influence Trust

Shaofeng Zheng^a, Takahiko Masuda^b, Masahiro Matsunaga^c, Yasuki Noguchi^d,
Yohsuke Ohtsubo^d, Hidenori Yamasue^e, Keiko Ishii^a  

Show more 

+ Add to Mendeley  Share  Cite

<https://doi.org/10.1016/j.psyneuen.2020.104840>

[Get rights and content](#) 

Abstract

Early-life environments have been associated with various social behaviors, including trust, in late adolescence and adulthood. Given that the oxytocin receptor gene polymorphism (OXTR rs53576) moderates the impact of childhood experience on social behaviors, in the present study, we examined the main effect of childhood adversity through a self-report measure and its interactions with OXTR rs53576 on general trust among 203 Japanese and 200 European Canadian undergraduate students. After controlling for the effect of culture, the results indicated that childhood adversity had a negative association with general trust, and that OXTR rs53576 moderated the impact of childhood adversity on general trust. Specifically, the negative association between childhood adversity and general trust is only significant among homozygote A-allele carriers. These findings demonstrated that OXTR rs53576 moderated the relations between childhood experiences and social functioning in early adulthood.

- 203名の日本人学生と200名のカナダ人学生を対象
- 家庭環境に関しては、子供の頃(5歳~15歳)の家族生活を思い出して、「親(または同じ家庭で生活していた他の成人)から愛されている、支えてもらっている、大事に思われていると感じることがどれくらいの頻度でありましたか?」「親(または同じ家庭で生活していた他の成人)があなたを罵ったり、侮辱したり、あなたを馬鹿にしたり、あなたを怖がらせるようなふるまいをすることがどれくらいの頻度でありましたか?」「あなたの両親が口げんかをしたり、口論をしたり、大声で言い争いをすることがどれくらいの頻度でありましたか?」などの13項目に対して、その頻度を評定した。
- 他者一般への信頼に関しては、「ほとんどの人は基本的に正直である」「私は人を信頼するほうである」などの5項目に対して、それにどの程度賛成するかを回答してもらった。
- 幼少期の家庭環境に問題があったと回答していた人ほど、信頼の程度が低くなっていた。



緑の多い学校に通う子どもは、 緑の少ない学校に通う子どもよりも認知が発達

PNAS

Green spaces and cognitive development in primary schoolchildren

Payam Dadvand^{a,b,c,1}, Mark J. Nieuwenhuis^{a,b,c}, Mikel Esnaola^{a,b,c}, Joan Forn^{a,b,c,d}, Xavier Basagaña^{a,b,c}, Mar Alvarez-Pedrerol^{a,b,c}, Ioar Rivas^{a,b,c,e}, Mónica López-Vicente^{a,b,c}, Montserrat De Castro Pascual^{a,b,c}, Jason Su^f, Michael Jerrett^g, Xavier Querol^g, and Jordi Sunyer^{a,b,c,h}

^aCentre for Research in Environmental Epidemiology (CREAL), 08003 Barcelona, Spain; ^bExperimental and Health Sciences, Pompeu Fabra University, 08003 Barcelona, Catalonia, Spain; ^cCiber on Epidemiology and Public Health (CIBERESP), 28029 Madrid, Spain; ^dDepartment of Genes and Environment, Division of Epidemiology, Norwegian Institute of Public Health, 0473, Oslo, Norway; ^eDepartment of Geosciences, Institute of Environmental Assessment and Water Research, Spanish National Research Council (CSIC-IDEA), 08034 Barcelona, Catalonia, Spain; ^fEnvironmental Health Sciences, School of Public Health, University of California, Berkeley, CA 94720-7360; ^gDepartment of Environmental Health Sciences, Fielding School of Public Health, University of California, Los Angeles, CA 90095; and ^hHospital del Mar Medical Research Institute (IMIM), 08003 Barcelona, Catalonia, Spain

Edited by Susan Hanson, Clark University, Worcester, MA, and approved May 15, 2015 (received for review February 18, 2015)

Exposure to green space has been associated with better physical and mental health. Although this exposure could also influence cognitive development in children, available epidemiological evidence on such an impact is scarce. This study aimed to assess the association between exposure to green space and measures of cognitive development in primary schoolchildren. This study was based on 2,593 schoolchildren in the second to fourth grades (7–10 y) of 36 primary schools in Barcelona, Spain (2012–2013). Cognitive development was assessed as 12-mo change in developmental trajectory of working memory, superior working memory, and inattentiveness by using four repeated (every 3 mo) computerized cognitive tests for each outcome. We assessed exposure to green space by characterizing outdoor surrounding greenness at home and school and during commuting by using high-resolution (5 m × 5 m) satellite data on greenness (normalized difference vegetation index). Multilevel modeling was used to estimate the associations between green spaces and cognitive development. We observed an enhanced 12-mo progress in working memory and superior working memory and a greater 12-mo reduction in inattentiveness associated with greenness within and surrounding school boundaries and with total surrounding greenness index (including greenness surrounding home, commuting route, and school). Adding a traffic-related air pollutant (elemental carbon) to models explained 20–65% of our estimated associations between school greenness and 12-mo cognitive development. Our study showed a beneficial association between exposure to green space and cognitive development among schoolchildren that was partly mediated by reduction in exposure to air pollution.

activity are related to improved cognitive development (9). Outdoor surrounding greenness has also been reported to enrich microbial input from the environment (10), which may positively influence cognitive development (10). Through these pathways, exposure to green space, including outdoor surrounding greenness and proximity to green spaces, could influence cognitive development in children, yet the available population-based evidence on the association between such exposure and cognitive development in children remains scarce.

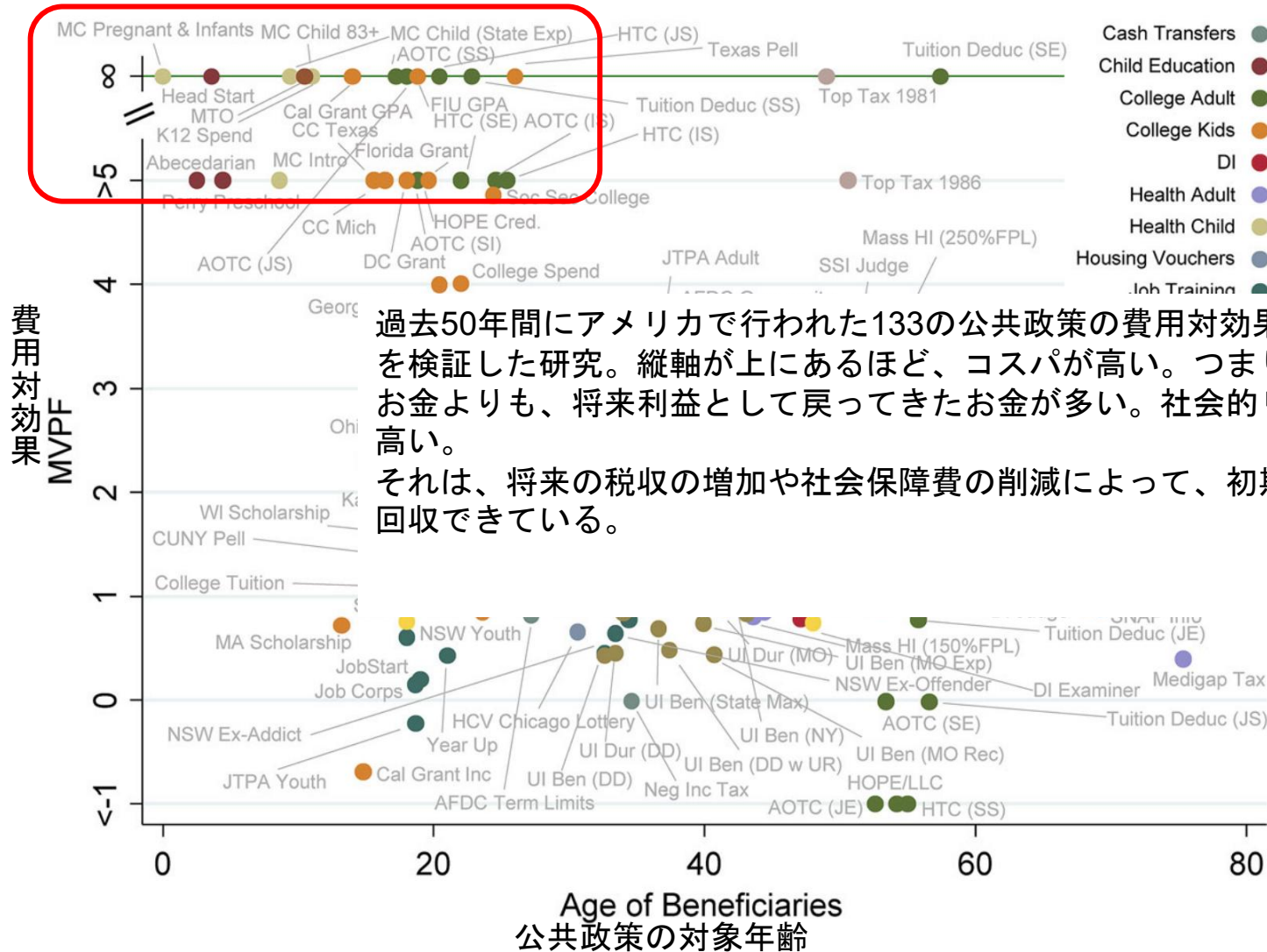
The brain develops steadily during prenatal and early postnatal periods, which are considered as the most vulnerable windows for effects of environmental exposures (11). However, some cognitive functions closely related with learning and school achievement—such as working memory and attention—develop across childhood and adolescence as an essential part of cognitive maturation (12–14). We therefore hypothesized a priori that exposure to green space in primary schoolchildren could enhance cognitive development. Accordingly, our study aimed to assess the association between indicators of exposure to green space and measures of cognitive development, including working memory (the system that holds multiple pieces of transitory information in the mind where they can be manipulated), superior working memory (working memory that involves continuous updating of the working memory buffer), and inattentiveness in primary schoolchildren. As a secondary aim, we also evaluated the mediating role of a reduction in air pollution as one of the potential mechanisms underlying this association.

Dadvand, Payam, et al. "Green spaces and cognitive development in primary schoolchildren." Proceedings of the National Academy of Sciences 112.26 (2015): 7937-7942.



- スペイン・バルセロナの36の小学校で調査し、2年生から4年生（7歳から10歳）の子ども2,593名を2012年から2013年にかけて調査した研究。
- 認知的発達、作業記憶、上位記憶、不注意について計測
- 緑地については、衛生写真による緑度（標準化植生指標）を用いた。
- 緑地との接触は、認知機能発達に関連していることが明らかとなった。

費用対効果が高い公共政策はこども・若者分野



Nathaniel Hendren, Ben Sprung-Keyser, A Unified Welfare Analysis of Government Policies, The Quarterly Journal of Economics, Volume 135 Issue 3, August 2020, Pages 1209–1318, <https://doi.org/10.1093/qje/qjaa006>



Published in final edited form as:

JAMA Pediatr. 2015 September ; 169(9): 822–829. doi:10.1001/jamapediatrics.2015.1475.

子どもの貧困・脳の発達・学業達成の関連

Association of Child Poverty, Brain Development, and Academic Achievement

Nicole L. Hair, PhD, Jamie L. Hanson, PhD, Barbara L. Wolfe, PhD, and Seth D. Pollak, PhD

概要 (At a Glance)

At a Glance.

- This study tests whether childhood poverty
- Magnetic resonance imaging of children aged 4 to
- Children from families with differences in the level of
- Developmental differences in low-income children

- 本研究は、小児期の貧困と学業成績の低下の関係を、脳の構造的発達が媒介しているかどうかを検証したものである。
- 4～22歳の、経済的背景が多様で、通常の発達を示す389名の子どもを対象に、MRI（磁気共鳴画像法）による脳画像を分析した。
- その結果、経済的資源の限られた家庭の子どもたちでは、前頭葉、側頭葉、海馬に体系的な構造的差異がみられた。
- 前頭葉および側頭葉における発達の違いは、**低所得家庭の子どもたちの学力不足の最大20%を説明**しうる可能性がある。

高齢者が子どもと交流することは健康に関連するののか？



【問 23】自治体や社会福祉協議会などの通いの場（サロン）への参加についておうかがいします。

注：通いの場（サロン）の名称は各市町で異なりますが、以下の問 23 の 3）に示した会のことを指します。

1) あなたはこの1年間に、いくつの通いの場（サロンなど）に参加しましたか。

1. 1つ 2. 2つ 3. 3つ 4. 4つ以上 5. 参加していたがやめた 6. 参加していない

次頁へ

2) 通いの場（サロン）への参加期間はどれくらいですか。複数参加している場合は最も長く参加している箇所についてお答えください。

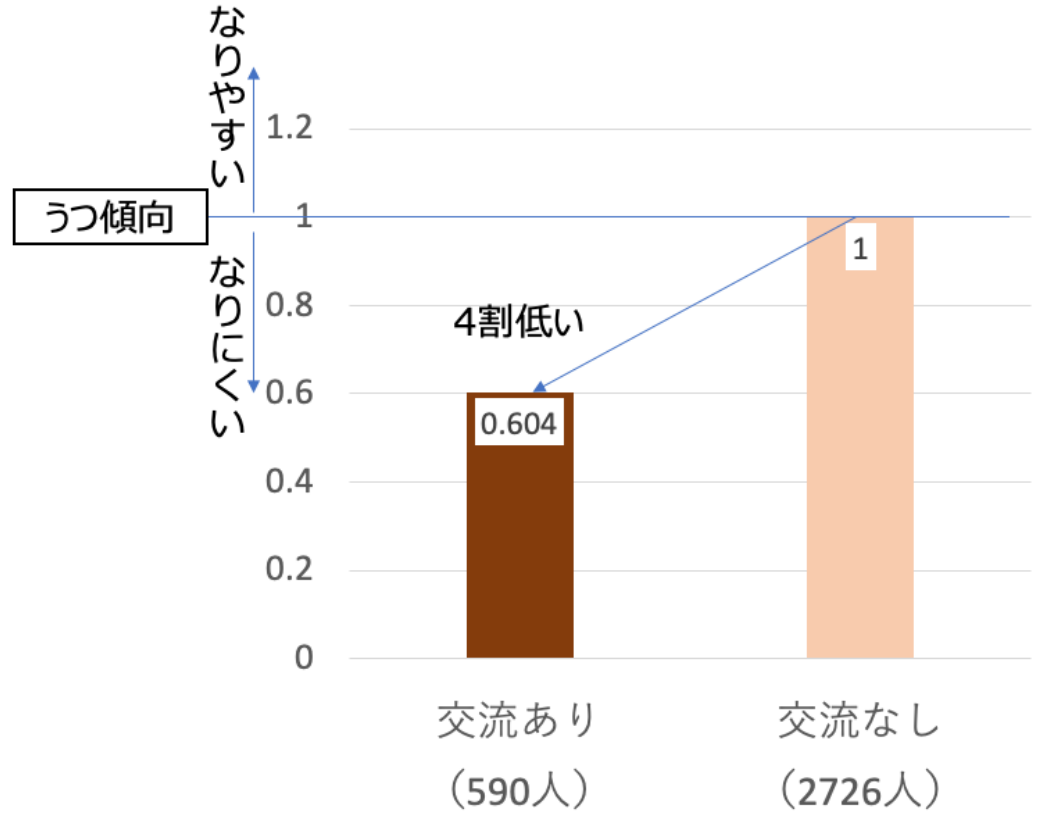
1. 参加1年未満 2. 参加1～2年未満 3. 参加2～3年未満
4. 参加3～4年未満 5. 参加4年以上 6. 参加しているが期間は不明

3) 2)で回答したあなたの通いの場（サロン）での活動別の1ヶ月あたりの時間を教えてください。複数の通いの場（サロンなど）に参加している方は合計してお答えください。

- (1) 体操
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (2) 音楽（歌唱や演奏）
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (3) 創作活動（手工芸など）
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (4) 室内ゲーム（囲碁と将棋、麻雀やレクリエーションゲームなど）
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (5) 脳トレーニング
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (6) おしゃべり（お茶含む）
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上
- (7) 地域の子どもの交流
1. ほとんどなし 2. 1時間未満 3. 1時間 4. 2～3時間 5. 4～5時間 6. 6時間以上

子どもと交流することによる
高齢者のうつとの関連 (n 3,316)

**地域の子どもの交流がある高齢者で、
うつの割合が4割低い**



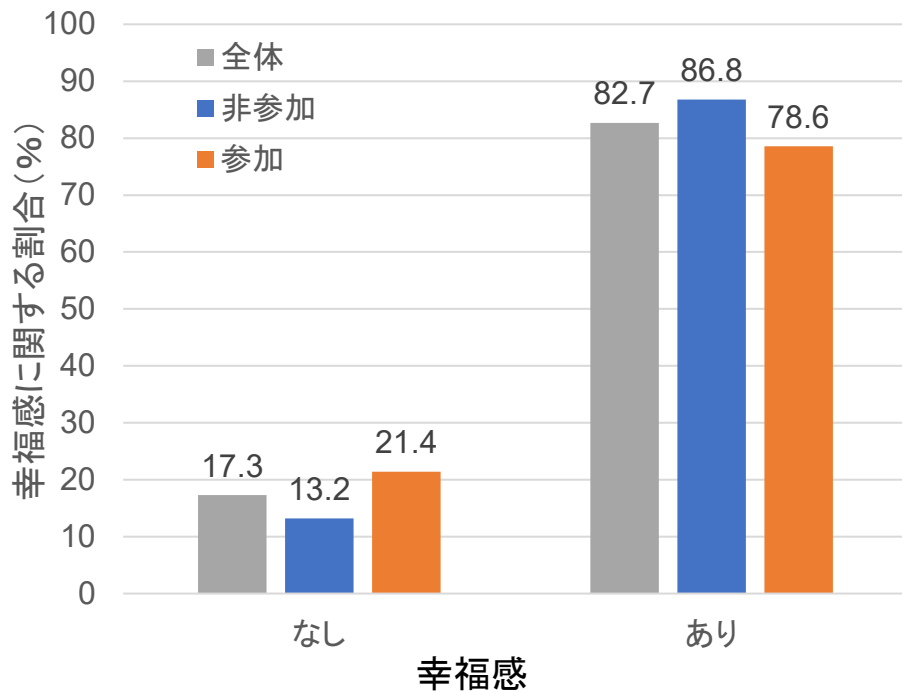
未発表データ

JAGES2019年及び2022データ verCの項目
パネルデータとコホートデータの縦断データ
可能

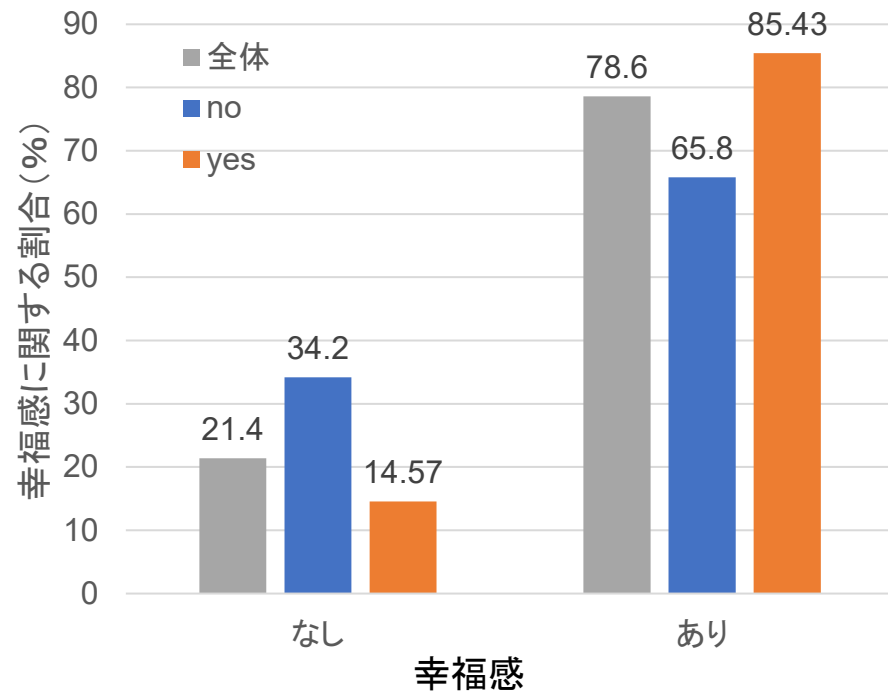
こども食堂を「居場所」と捉えているかがポイント



子ども食堂参加／非参加
n=2,000



子ども食堂が居場所である／ではない
n=1,000

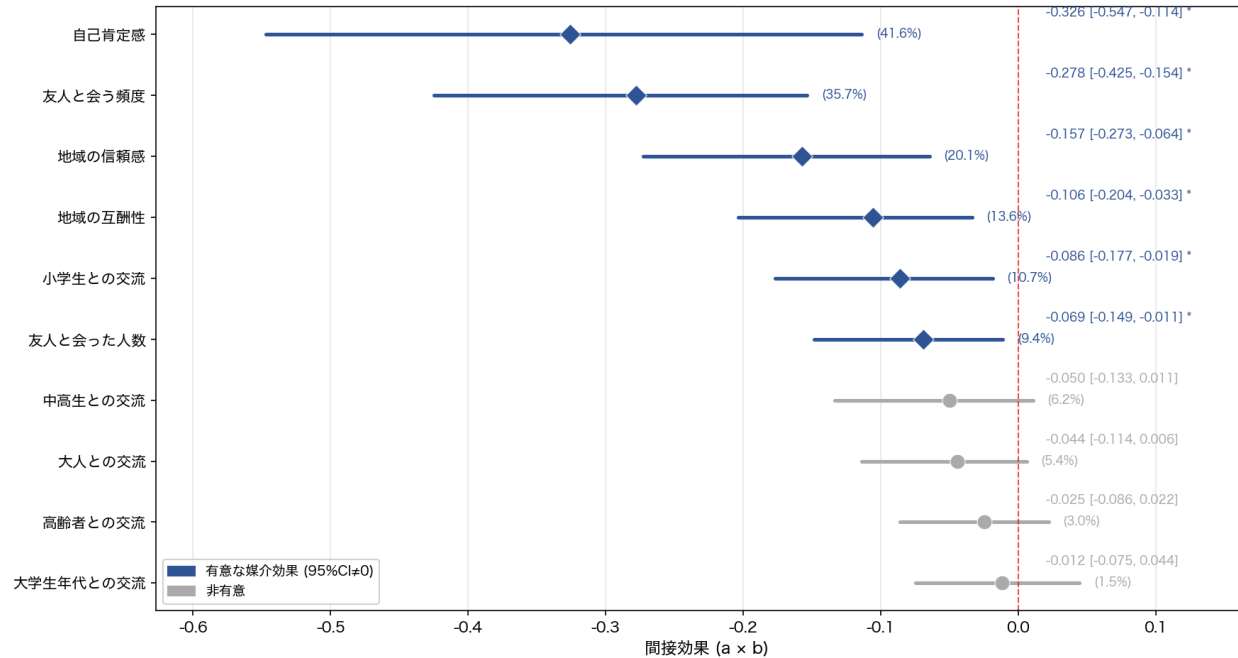


- 全体的に幸福感がある者が多かった。
- 子ども食堂参加／非参加者の幸福感がある者の割合は、非参加者と比較して参加者の割合が低いことがわかった。
- 子ども食堂を居場所である（「ほっとできる」「安心できる場所」「ここに居たい」）と感じていると、幸福感がある割合が高かった。

ブートストラップ間接効果（図11）



ブートストラップ媒介分析: 間接効果と95%信頼区間
(サードプレイス → 媒介変数 → UCLA孤独感)



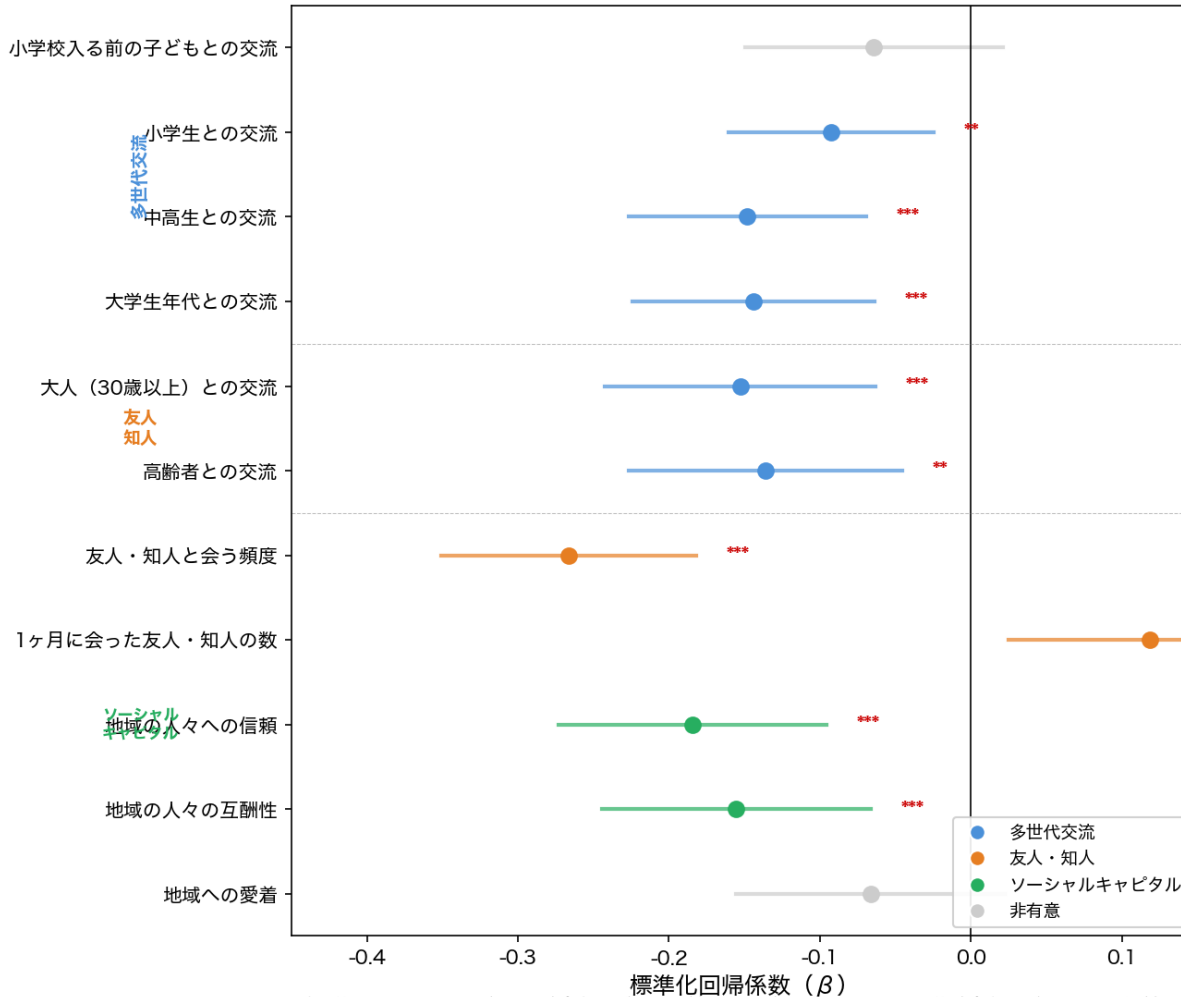
【解釈】

95%信頼区間が0をまたがない6変数が統計的に有意な媒介変数。
自己肯定感（41.6%）と友人接触頻度（35.7%）が突出して大きい媒介効果。

自己肯定感、友人接触、地域信頼感が上位。



サードプレイス「ある」の効果：標準化回帰係数 (β) と95%CI
(調整変数統制後)



注: 負の値 = サードプレイスがある方がポジティブ (交流が多い/信頼が高い)。Q30のみ正の値がポジティブ (会った人数が多い)。

自己肯定感、友人接触、地域信頼感が上位。

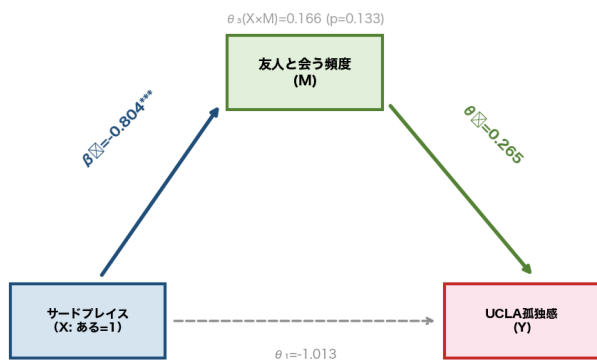
- サードプレイスを持つ子どもは、友人接触頻度が高く、地域の信頼感・互酬性が高い傾向が認められた。多世代交流では、小学生との交流での効果が認められた。

因果媒介パス図



VanderWeele 因果媒介分析: パス図 (上位3変数)
 $E[Y|X,M,C] = \theta_0 + \theta_1 X + \theta_2 M + \theta_3 XM + \theta_4 C$

#1: 友人と会う頻度

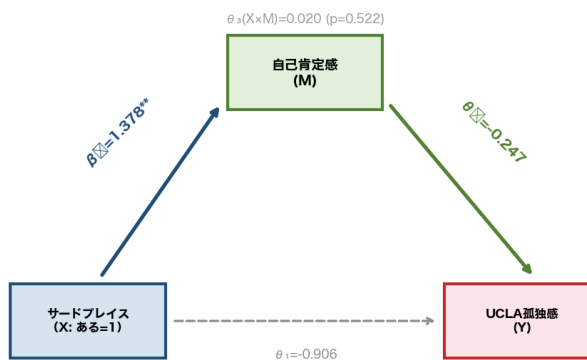


NDE = -0.461 [-0.885, -0.019]

NIE = -0.346 [-0.552, -0.185]

媒介割合 42.9% | E-value = 1.55

#2: 自己肯定感

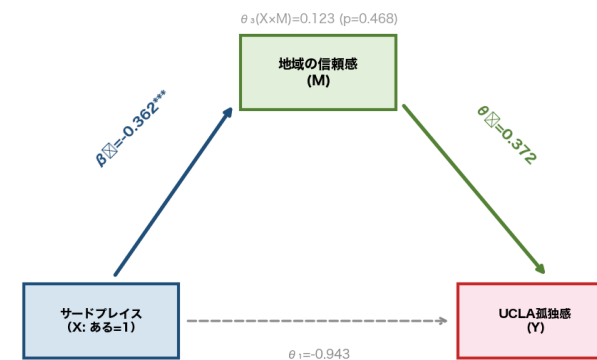


NDE = -0.471 [-0.863, -0.073]

NIE = -0.312 [-0.525, -0.108]

媒介割合 39.9% | E-value = 1.51

#3: 地域の信頼感



NDE = -0.609 [-1.039, -0.163]

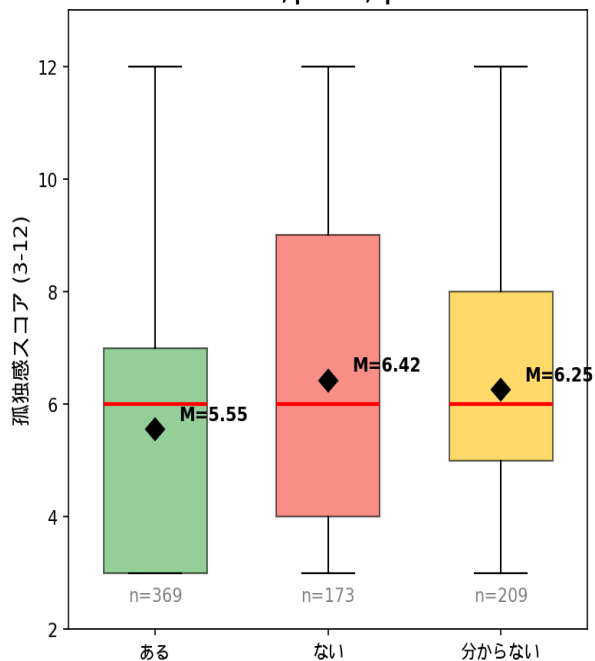
NIE = -0.179 [-0.322, -0.067]

媒介割合 22.7% | E-value = 1.35

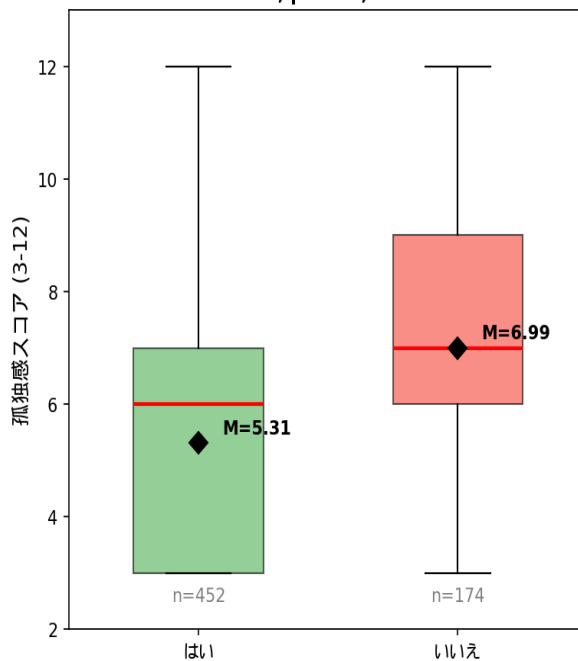
二変量分析：居場所と孤独感



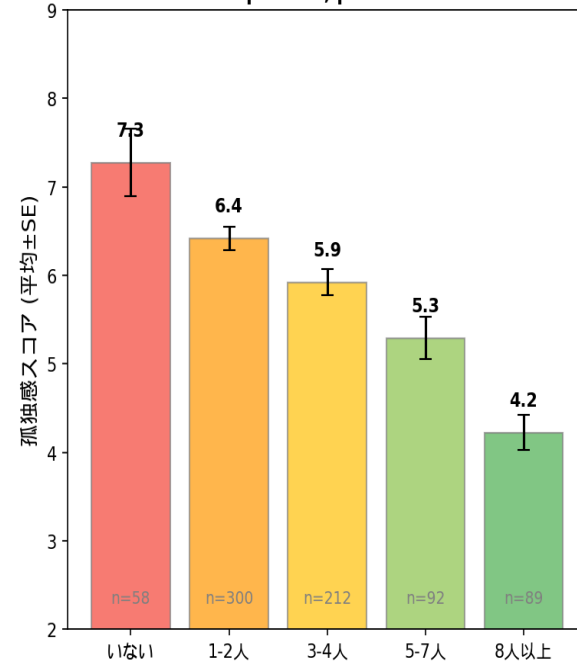
(a) 居場所の有無別の孤独感
 $F=10.62, p<.001, \eta^2=.028$



(b) 学校・職場が居場所か
 $t=8.49, p<.001, d=0.73$



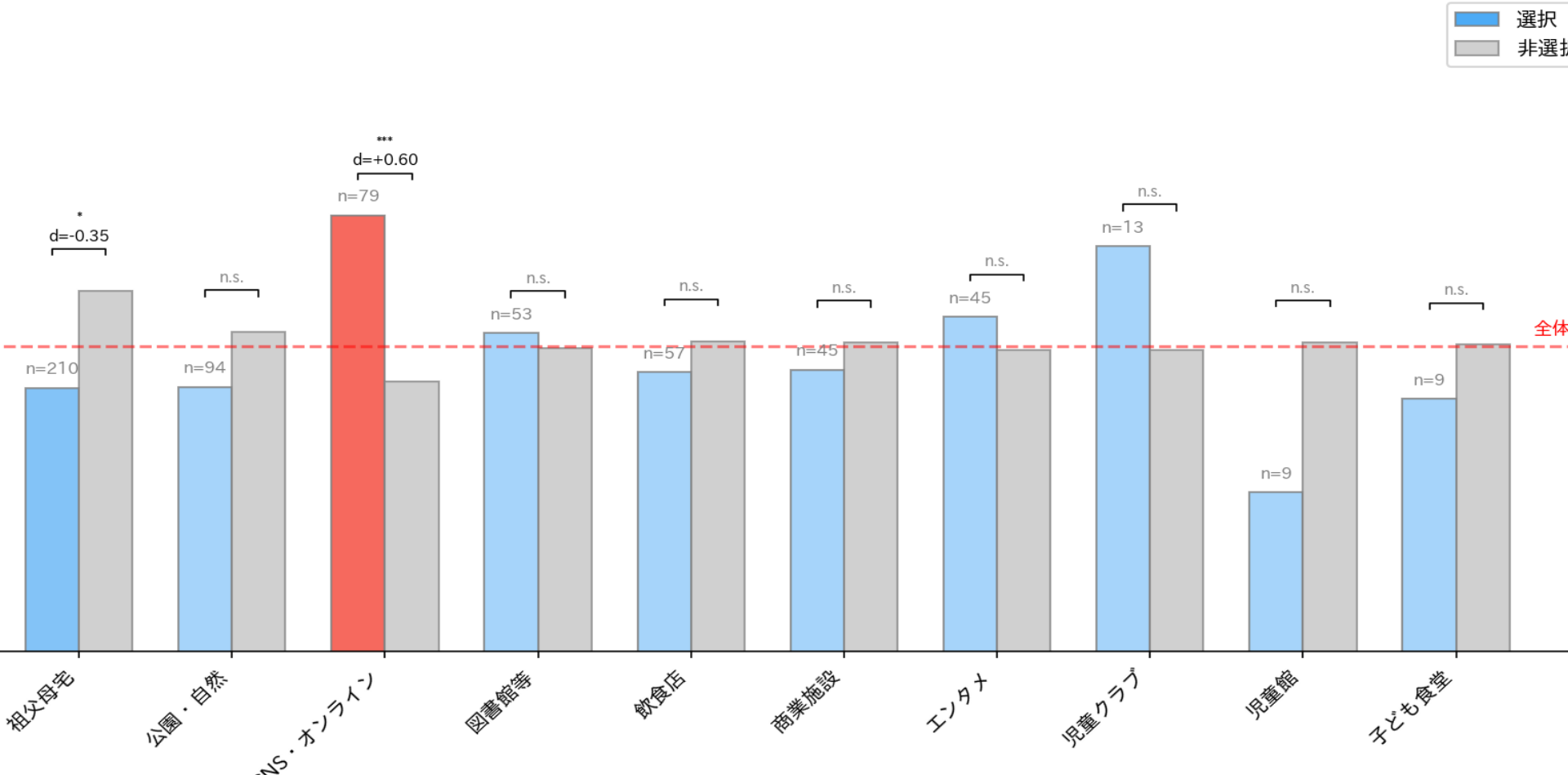
(c) 相談相手の数
 $\rho=-.319, p<.001$



居場所の種類別分析（Bonferroni補正済み）



居場所の種類別 孤独感スコア（居場所あり群）



*** p<.001, ** p<.01, * p<.05. d=Cohen's d.

に高い、薄色=有意差なし



居場所の有無と孤独感

居場所「ある」群 (M=5.55) は「ない」群 (M=6.42) より孤独感が有意に低い (F=10.62, $p<.001$, $\eta^2=.028$)。

「分からない」群 (M=6.25) は「ない」群に近い水準。

学校・職場が居場所か

「はい」 (M=5.31) vs 「いいえ」 (M=6.99) で大きな差 ($t=8.49$, $p<.001$, $d=0.73$)。

効果量 $d=0.73$ は中～大で、学校適応が

孤独感に強く関連することを示す。

相談相手の数

相談相手が多いほど孤独感が低い ($\rho=-.319$, $p<.001$)。

0人 (M=7.3) → 8人以上 (M=4.2) で3.1ポイント差。

居場所の種類別 (Bonferroni補正後)

孤独感を低下させる居場所:

- ・ 習い事・塾 ($d=-0.41$, $p=.002$)
- ・ 友達の家 ($d=-0.38$, $p=.003$)
- ・ 祖父母宅 ($d=-0.35$, $p=.016$)

→ 対面での人間関係を伴う場所が有効。

孤独感を高める居場所:

- ・ SNS・オンライン ($d=+0.60$, $p<.001$)

→ 最大の効果量。オンライン空間を居場所とする子どもは孤独感が顕著に高い。

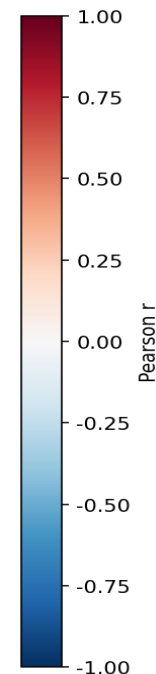
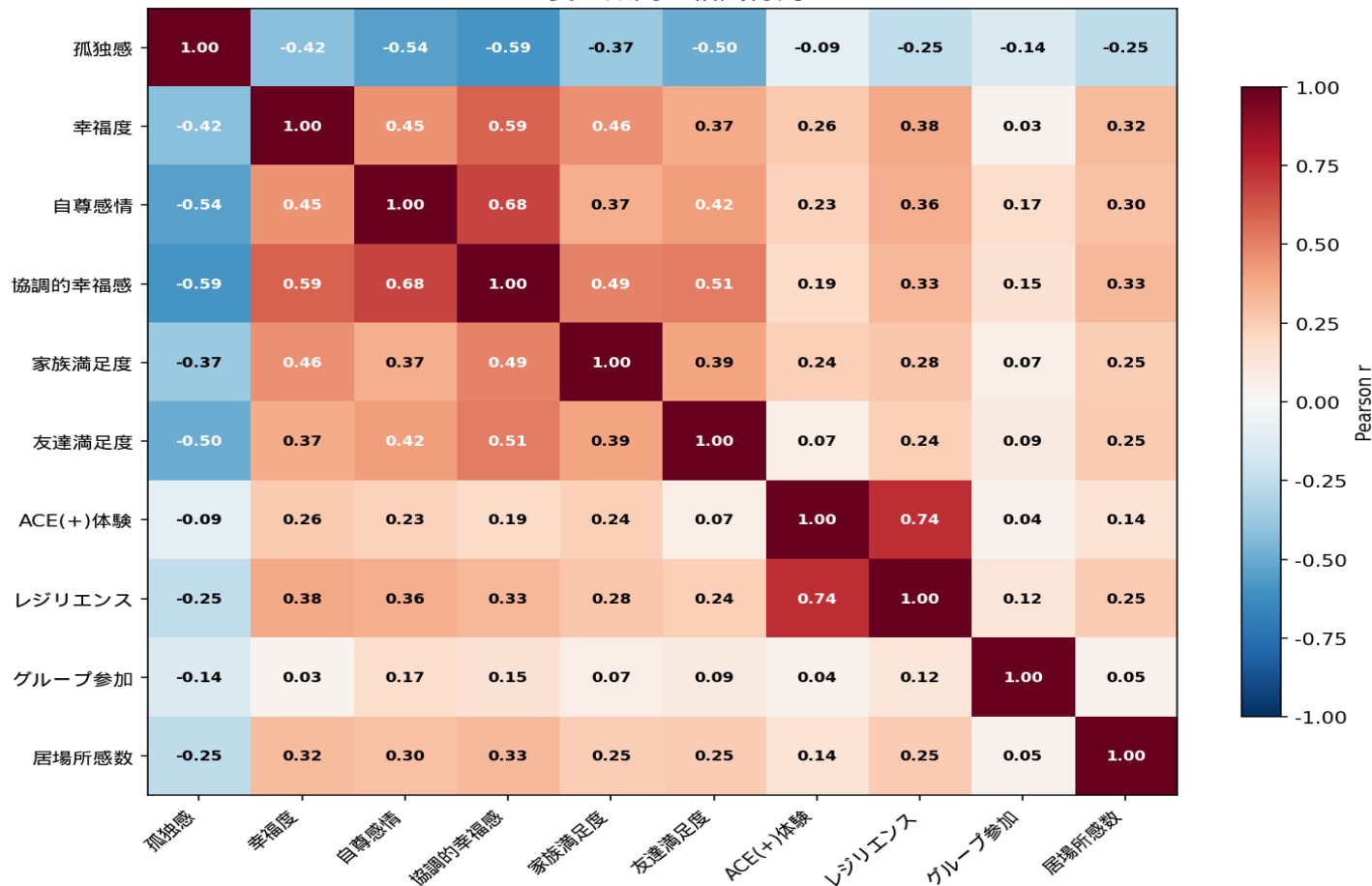
有意差なし:

図書館、飲食店、商業施設、エンタメ、
公園・自然、児童クラブ、児童館、子ども食堂

変数間の相関行列



主要変数間の相関行列





0 前提

- ・そもそも、子どもにとっての学校はとても大切
- ・その上で、サードプレイスの重要性が見えてきた

1 居場所の効果

- ・居場所ある⇒地域への愛着高める⇒孤独感を減らす
- ・居場所ある⇒相談できる人の数⇒孤独感を減らす

2じゃあ、その居場所って？

- ・オンラインよりも、対面の居場所の効果

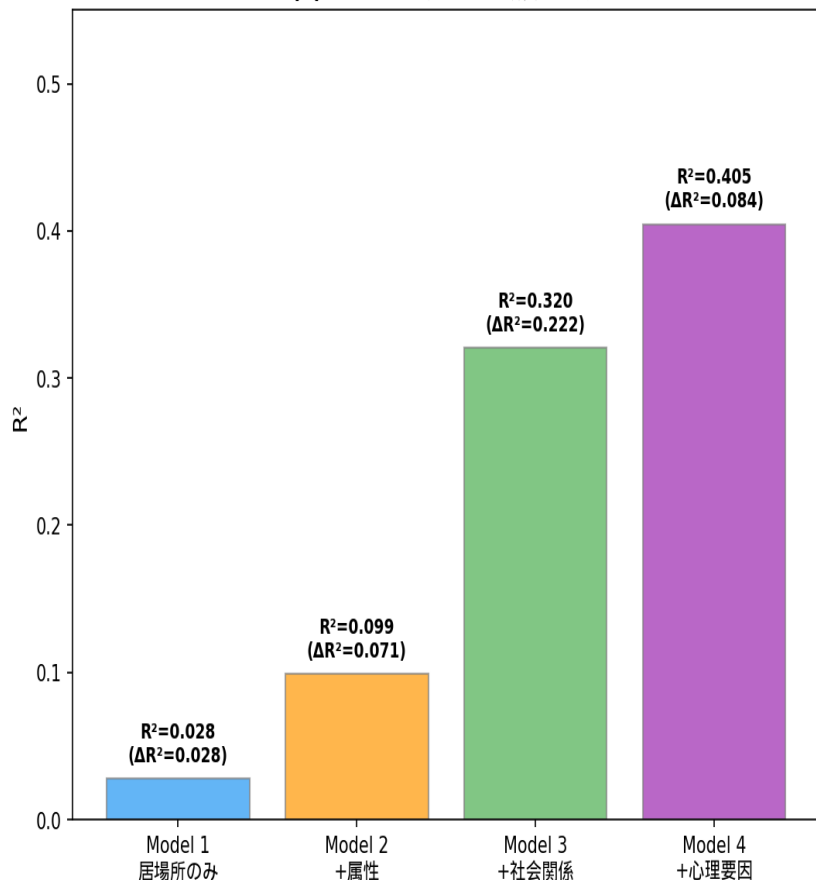
3その居場所で、大事なこと

- ・自己効力感を高められるようなもの
- 自己効力感って？どう高められるの？
⇒じぶんで決める、何かチャレンジできる
⇒そもそも、安心できること。失敗しても大丈夫だと思える

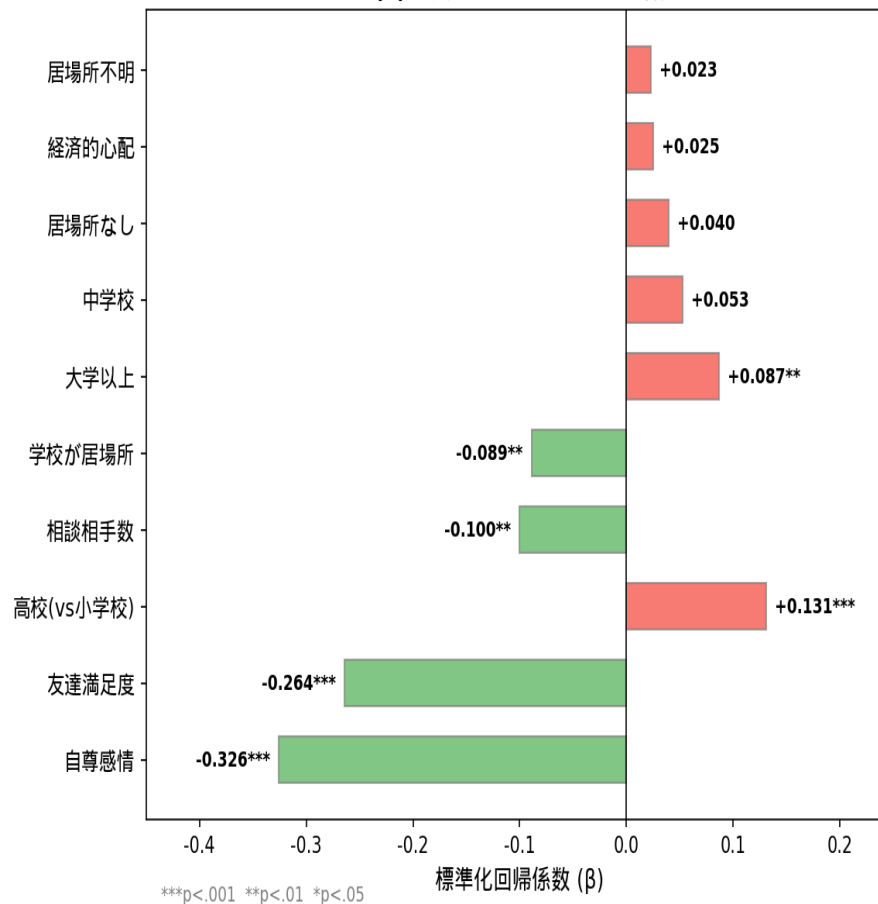
階層的重回帰分析の結果



(a) 階層的重回帰分析：説明力の推移



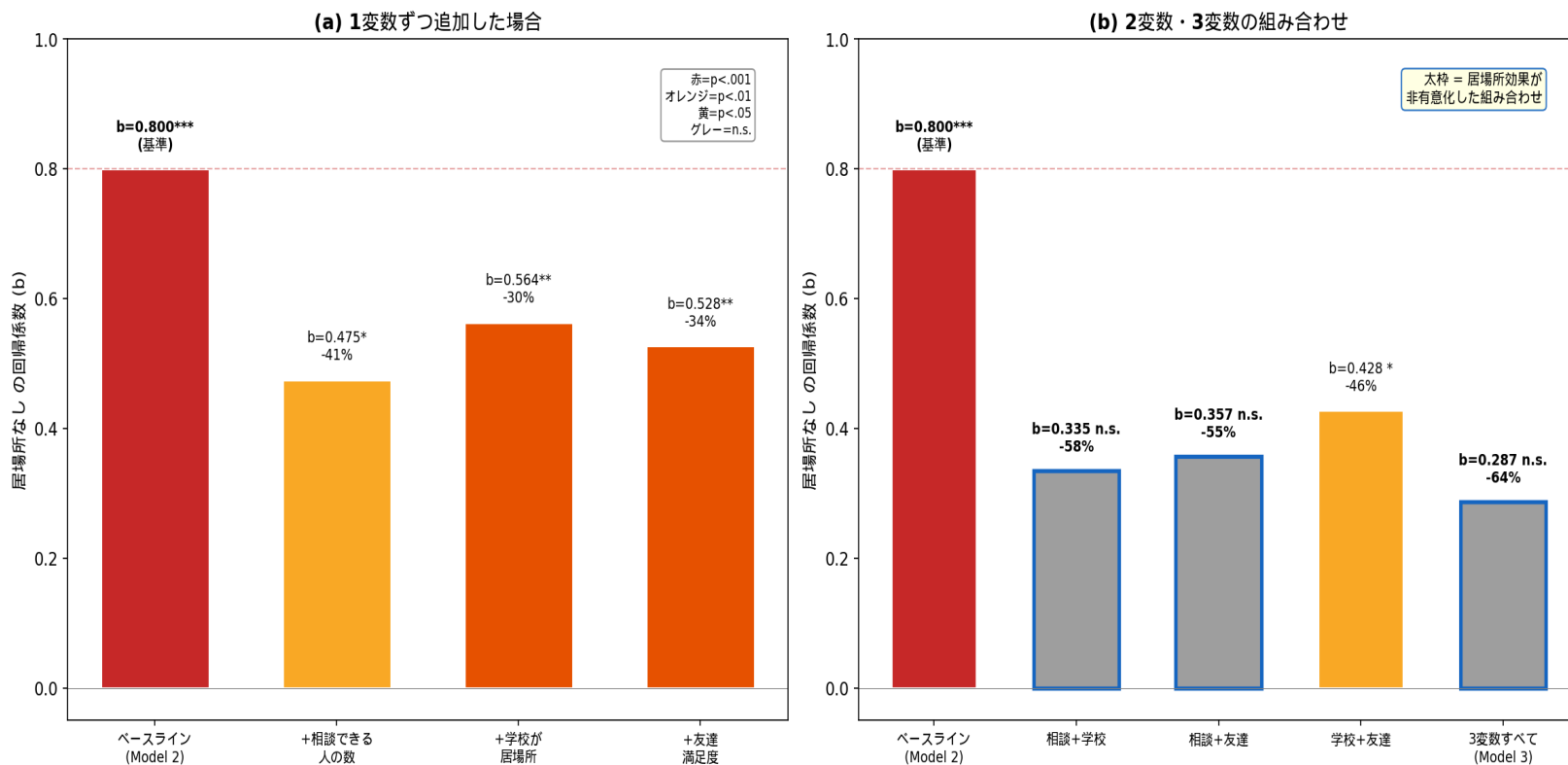
(b) 最終モデル：標準化回帰係数



媒介分析：居場所→愛着→孤独感



Model 3の社会関係変数：居場所効果の媒介分析





媒介分析の結果

直接効果（居場所→孤独感）

居場所の有無は、他の変数を統制すると孤独感への直接効果は非有意 ($\beta=-0.05$, n.s.)。
→ 居場所の効果は間接的経路が主。

間接効果（居場所→愛着→孤独感）

愛着を媒介する間接効果が有意。
居場所→愛着 ($\beta=+0.15$, $p<.001$)
愛着→孤独感 ($\beta=-0.25$, $p<.001$)
→ 居場所は愛着を高め、愛着が孤独感を低減させるメカニズム。

回帰分析の主要な予測因子

最も強い予測因子（標準化 β ）：

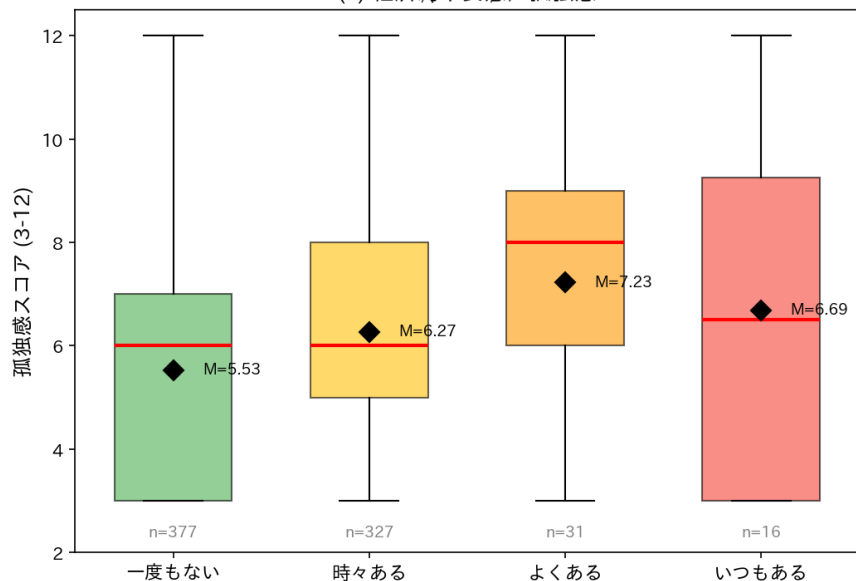
1. 自己効力感 ($\beta=-0.316$, $p<.001$)
→ 最大の保護因子
2. 愛着 ($\beta=-0.246$, $p<.001$)
→ 居場所の間接効果の媒介変数
3. 相談人数 ($\beta=-0.089$, $p=.013$)
→ 社会的ネットワークの量的効果
4. 年齢 ($\beta=+0.076$, $p=.009$)
→ 年長者ほど孤独感が高い

モデル全体: $R^2=.374$ (分散の37.4%を説明)

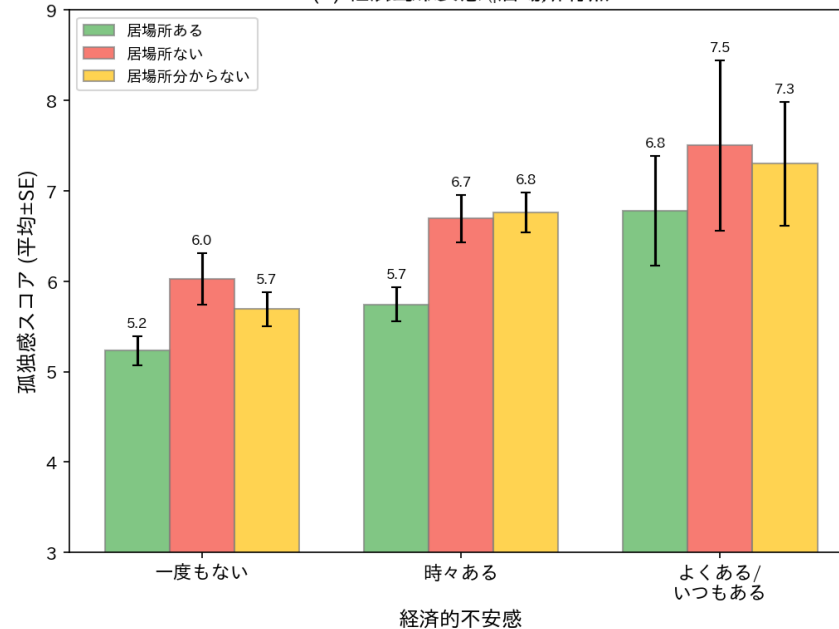
経済的不安感と孤独感



(a) 経済的不安感と孤独感



(b) 経済的不安感×居場所所有無



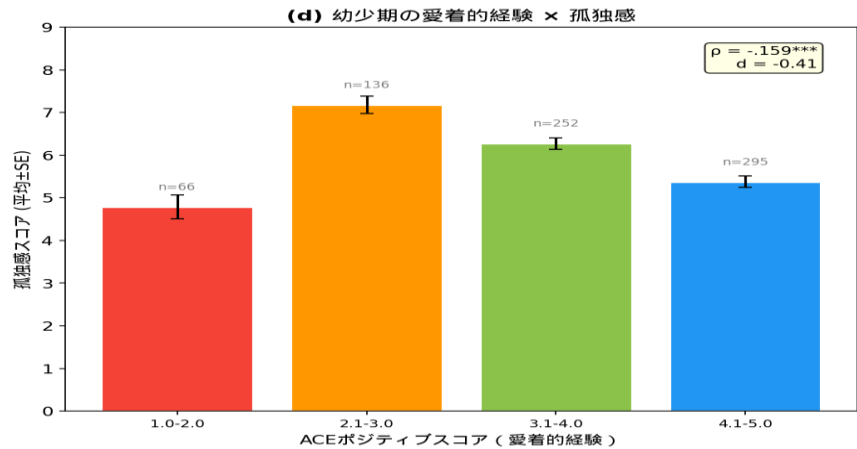
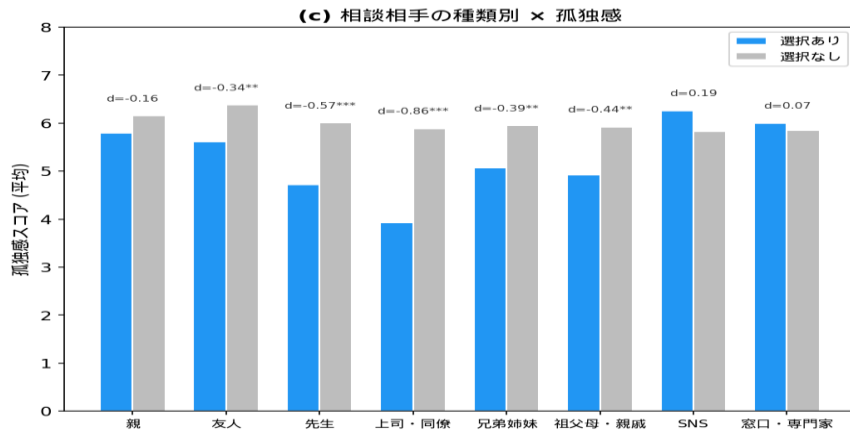
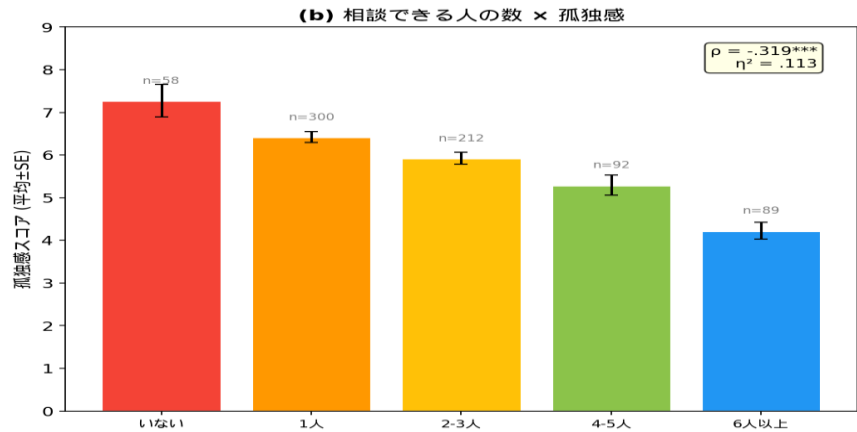
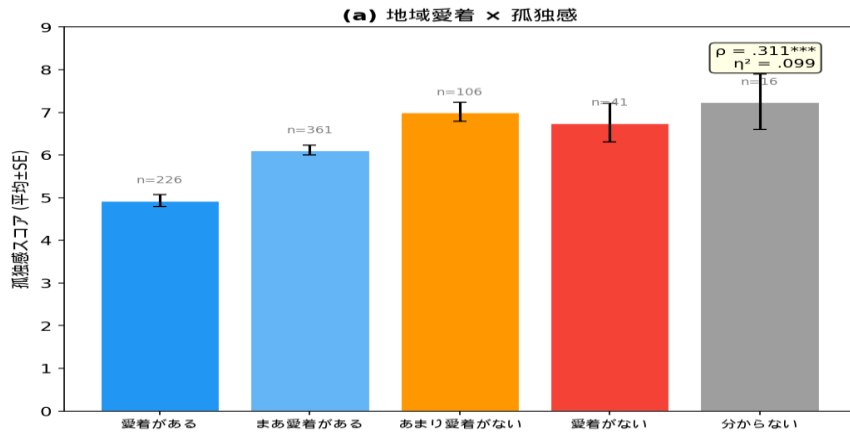
二変量: $F=9.82, p<.001, \eta^2=.038$ / 多変量 (心理要因統制後): $\beta=0.049, n.s. (p=.10)$ / 交互作用 (居場所×経済不安): $n.s. (p=.99)$

→ 経済的不安感は単独では孤独感と関連するが、自己効力感・愛着を統制すると独自の説明力は消失。心理的要因を介した間接的影響の可能性。

愛着・相談と孤独感



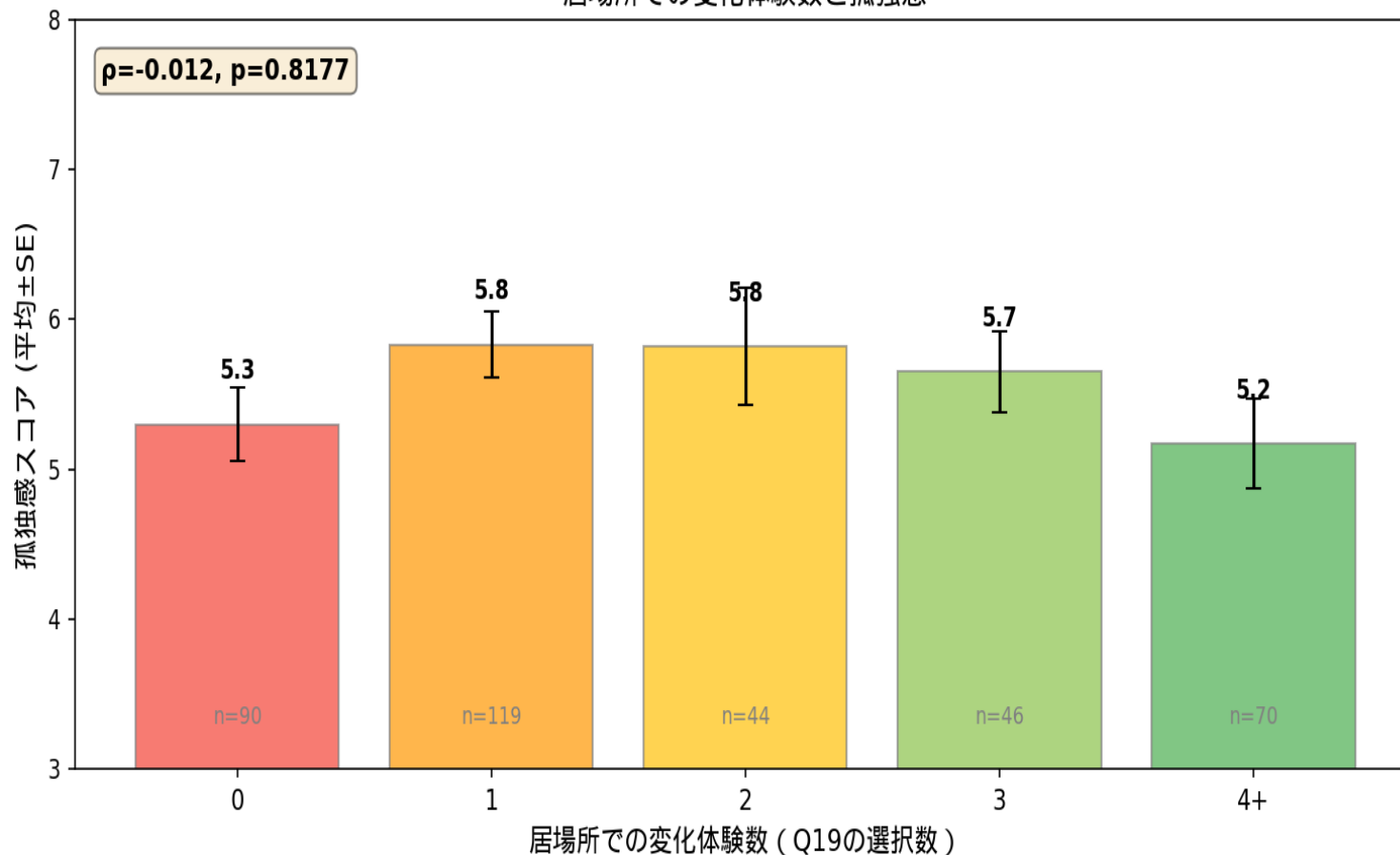
愛着・相談相手と孤独感の関連



居場所での変化体験と孤独感



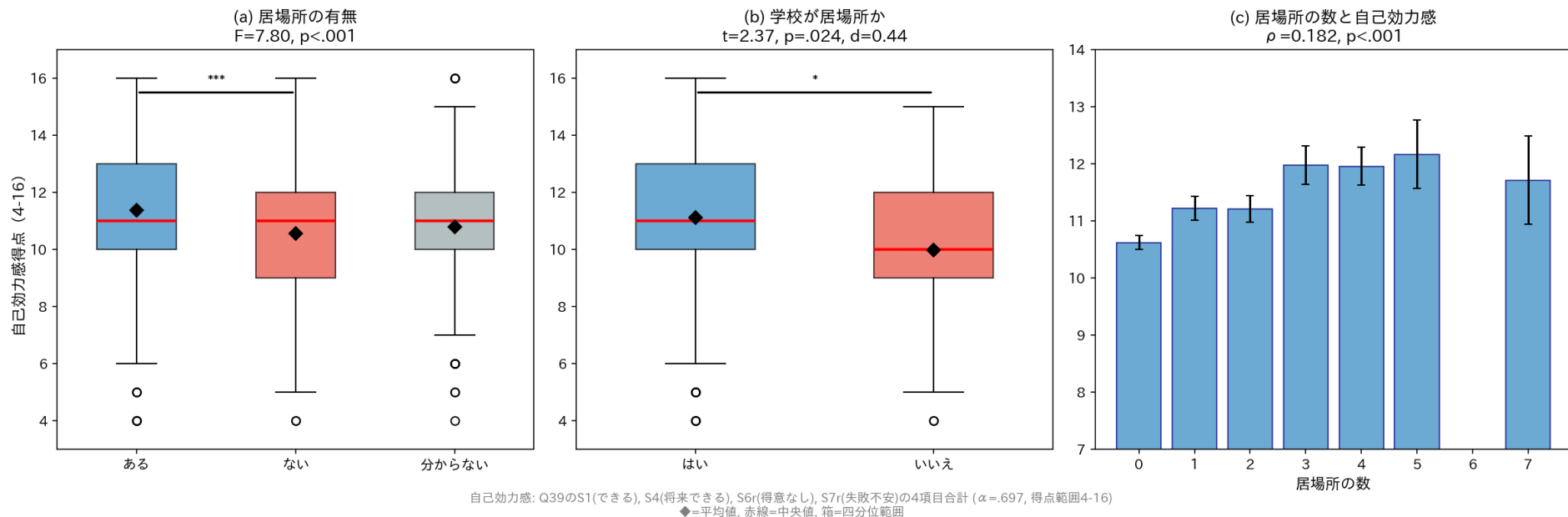
居場所での変化体験数と孤独感



居場所と自己効力感の関連



Fig.12 居場所と自己効力感の関連（二変量分析）





第1部：調査概要とUCLA孤独感尺度

調査デザイン / UCLA 3項目孤独感尺度の記述統計

第2部：サードプレイスと孤独感の関連

居場所類型別の孤独感 / 重回帰分析によるサードプレイスの効果

第3部：媒介変数の探索

世代間交流 / 友人接触 / ソーシャルキャピタル / 自己肯定感

第4部：ブートストラップ媒介分析 (Baron & Kenny)

B=5,000回の間接効果検定 / 有意な6つの媒介変数

第5部：因果媒介分析 (VanderWeele)

NDE/NIE効果分解 / E-value感度分析 / 2手法の比較



調査名

高浜市「まぜこぜの居場所」実態調査（2025年実施）

対象・方法

高浜市在住の子どもを持つ保護者（N=763）

自記式質問紙調査

主要変数

従属変数：UCLA 3項目孤独感尺度（Hughes et al., 2004）

得点範囲 3～12点（高得点ほど孤独感が強い）

Cronbach $\alpha = 0.818$ （良好な内的一貫性）

独立変数：サードプレイスの有無（Q12）

あり=1 / なし=0 / わからない（ダミー変数）

共変量

学歴、世帯構成、親の婚姻状況、世帯収入

第1部：調査概要とUCLA孤独感尺度

第2部：サードプレイスと孤独感の関連



Model 1 : サードプレイス + 基本属性

サードプレイスあり $\beta = -0.783$ ($p < 0.001$)

調整済み $R^2 = 0.100$

→ サードプレイスを有する保護者は、孤独感が約0.78点低い

Model 2 : Model 1 + 媒介候補変数

サードプレイスあり $\beta = -0.551$ ($p = 0.016$)

調整済み $R^2 = 0.178$

→ 媒介変数を投入後も有意だが、係数が30%低下

→ 部分媒介モデルが示唆される

主要な有意変数 (Model 2)

自己肯定感 $\beta = -0.149$ ($p < 0.001$) : 最も強い媒介候補

友人と会う頻度 $\beta = -0.326$ ($p < 0.001$)

地域の信頼感 $\beta = -0.365$ ($p = 0.002$)

第3部：媒介変数の探索

第4部：ブートストラップ媒 介分析

ブートストラップ媒介分析結果 (B=5,000)

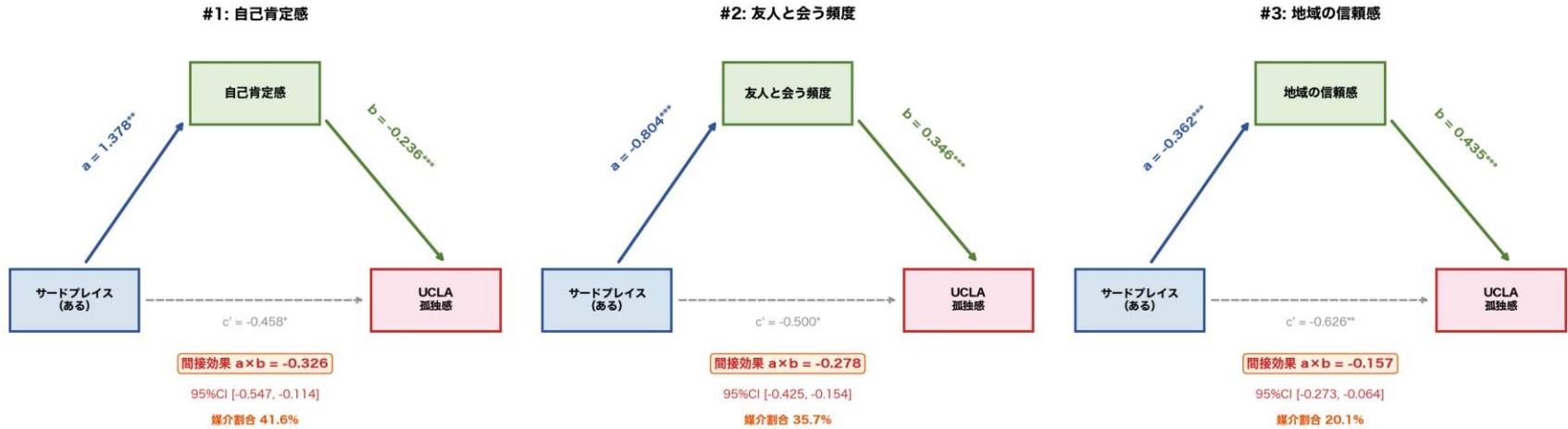


媒介変数	間接効果	95% CI下限	95% CI上限	有意	媒介割合
自己肯定感	-0.326	-0.547	-0.114	Yes	41.6%
友人と会う頻度	-0.278	-0.425	-0.154	Yes	35.7%
地域の信頼感	-0.157	-0.273	-0.064	Yes	20.1%
地域の互酬性	-0.106	-0.204	-0.034	Yes	13.6%
小学生との交流	-0.086	-0.177	-0.019	Yes	10.7%
友人と会った人数	-0.069	-0.149	-0.011	Yes	9.4%
中高生との交流	-0.052	-0.137	0.008	No	—
高齢者との交流	-0.033	-0.098	0.017	No	—
就学前児童との交流	-0.015	-0.080	0.040	No	—
地域のつきあい	-0.010	-0.062	0.037	No	—

媒介パス図 (図12)



サードプレイス → 孤独感の媒介経路 (上位3変数)
ブートストラップ法 B=5,000



第5部：VanderWeele因果媒介分析



理論的背景

VanderWeele & Vansteelandt (2014) の反事実枠組みに基づく因果媒介分析
Baron & Kenny法に加え、曝露-媒介変数の交互作用を考慮

効果の分解

NDE（自然直接効果）：媒介変数を通らないサードプレイスの直接効果

NIE（自然間接効果）：媒介変数を通じた間接効果

TE = NDE + NIE（総合効果）

感度分析（E-value）

未測定交絡が結果を無効化するために必要な最小効果の大きさ

E-value が大きいほど結果は頑健

分析対象

前段階で有意だった6つの媒介変数について因果媒介分析を実施

VanderWeele因果媒介分析結果

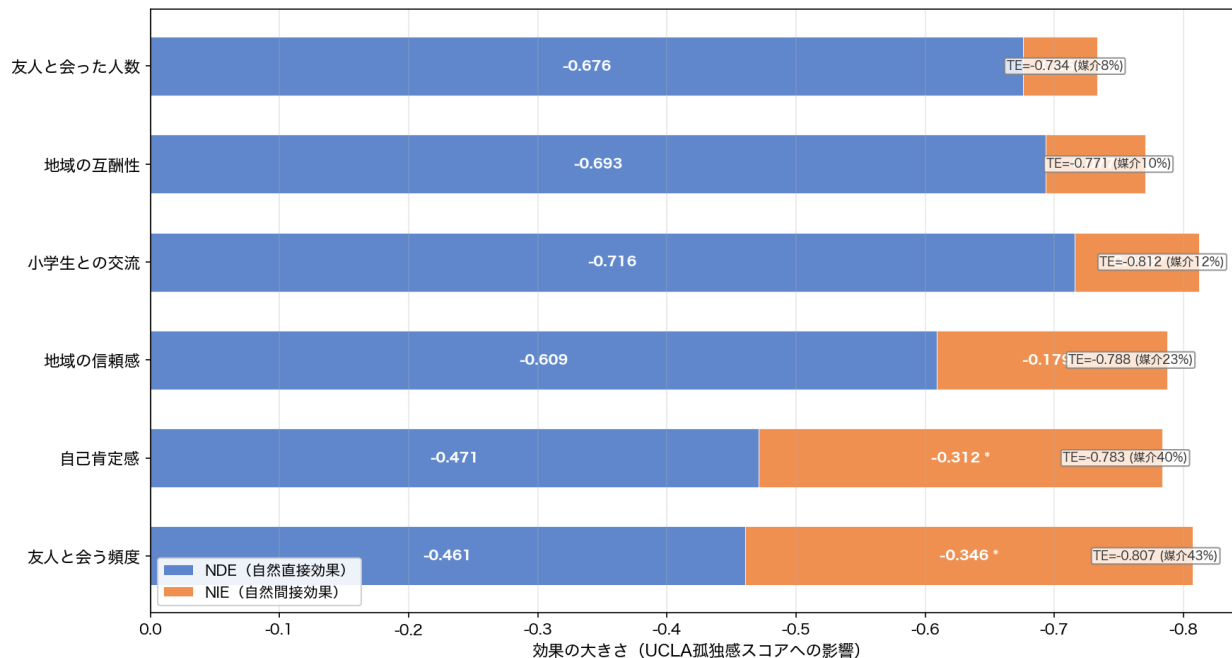


媒介変数	NDE	NIE	TE	媒介割合	NIE有意	E-value
友人接触頻度	-0.461	-0.346	-0.807	42.9%	Yes	1.55
自己肯定感	-0.471	-0.312	-0.783	39.9%	Yes	1.51
地域の信頼感	-0.609	-0.179	-0.788	22.7%	Yes	1.35
小学生との交流	-0.716	-0.096	-0.812	11.9%	Yes	1.24
地域の互酬性	-0.694	-0.077	-0.771	10.0%	Yes	1.21
友人人数	-0.676	-0.058	-0.734	7.9%	No	1.18

NDE/NIE効果分解 (図13)



VanderWeele因果媒介分析: 総合効果のNDE/NIE分解
(サードプレイスあり vs なし → UCLA孤独感)



【解釈】

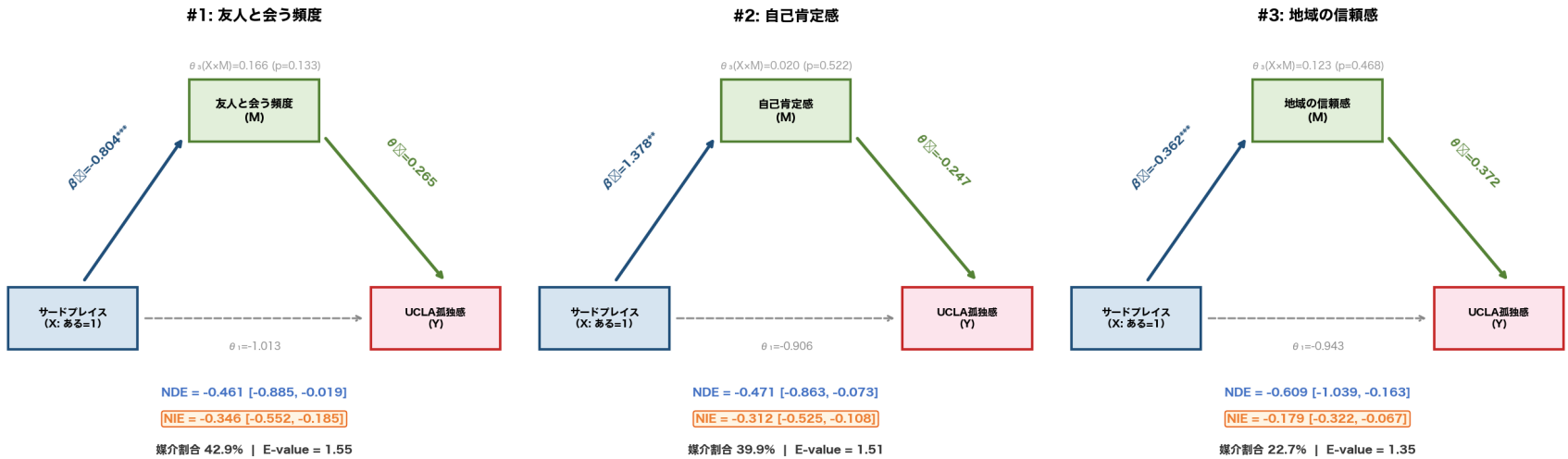
友人接触頻度 (42.9%) と自己肯定感 (39.9%) が最大の媒介割合。

全6変数で曝露-媒介変数交互作用 (θ_3) は非有意 → Baron & Kenny法と整合的。

因果媒介パス図 (図14)



VanderWeele 因果媒介分析: パス図 (上位3変数)
 $E[Y|X,M,C] = \theta_0 + \theta_1 X + \theta_2 M + \theta_3 XM + \theta_4 C$



2つの媒介分析手法の比較



Baron & Kenny + ブートストラップ法

心理学的伝統に基づく媒介分析

間接効果 $a \times b$ の95%信頼区間で検定 (B=5,000)

交互作用項を含まない → 効果修飾を見落とす可能性

VanderWeele因果媒介分析

疫学の反事実枠組みに基づく因果媒介分析

曝露-媒介変数交互作用を明示的にモデル化

感度分析 (E-value) で未測定交絡への頑健性を定量化

結果の一致

上位3変数 (自己肯定感、友人接触、地域信頼感) は両手法で一致

交互作用項は全て非有意 → 両手法の結果は整合的

VanderWeele法ではE-valueによる頑健性評価が付加された

総合考察



1. サードプレイスは孤独感を有意に低減する

サードプレイスありの保護者は孤独感が約0.78点低い ($\beta=-0.783$, $p<0.001$)
共変量調整後も効果は持続 ($\beta=-0.551$, $p=0.016$)

2. 自己肯定感が最重要な媒介経路

サードプレイス → 自己肯定感↑ → 孤独感↓ (媒介割合 約40%)
サードプレイスが自己価値感を高める場として機能

3. 友人ネットワークの拡大が2番目の経路

サードプレイス → 友人接触↑ → 孤独感↓ (媒介割合 約36-43%)
対面での社会的つながりの場としてのサードプレイスの役割

4. 地域ソーシャルキャピタルも媒介経路

信頼感 (22.7%) ・ 互酬性 (10.0%) ・ 世代間交流 (11.9%)
サードプレイスが地域の社会関係資本を醸成する



政策的含意

サードプレイスの整備は保護者の孤独感対策として有効
特に自己肯定感を育む活動プログラムの組み込みが重要
友人づくりを促進する場のデザイン（交流イベント等）
多世代交流の機会を意図的に設計する

研究の限界

横断研究のため因果関係の方向性は確定できない
自己報告データによるバイアスの可能性
E-value（NIE: 1.21～1.55）はやや小さく、未測定交絡の影響を完全に排除できない
高浜市という単一自治体のデータであり一般化に限界

今後の課題

縦断的調査による因果関係の検証
介入研究（サードプレイス整備前後の比較）
他地域での追試による外的妥当性の検証



- 幸福感との関連について、自分の家が居場所でないと、幸福感が低い傾向。
- 学校が居場所でないと、幸福感が低い傾向。
- 地域への愛着が高まるほど、幸福感が高い傾向
- 相談できる人が多いほど、幸福感が高い傾向

項目	カテゴリ	係数 (Coef.)	95%信頼区間
自分の部屋が居場所	はい	1	
	いいえ	-0.1734	[-1.1042, 0.7574]
	あてはまるものはない	0.3118	[-0.3227, 0.9462]
自分の家が居場所	はい	1	
	いいえ	-2.1821*	[-3.2587, -1.1054]
	あてはまるものはない	-0.788	[-2.0263, 0.4502]
学校が居場所	はい	1	
	いいえ	-1.3179*	[-1.9408, -0.6951]
	あてはまるものはない	-1.3221*	[-2.0050, -0.6391]
地域への愛着	-	0.3593*	[0.1636, 0.5550]
相談できる人の多さ	-	0.5524*	[0.3841, 0.7206]

生活満足度



- 生活満足度との関連について、自分の家が居場所でない、生活満足度が低い傾向。
- 学校が居場所でない、生活満足度が低い傾向。
- 地域への愛着が高まるほど、生活満足度が高い傾向
- 相談できる人が多いほど、生活満足度が高い傾向

項目	カテゴリ	係数 (Coef.)	95%信頼区間
自分の部屋が居場所	はい	1	
	いいえ	0.132	[-0.097, 0.361]
	あてはまるものはない	-0.028	[-0.183, 0.128]
自分の家が居場所	はい	1	
	いいえ	-0.298*	[-0.563, -0.034]
	あてはまるものはない	-0.294	[-0.598, 0.011]
学校が居場所	はい	1	
	いいえ	-0.381*	[-0.534, -0.228]
	あてはまるものはない	-0.284*	[-0.452, -0.116]
地域への愛着	-	0.1308*	[0.0903, 0.1712]
相談できる人の多さ	-	0.1060*	[0.0712, 0.1408]

レジリエンス



- レジリエンスとの関連について、学校が居場所でないときレジリエンスが低い傾向。
- 互酬性の規範が高いとき、レジリエンスが高い傾向。
- 相談できる人が多いほど、レジリエンスが高い傾向

項目	カテゴリ	係数 (Coef.)	95%信頼区間
自分の部屋が居場所	はい	1	
	いいえ	-0.141	[-7.433, 7.151]
	あてはまるものはない	-1.371	[-6.342, 3.600]
自分の家が居場所	はい	1	
	いいえ	-11.987	[-20.423, -3.552]
	あてはまるものはない	-1.749	[-11.450, 7.952]
学校が居場所	はい	1	
	いいえ	-7.043*	[-11.923, -2.164]
	あてはまるものはない	-10.116*	[-15.466, -4.765]
互酬性※	-	2.4521*	[0.6676, 4.4358]
相談できる人の多さ	-	2.4521*	[1.2058, 3.6985]
※地域の人以外の人の役に立とうと思うか			

孤独感と心理的ネグレクト



- 孤独感との関連について、愛着があると、孤独感が低い傾向。
- 相談できる人が多いほど、孤独感が低い傾向。
- 両親が離婚していると、心理的ネグレクトが低い傾向。
- 自分の家が居場所でない、と、心理的ネグレクトが高い傾向

孤独感

項目	カテゴリ	係数 (Coef.)	95%信頼区間
愛着	-	-0.1491*	[-0.2207, -0.0775]
相談できる人の多さ	-	-0.1633*	[-0.2249, -0.1018]

心理的ネグレクト

項目	カテゴリ	係数 (Coef.)	95%信頼区間
両親について	結婚している	1	
	結婚していない	-2.281	[-6.816, 2.254]
	離婚した	-3.415*	[-6.303, -0.528]
	どちらかが亡くなっている	-1.148	[-7.290, 4.993]
	どちらも今はいない	-	-
	その他	-1.134	[-12.707, 10.439]
	答えたくない	-0.123	[-4.595, 4.350]
自分の家が居場所	はい	1	
	いいえ	4.233*	[1.049, 7.417]
	あてはまるものはない	-1.749	[-11.450, 7.952]

孤独感と第3の居場所の関連



- 孤独感と第3の居場所との関連について、第3の居場所があると孤独感が低い傾向。
- モデル2で相談できる人の数を考慮すると、係数が減少した。
- 第3の居場所があることで、相談できる人の多さにつながり、孤独感が低い可能性。
- 1時点の横断調査であるため、時系列の解釈には注意が必要。

		モデル1	モデル2
項目	カテゴリ	null	相談できる人の多さ
第3の居場所	いいえ	1	1
	はい	-0.2713096*	-0.1665529*
	あてはまるものはない	-0.0233982	-0.0054335

モデル1：居住地、在学状況、両親の状況、経済的不安感

モデル2：モデル1＋相談できる人の多さ

※係数はすべて有意差あり



1. 対面型居場所の拡充

習い事・塾 ($d=-0.41$)、友達の家 ($d=-0.38$)、祖父母宅 ($d=-0.35$) が有意に孤独感を低下。対面での継続的な人間関係を伴う場が重要。

2. SNS依存への対応

SNSを居場所とする群は孤独感が最も高い ($d=+0.60$)。因果の方向は要検討だが、オンラインに依存する子どもへの対面型居場所への橋渡し支援が必要。

3. 愛着形成を促す場づくり

愛着 ($\beta=-0.246$) が居場所効果の媒介変数。安定した大人との関係性を育む環境設計が居場所施策の核心。

4. 自己効力感の支援

自己効力感 ($\beta=-0.316$) は最大の保護因子。居場所での「変化体験」（新しいことへの挑戦、自己決定の経験など）が孤独感低減に寄与。成功体験を積める活動プログラムの設計が有効。

5. 相談体制の整備

相談人数 ($\beta=-0.089$) が独立した保護因子。0人群 ($M=7.3$) は深刻なリスク群。相談相手のいない子どもの早期発見と信頼できる大人とのマッチングが急務。

6. 経済的困窮への留意

経済的不安感は二変量では有意だが、心理要因を介した間接効果の可能性。経済支援と心理支援の両輪アプローチが重要。



分析の要約

高浜市の子ども・若者（n=751）を対象にUCLA孤独感尺度短縮版（3-12点）を用いて分析。
居場所の有無、種類、心理的メカニズム、経済的不安感との関連を多面的に検討した。

主要な知見

- (1) 居場所「ある」群は「ない」群より孤独感が有意に低い（ $\eta^2=.028$ ）。学校適応の効果量は大（ $d=0.73$ ）。
- (2) 居場所の種類では、習い事・友達の家・祖父母宅が保護的、SNSはリスク要因（Bonferroni補正後も有意）。
- (3) 階層的回帰の結果、自己効力感（ $\beta=-0.316$ ）と愛着（ $\beta=-0.246$ ）が最も強い保護因子。
- (4) 居場所の効果は愛着を媒介して間接的に孤独感を低減する（媒介分析で確認）。
- (5) 経済的不安感は二変量では有意（ $\eta^2=.038$ ）だが、心理要因を統制すると非有意（ $\beta=0.049, n.s.$ ）。

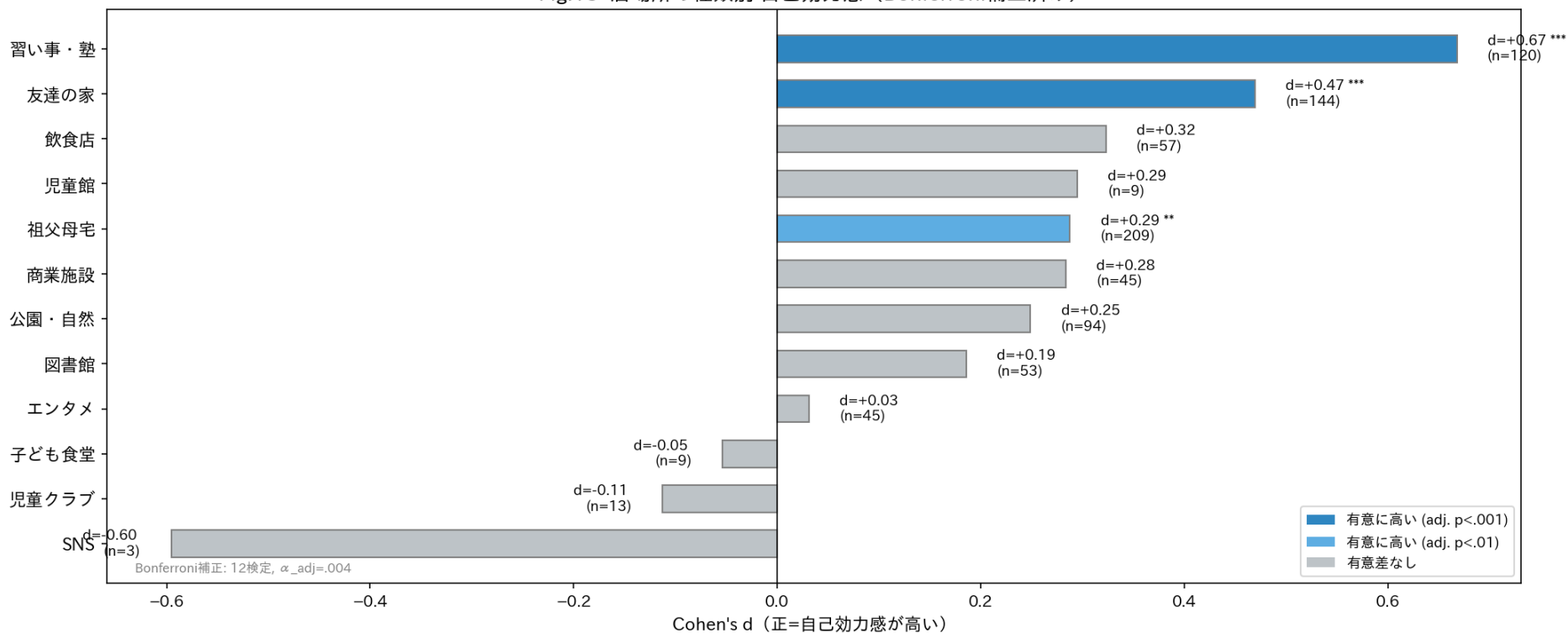
実践への示唆

対面型・関係性重視の居場所整備、SNS依存の子どもへの対面型橋渡し支援、
愛着形成と自己効力感を高めるプログラム設計、相談相手のいない子どもの早期把握が重要。

居場所種類別と自己効力感



Fig.13 居場所の種類別 自己効力感 (Bonferroni補正済み)





參考資料 (過去資料)





アウトカム別結果





日本語版 Short-form UCLA 孤独感尺度(第3版) 10項目版・3項目版

それぞれの項目について、あなたはどのくらいの頻度で感じているか
お答えください。

あてはまる番号ひとつに○をつけてください。

	決してない	ほとんどない	時々ある	常にある
① 自分には人との付き合いがないと感じることがありますか	1	2	3	4
2) 自分は周りの人たちと共通点が多いと感じることがありますか(*)	1	2	3	4
3) 自分には親しい人たちがいると感じますか(*)	1	2	3	4
④ 自分は取り残されていると感じることがありますか	1	2	3	4
5) 自分のことを本当によく知っている人は誰もいないと感じることはありますか	1	2	3	4
⑥ 自分は他の人たちから孤立していると感じることはありますか	1	2	3	4
7) 自分を本当に理解している人がいると感じますか(*)	1	2	3	4
8) 周りの人たちと一体感がもてないと感じることはありますか	1	2	3	4
9) 話し相手がいると感じますか(*)	1	2	3	4
10) 頼れる人がいると感じますか(*)	1	2	3	4

なお、○を付した項目は3項目版を示す

注)2,3,7,9,10 (*)は逆転項目(評定は1=4, 2=3, 3=2, 4=1に換算)

Arimoto A & Tadaka E:Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale version 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. BMC Women's Health. 2019;19:105. DOI:10.1186/s12905-019-0792-4

改訂版子どもと若者のレジリエンス尺度日本語版



APPENDIX 改訂版子どもと若者のレジリエンス尺度日本語版

それぞれの項目について、あなたにどのくらいあてはまりますか。もっとも近いものに○をつけてください。(○はそれぞれ1つずつ)

					
	まったくあてはまらない	わずかにあてはまる	少しあてはまる	かなりあてはまる	とてもあてはまる
1 私は周りの人たちと協力することができる	1	2	3	4	5
2 教育を受けることは重要だと思う	1	2	3	4	5
3 時や場所によって自分がどのように行動するべきかを知っている	1	2	3	4	5
4 親(保護者)は、私のことをとてもよく気にかけてくれている	1	2	3	4	5
5 親(保護者)は、私のことをよく知っている(友だちがだれかや、何が好きかなど)	1	2	3	4	5
6 お腹がすいたら食べるものが十分にある	1	2	3	4	5
7 他の人が一緒にいると楽しいと思うような子どもである	1	2	3	4	5
8 自分の気持ちについて家族に話す	1	2	3	4	5
9 友達に支えられていると感じる	1	2	3	4	5
10 自分が学校に溶け込んでいると感じている	1	2	3	4	5
11 つらいときに気にかけてくれる家族がいる(たとえば、具合が悪かったり、何か間違っただけをしたときなど)	1	2	3	4	5
12 つらいときに気にかけてくれる友達がいる(たとえば、具合が悪かったり、何か間違っただけをしたときなど)	1	2	3	4	5
13 学校などのコミュニティ(社会・グループのこと)で公平に扱われている	1	2	3	4	5
14 自分が成長し、責任を持って行動できるようになったことを、他の人に見せる機会がある	1	2	3	4	5
15 家族と一緒にいると安心する	1	2	3	4	5
16 将来役立つことを学ぶ機会がある(料理や仕事、人助けなど)	1	2	3	4	5
17 季節の行事や伝統などを家族と楽しんでいる	1	2	3	4	5

日本語版子ども期のトラウマ体験質問紙



あなたの体験についてお尋ねします。最も当てはまるものを選んでください。

1. 自分は大切に特別な存在だと思わせてくれる人がいた（逆転項目）
2. 愛されていると感じていた（逆転項目）
3. 家族の人たちは互いのめんどろを見た（逆転項目）
4. 家族の人たちは互いに親しみを感じていた（逆転項目）
5. 家族は力の源であり、私を支えてくれた（逆転項目）

Emotional Neglect（心理的ネグレクト） 5-16点（なし）、17点以上（あり）



●日本語版.

Q. 以下の文それぞれについて、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. 非常にあてはまる」のうち、あてはまる数字1つを選んで○をつけてください。

1 自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う。

2 周りの人に認められていると感じる。

3 大切な人を幸せにしていると思う。

4 平凡だが安定した日々を過ごしている。

5 大きな悩み事はない。

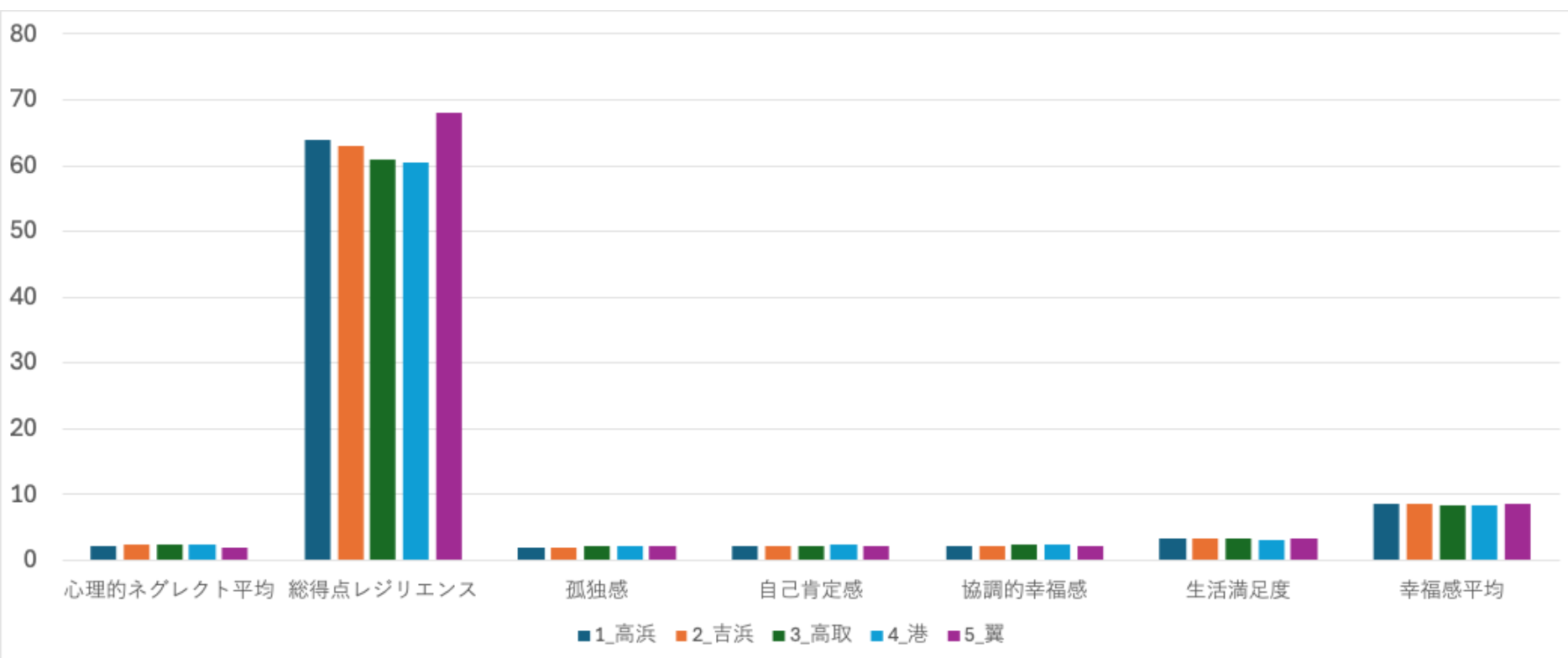
6 人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができている。

7 まわりの人たちと同じくらい幸せだと思う。

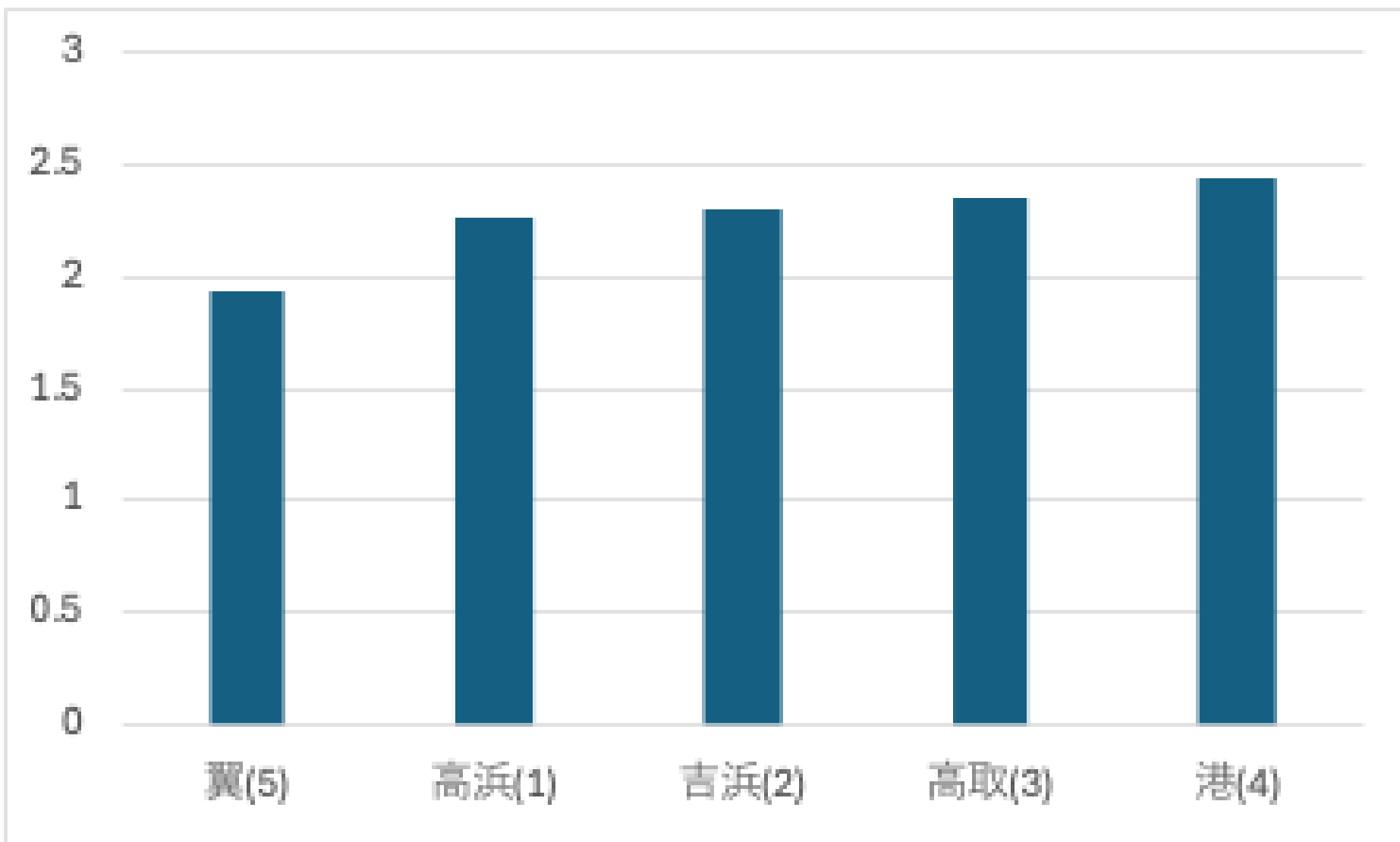
8 まわりの人並みの生活は手に入れている自信がある。

9 まわりの人たちと同じくらい、それなりにうまくいっている。

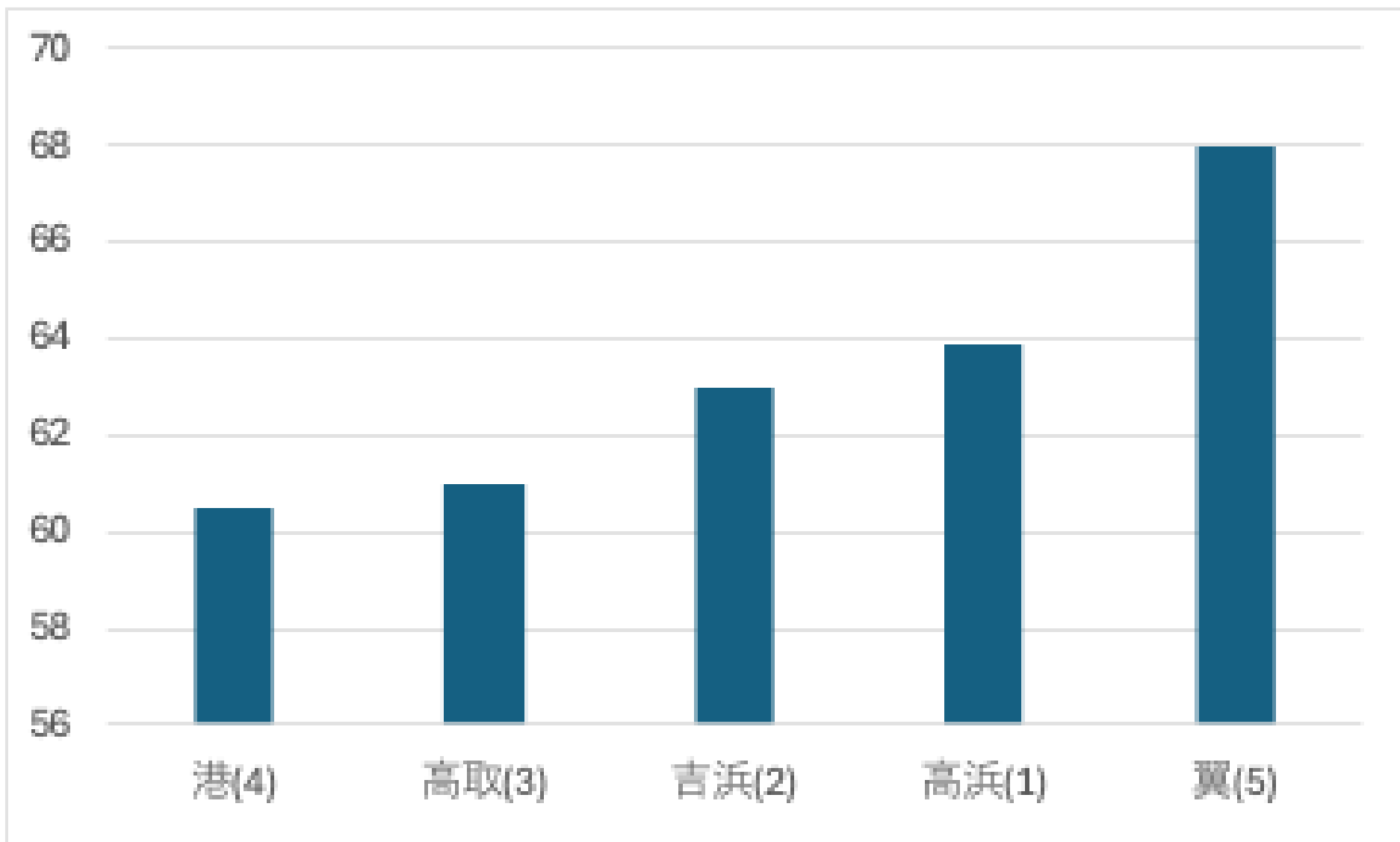
小学校区別各アウトカム指標平均値



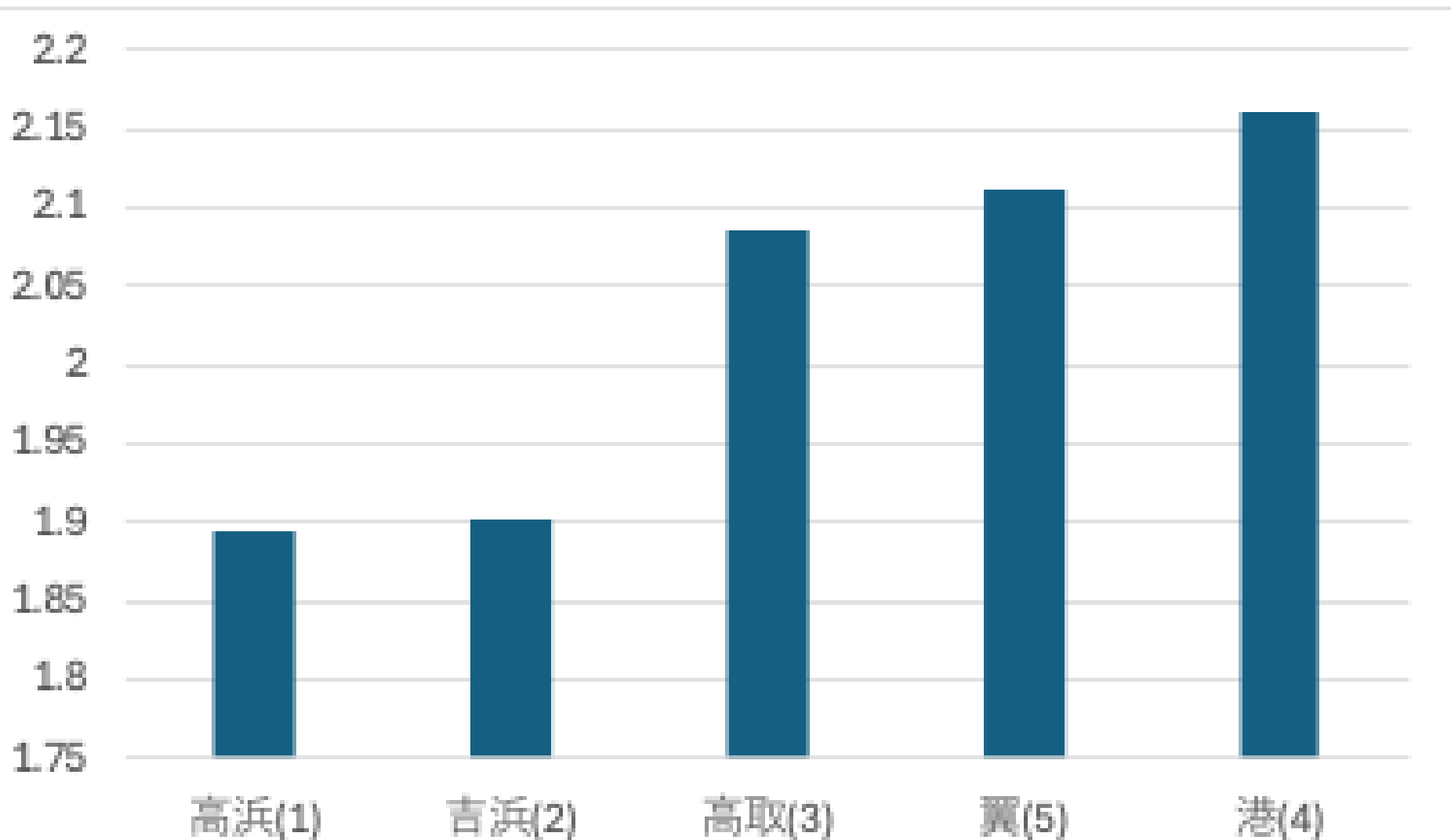
心理的ネグレクト平均点



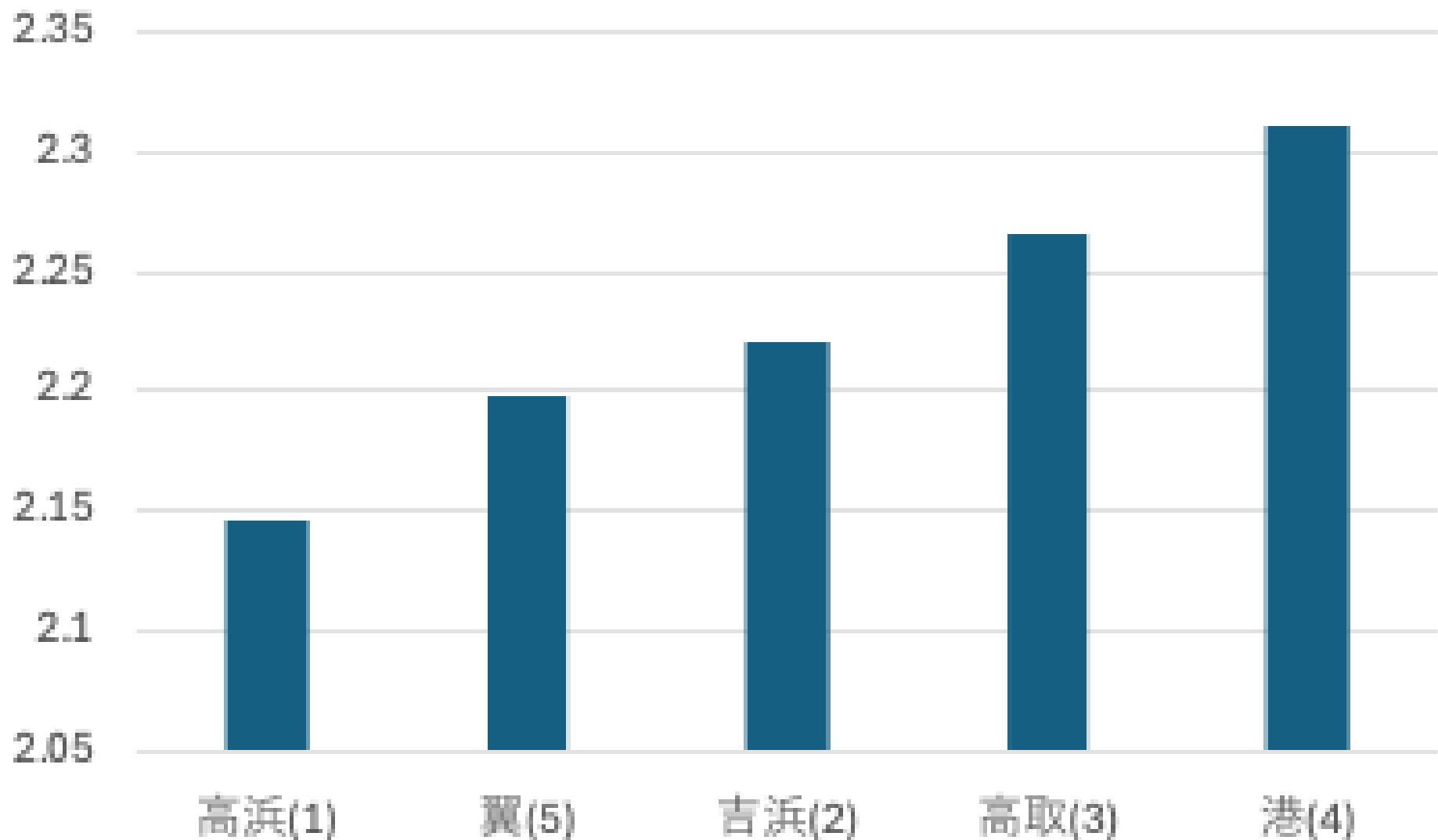
レジリエンス総得点の平均点



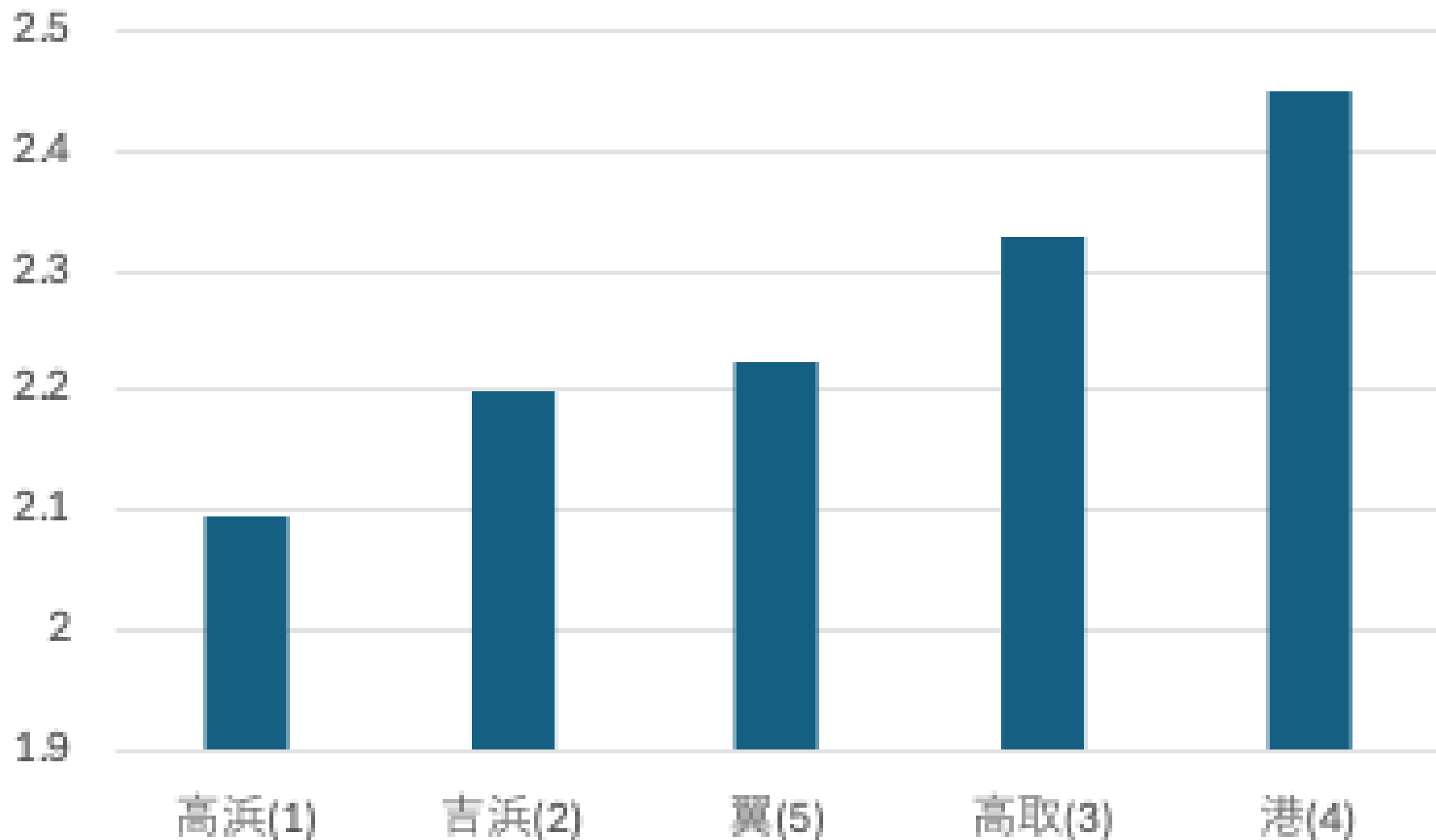
孤独感尺度平均点



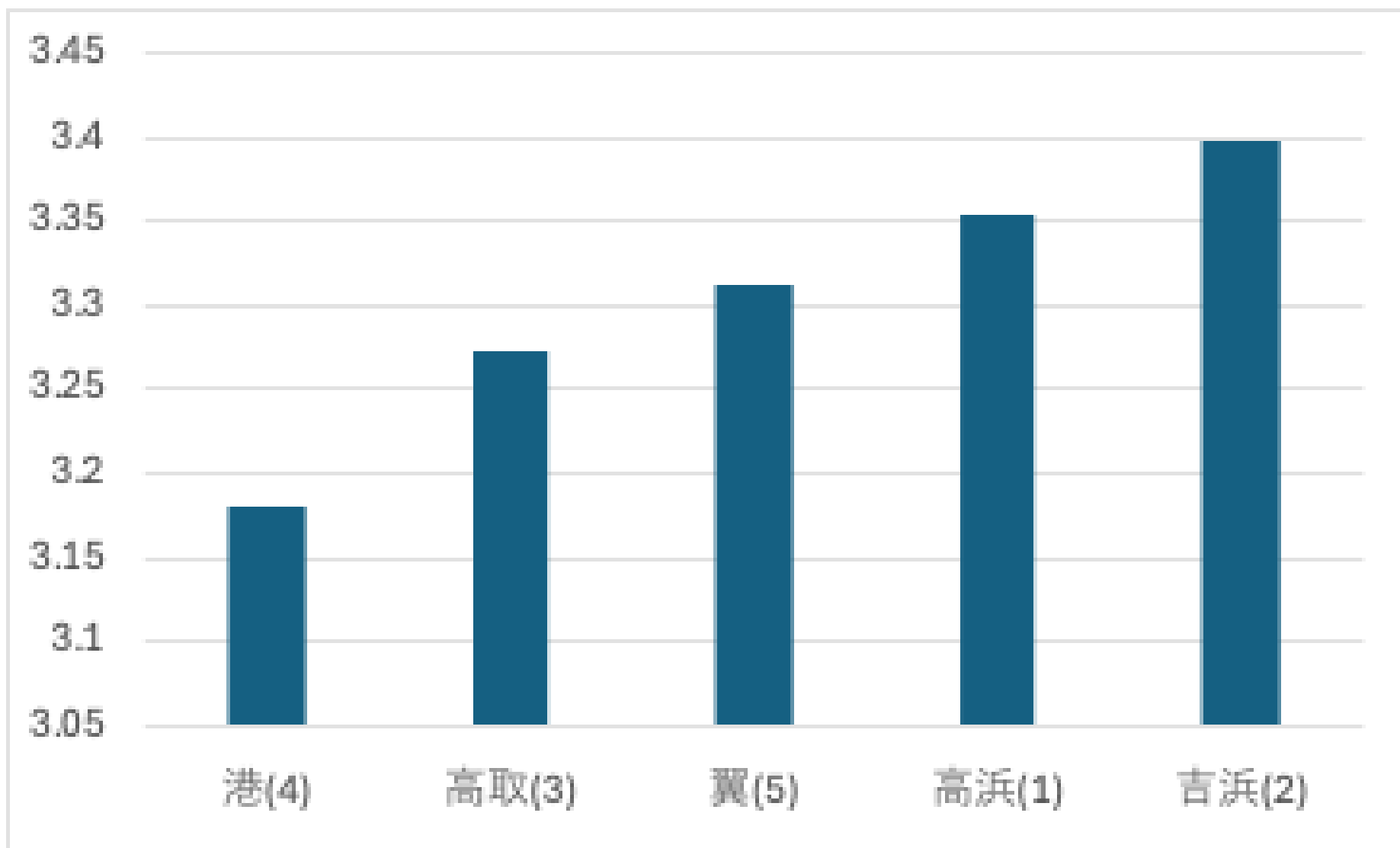
自己肯定感



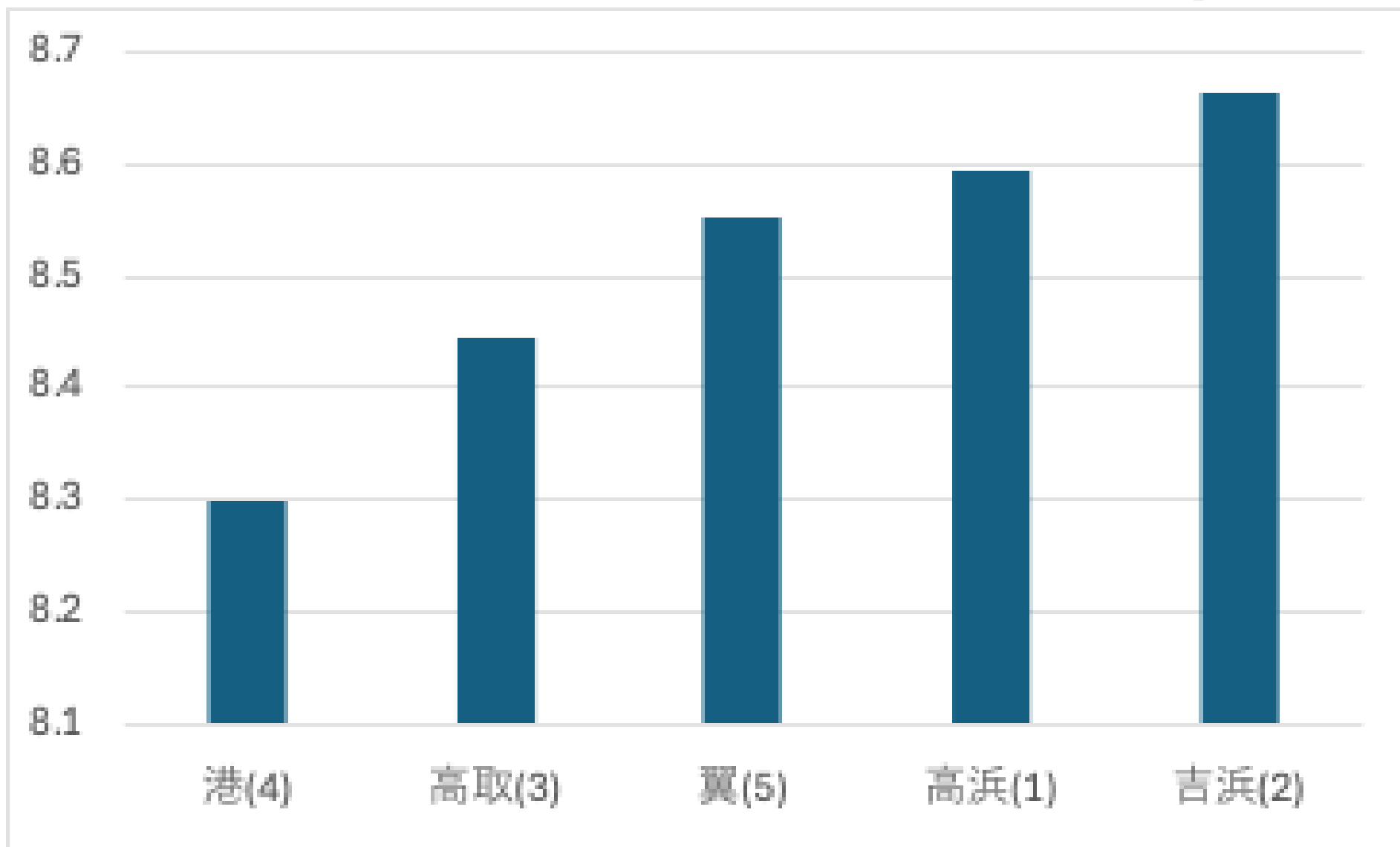
協調的幸福感の平均点



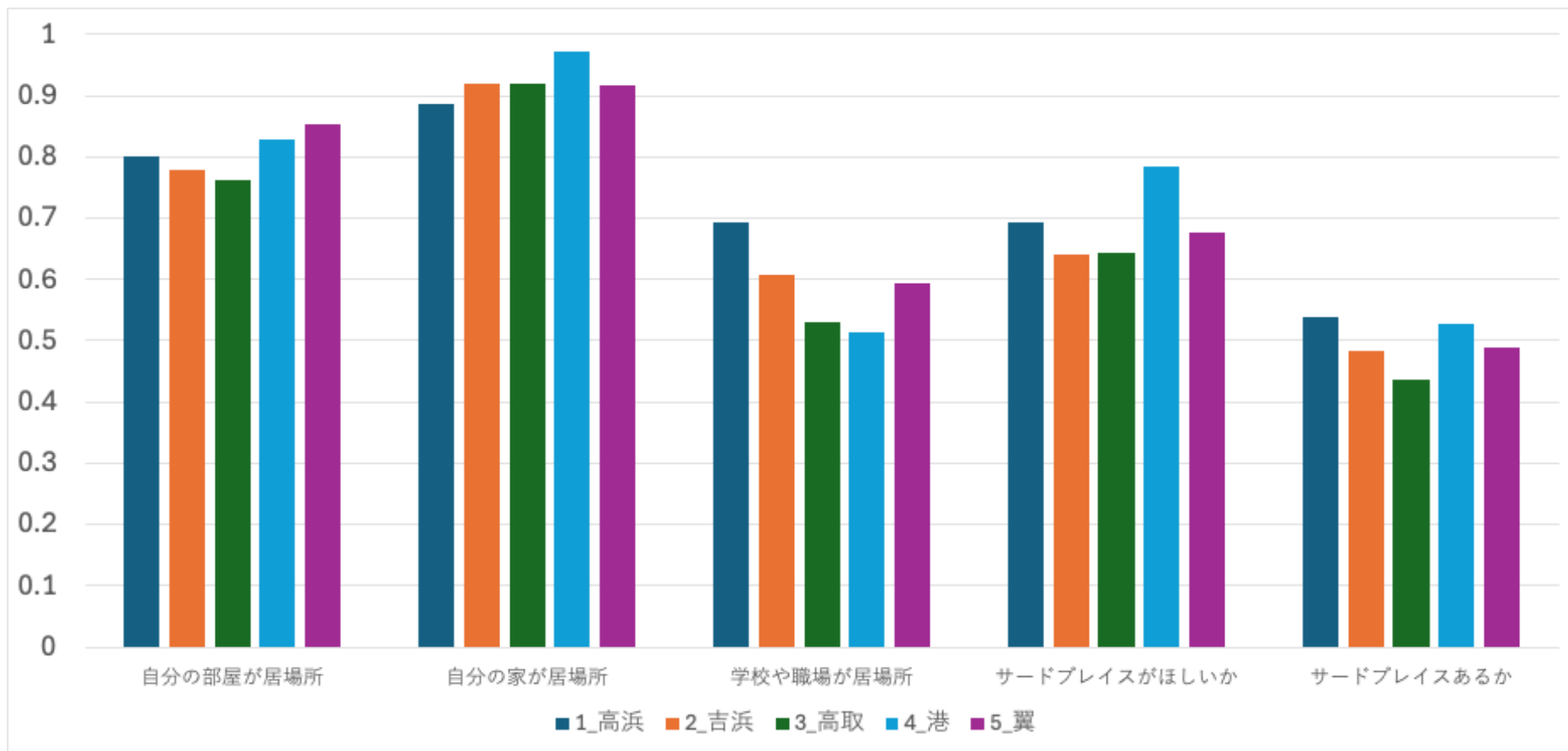
生活満足度平均点



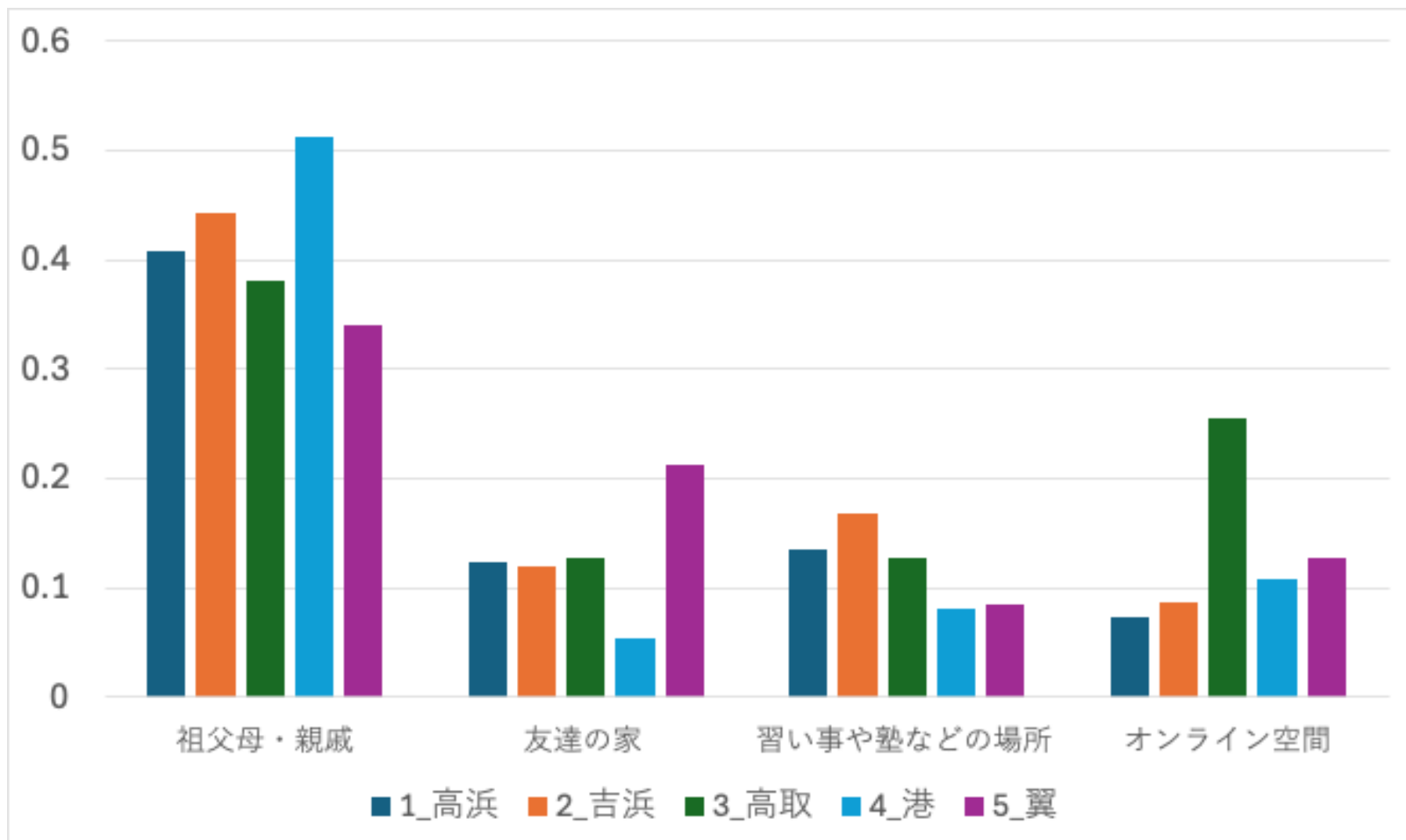
幸福感平均



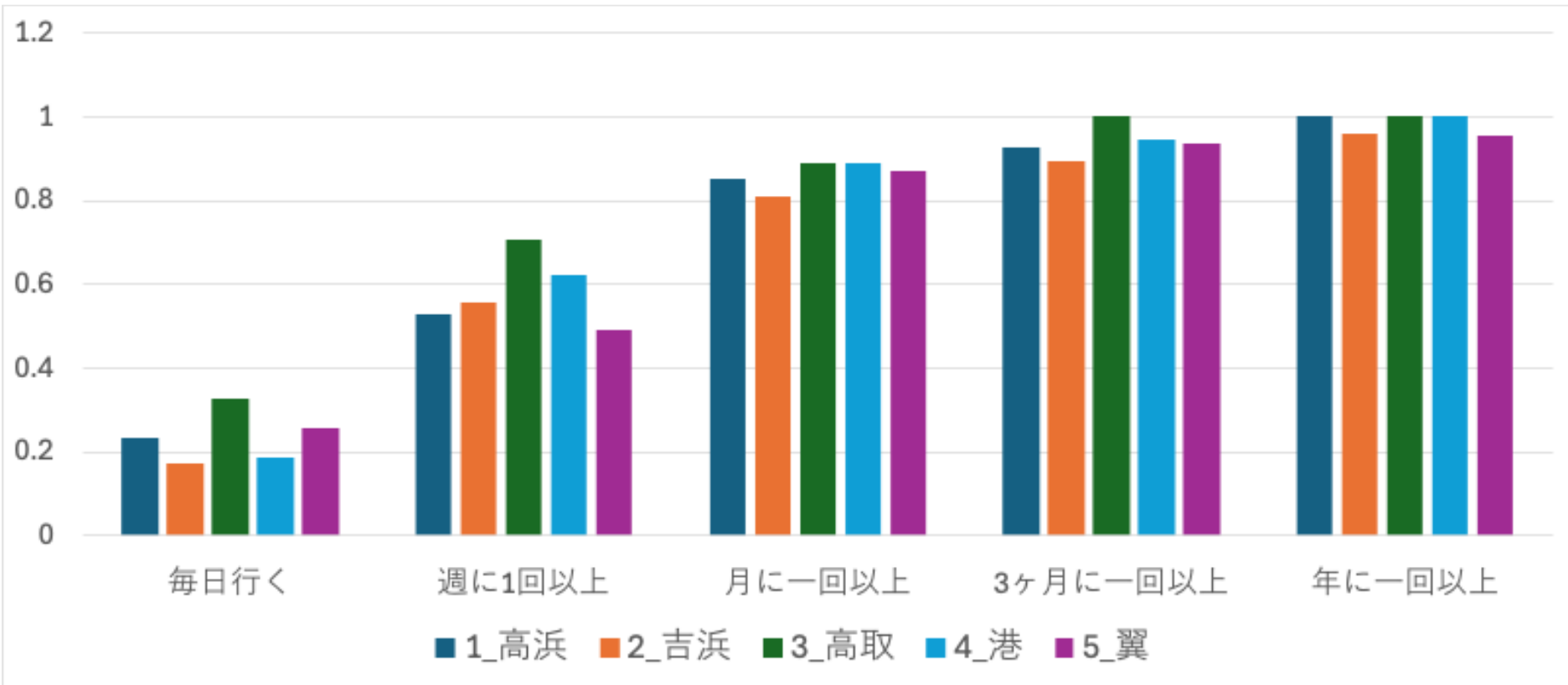
小学校区別サードプレイス関連指標の割合



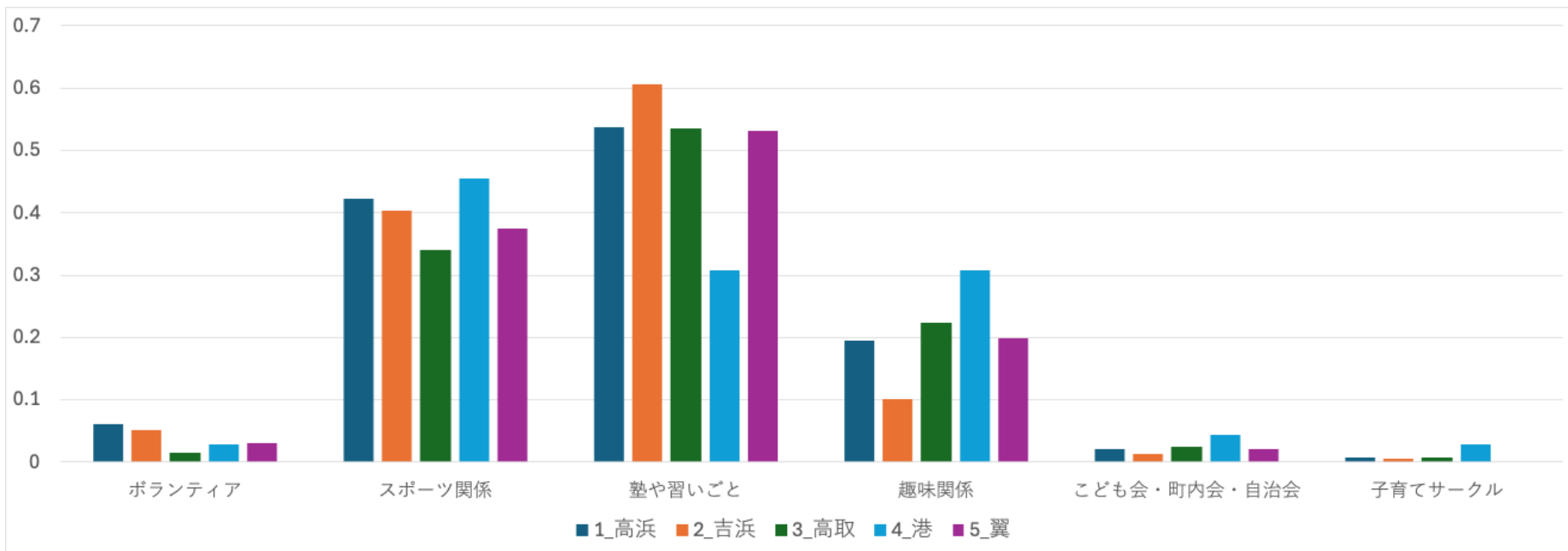
1番の居場所は？



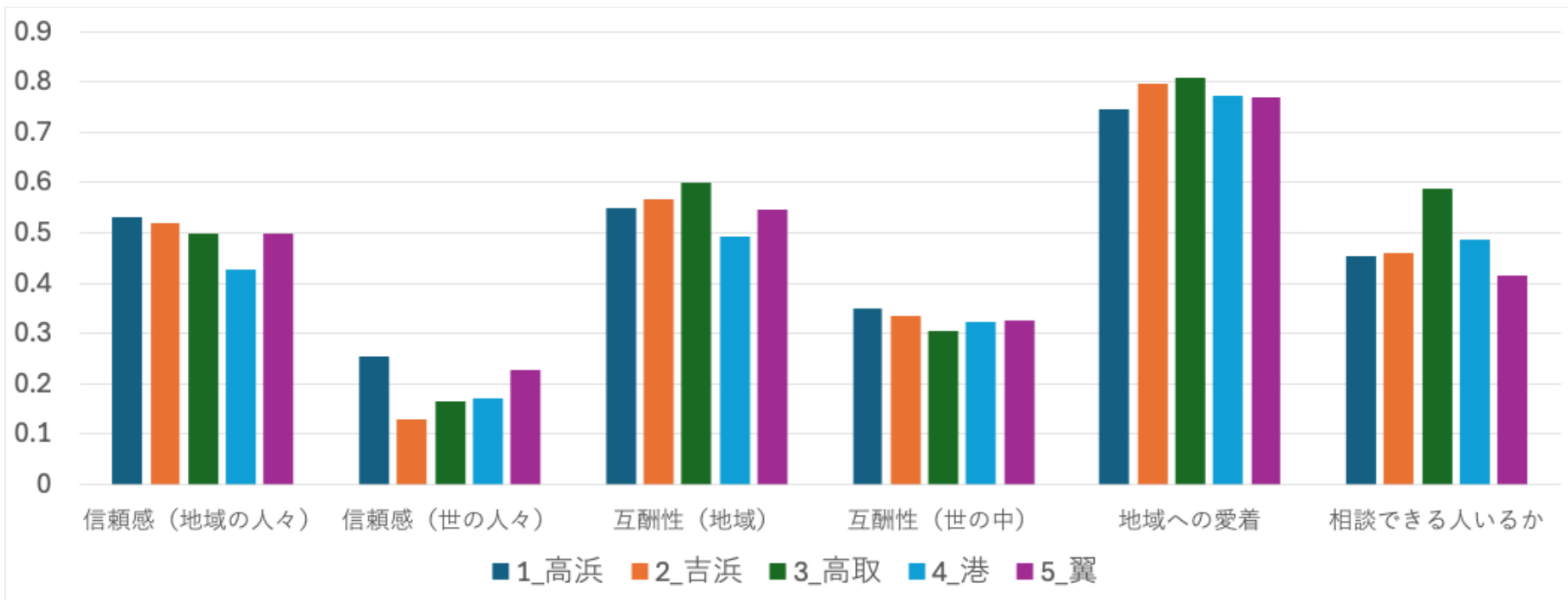
1番の居場所に行く頻度



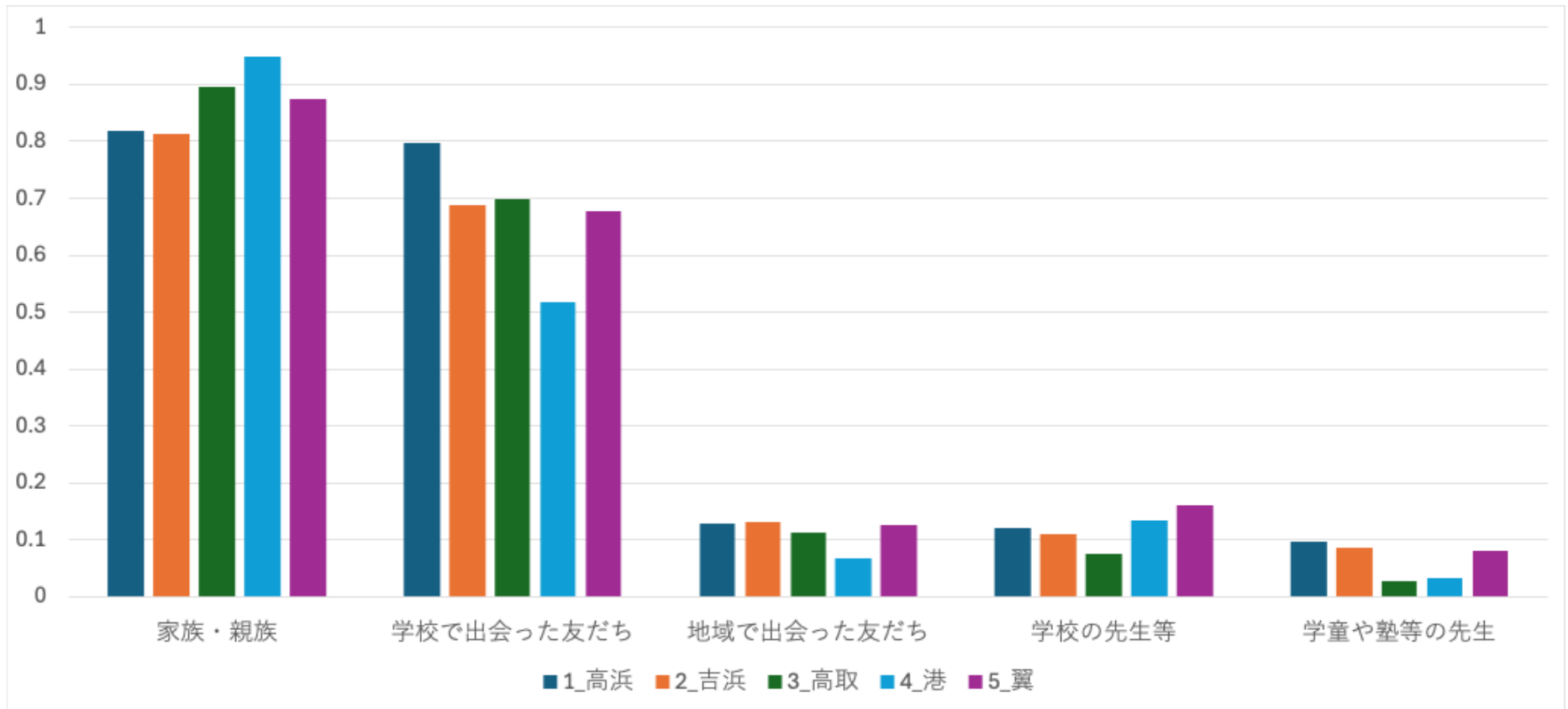
社会参加（月一回以上）の割合



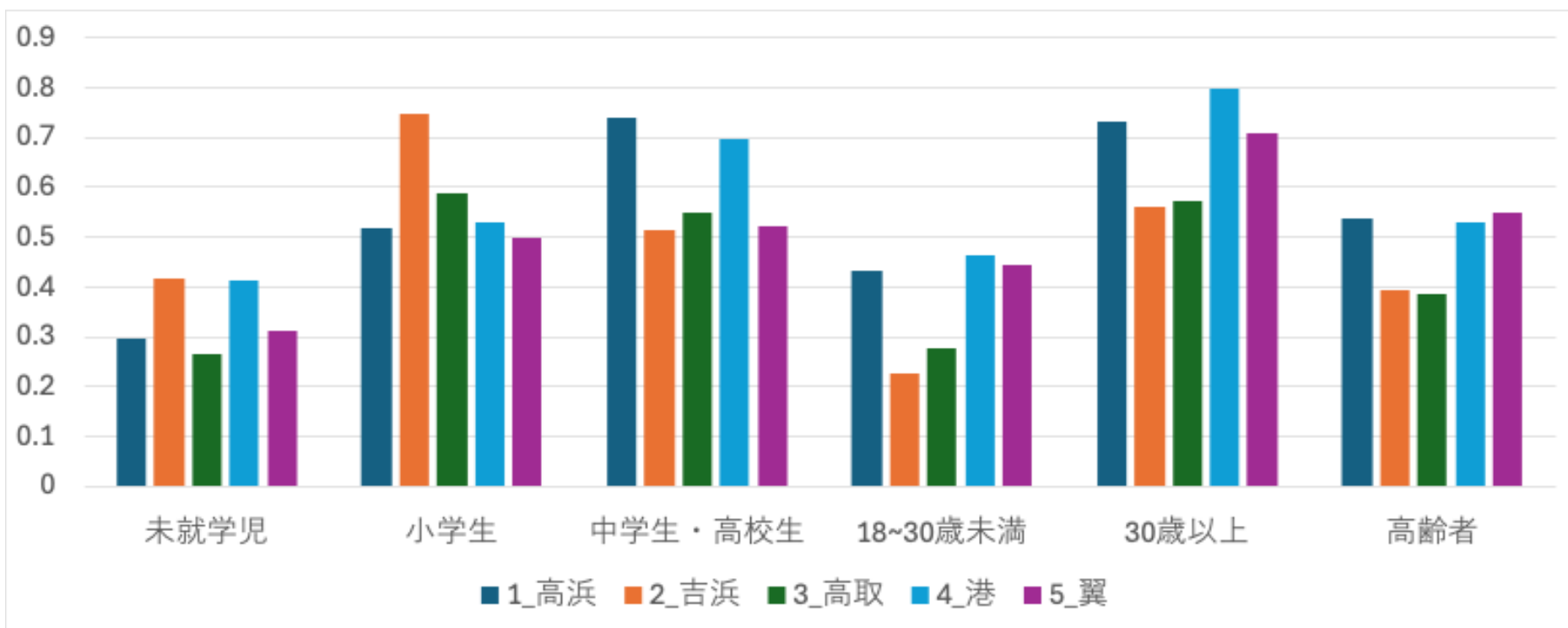
信頼感・互酬性・愛着・相談できる人の割合



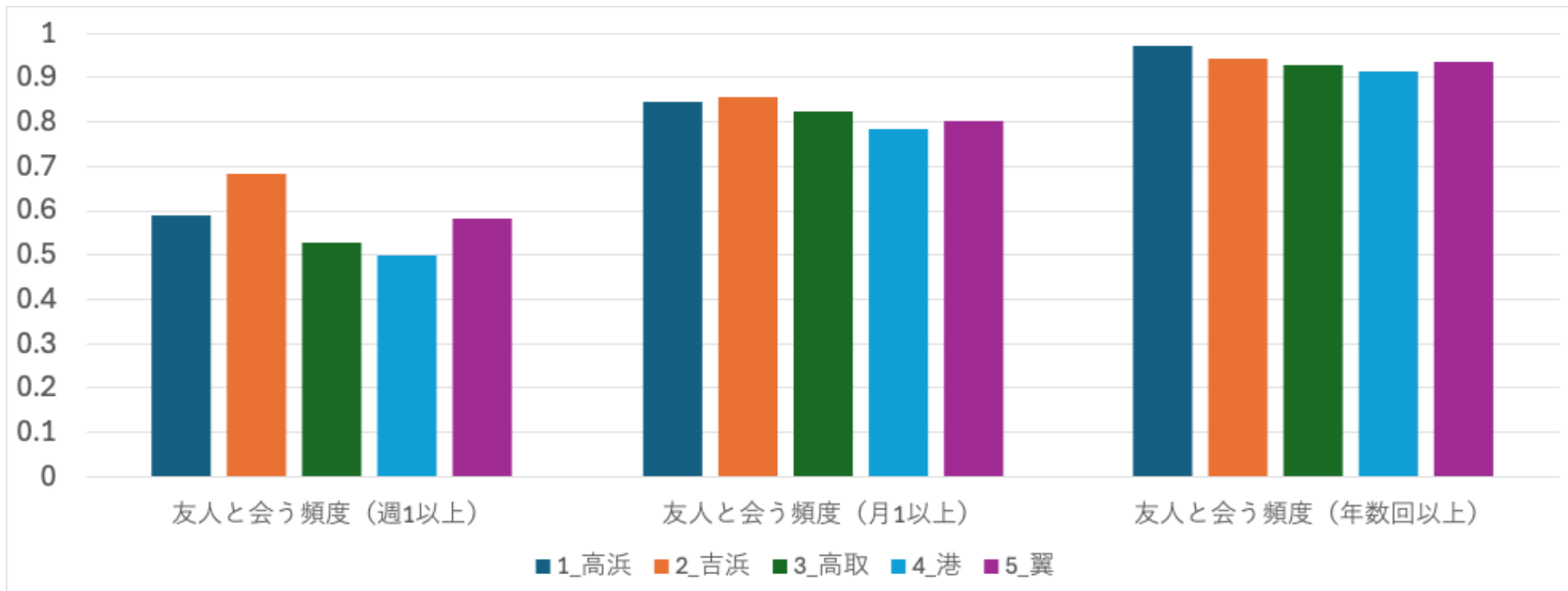
本当に困った時に相談できる人の割合（相談相手別）



普段話したり遊んだりする相手は？



友人と会う頻度

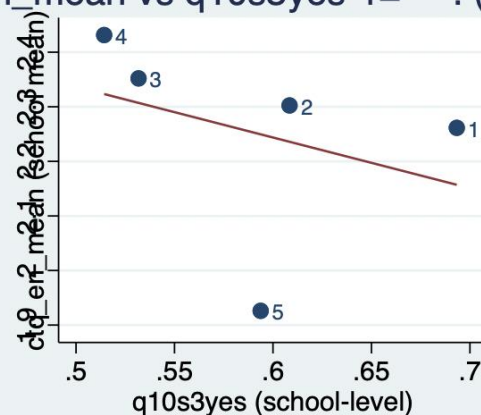
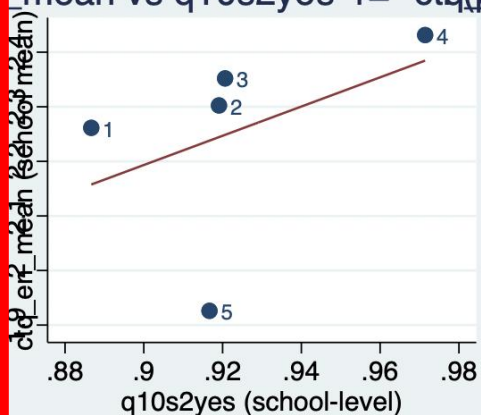
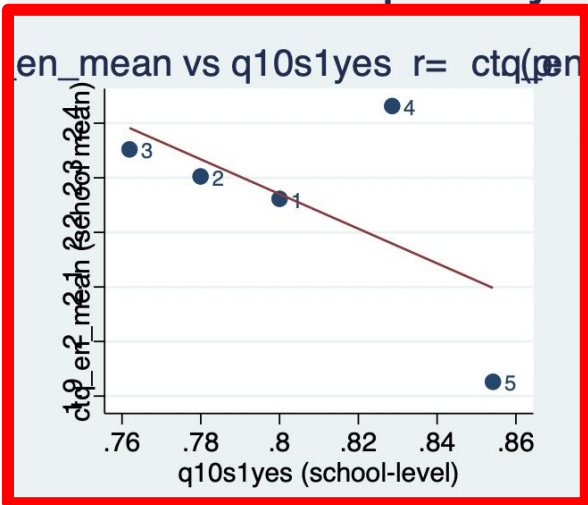


心理的ネグレクトと関連する要因

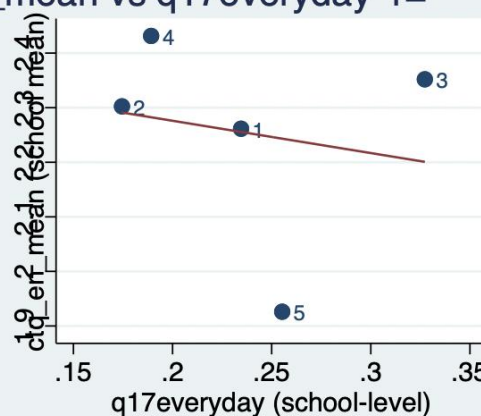
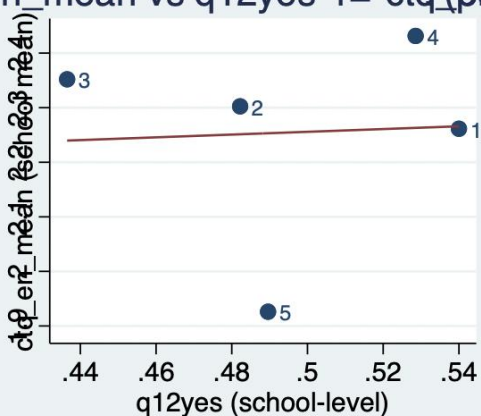
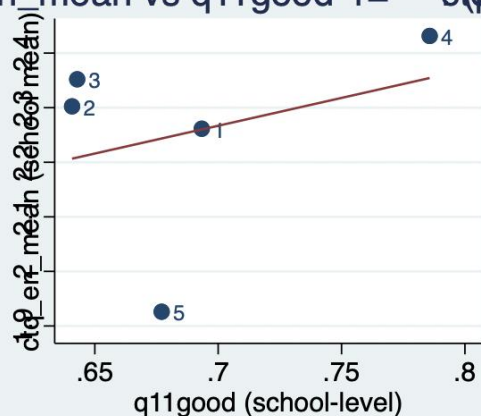


Top 1r1 by outcome: ctq_en_mean (K=6)

ctq_en_mean vs q10s1yes r = . (p=) ctq_en_mean vs q10s2yes r = . (p=) ctq_en_mean vs q10s3yes r = . (p=)



ctq_en_mean vs q11good r = . (p=) ctq_en_mean vs q12yes r = . (p=) ctq_en_mean vs q17everyday r = . (p=)

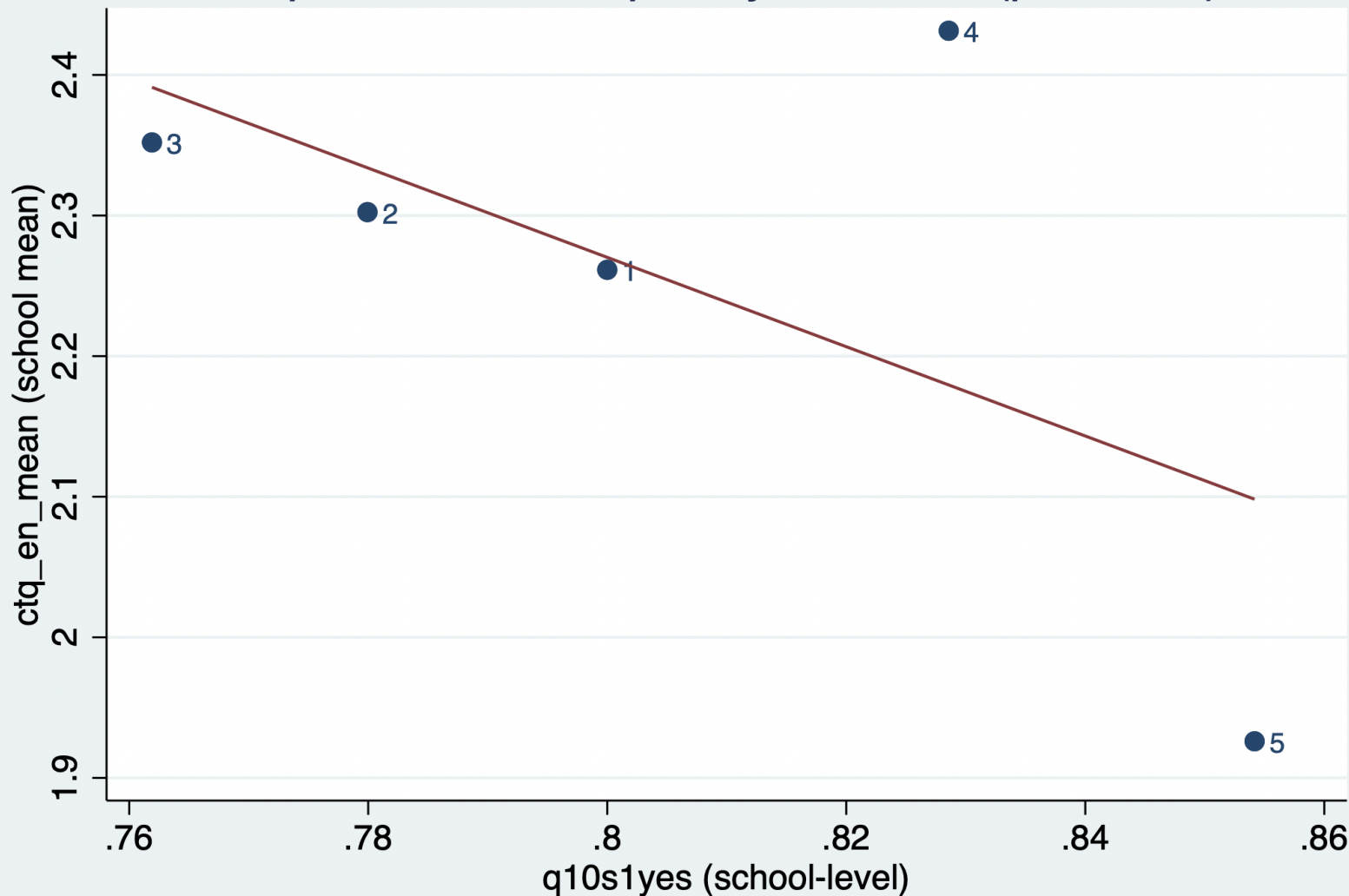


* p<.05, ** p<.01

1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区



ctq_en_mean vs q10s1yes $r = .$ ($p = 0.279$)

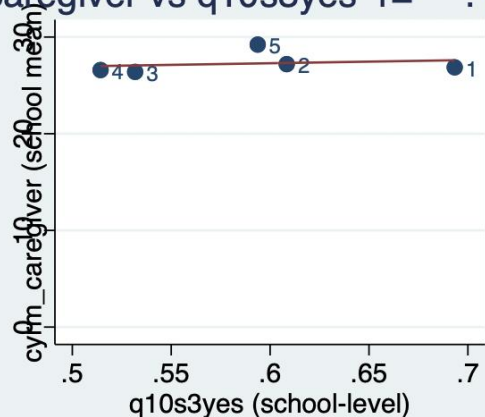
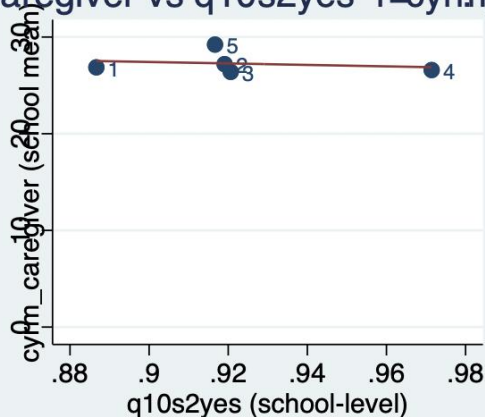
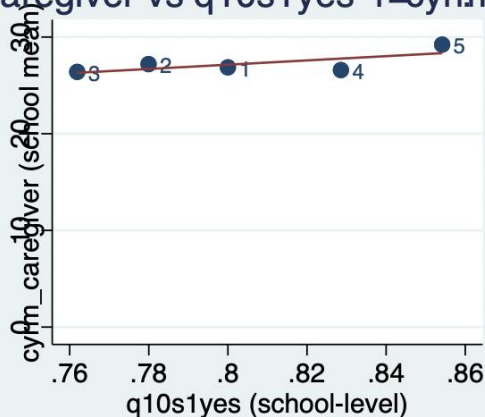


保護者のレジリエンスと関連する要因

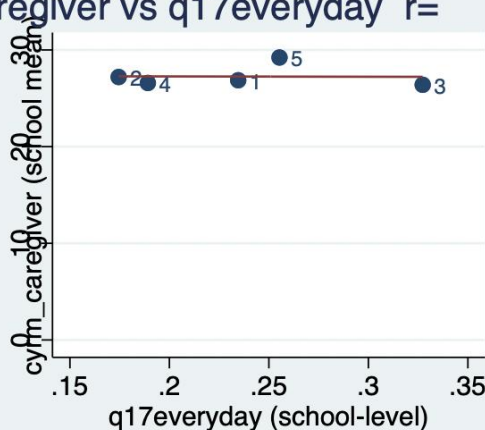
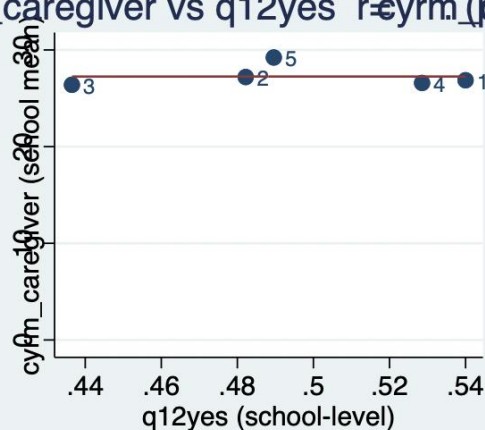
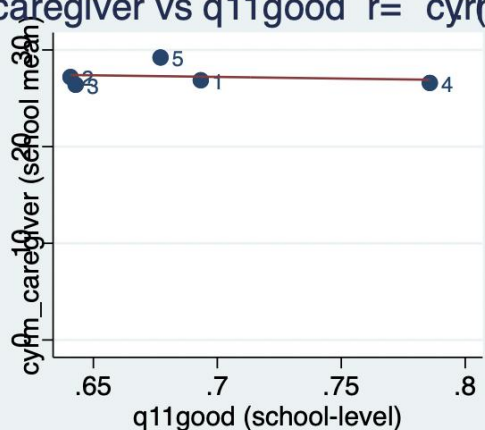


Top Irl by outcome: cyrm_caregiver (K=6)

cyrm_caregiver vs q10s1yes $r = \text{cyrm}(\text{caregiver vs q10s2yes } r = \text{cyrm}(\text{caregiver vs q10s3yes } r = \dots (p = \dots)$



cyrm_caregiver vs q11good $r = \text{cyrm}(\text{caregiver vs q12yes } r = \text{cyrm}(\text{caregiver vs q17everyday } r = \dots (p = \dots)$



* $p < .05$, ** $p < .01$

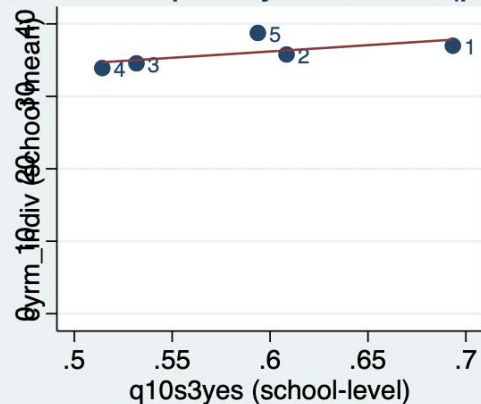
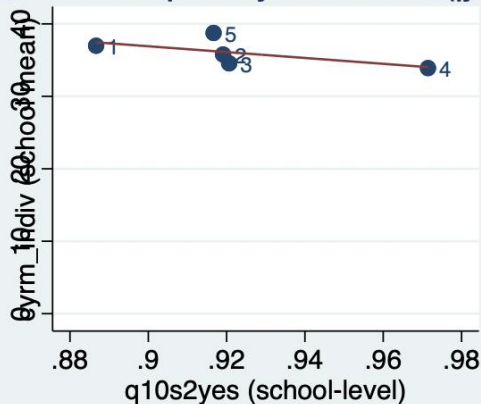
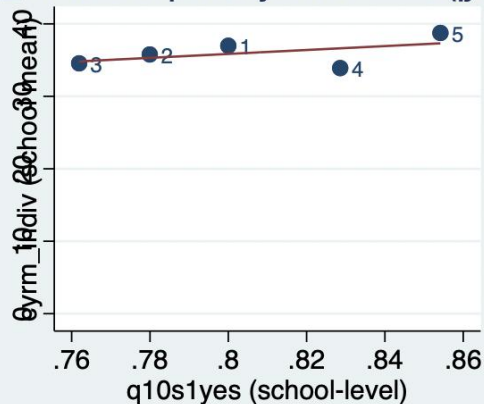
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

個人のレジリエンスと関連する要因

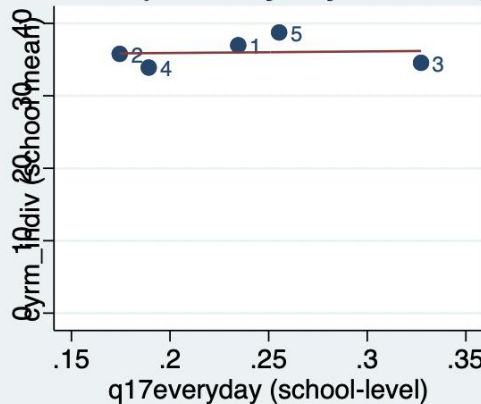
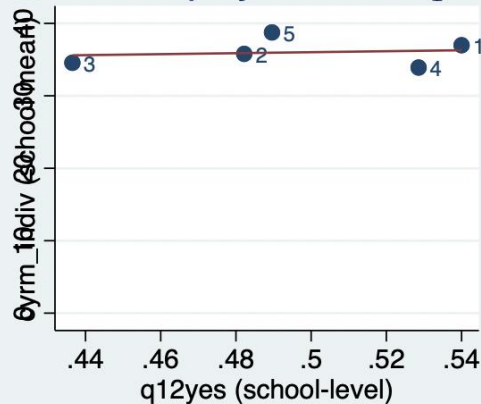
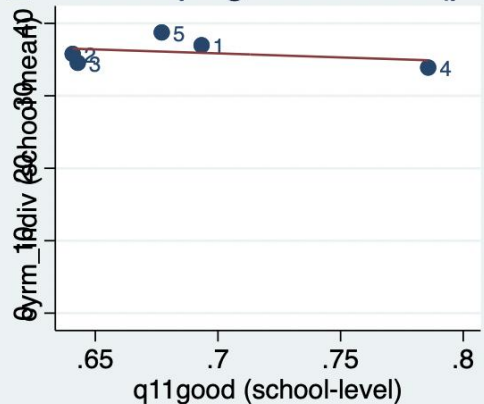


Top Irl by outcome: cyrm_indiv (K=6)

cyrm_indiv vs q10s1yes $r = .67^{**}$ cyrm_indiv vs q10s2yes $r = .69^{**}$ cyrm_indiv vs q10s3yes $r = .69^{**}$ (p=0.000)



cyrm_indiv vs q11good $r = .67^{**}$ cyrm_indiv vs q12yes $r = .69^{**}$ cyrm_indiv vs q17everyday $r = .69^{**}$ (p=0.000)



* p<.05, ** p<.01

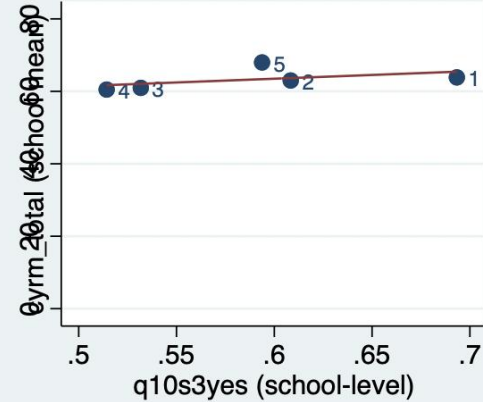
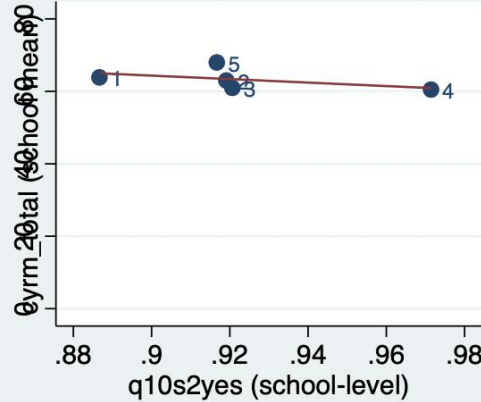
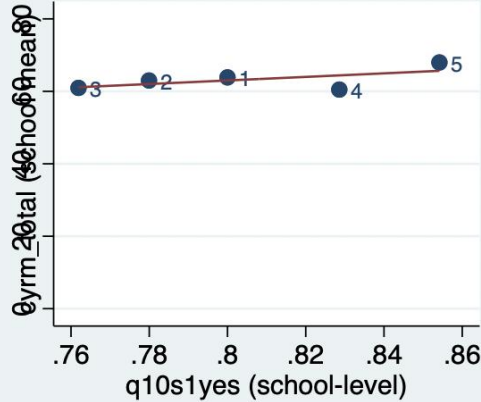
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

レジリエンスと関連する要因

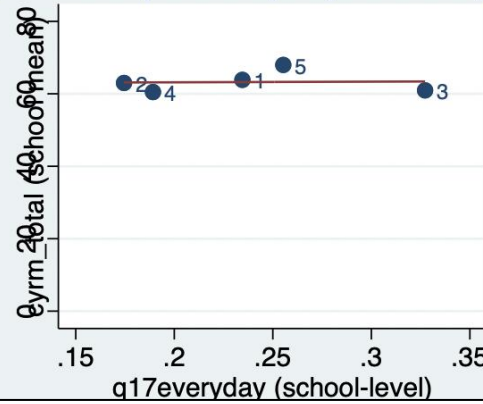
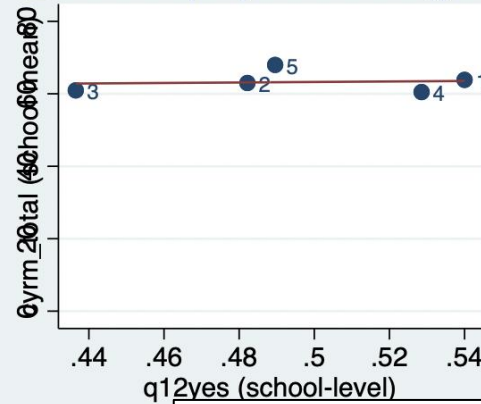
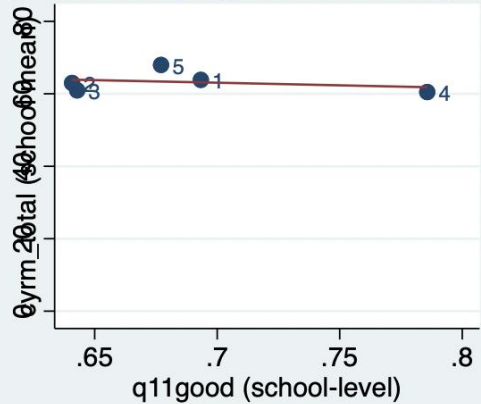


Top Irl by outcome: cyrm_total (K=6)

cyrm_total vs q10s1yes r = . (p=) cyrm_total vs q10s2yes r = . (p=) cyrm_total vs q10s3yes r = . (p= 0.



cyrm_total vs q11good r = . (p=) cyrm_total vs q12yes r = . (p=) cyrm_total vs q17everyday r = . (p=)



* p<.05, ** p<.01

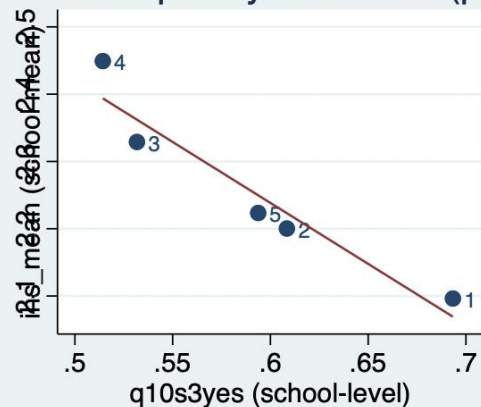
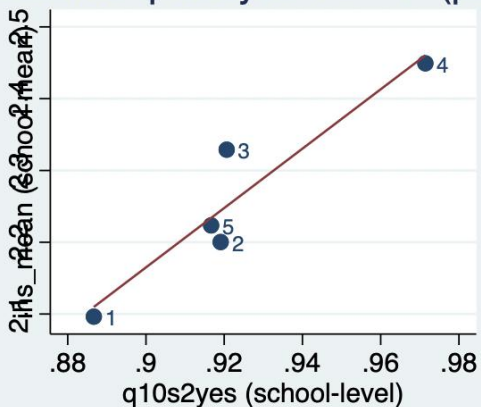
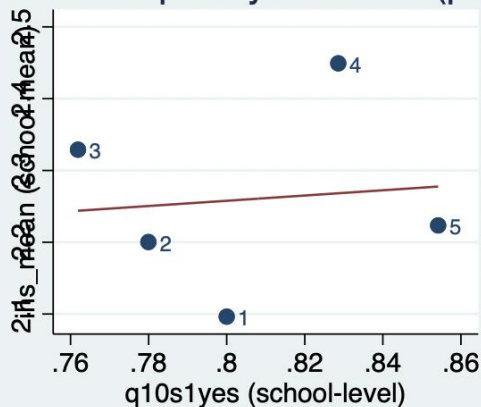
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

協調的幸福感と関連する要因

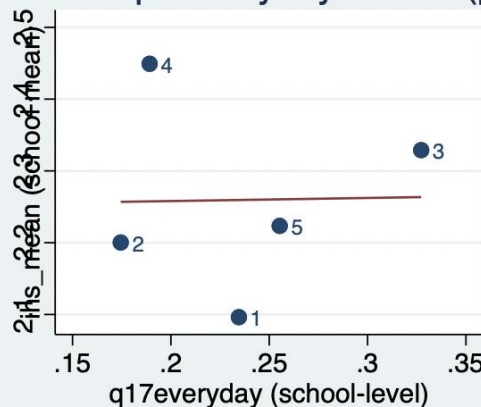
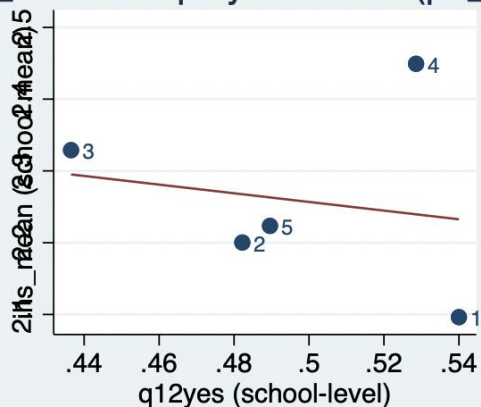
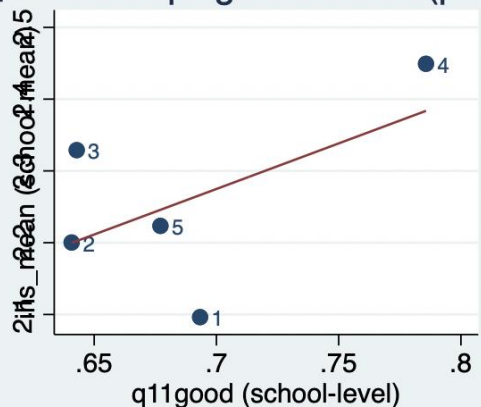


Top Irl by outcome: ihs_mean (K=6)

s_mean vs q10s1yes r= . (ps_mean vs q10s2yes r= . * (ps_mean vs q10s3yes r= . * (p= 0.



is_mean vs q11good r= . (ps_mean vs q12yes r= . (ps_mean vs q17everyday r= . (p=



* p<.05, ** p<.01

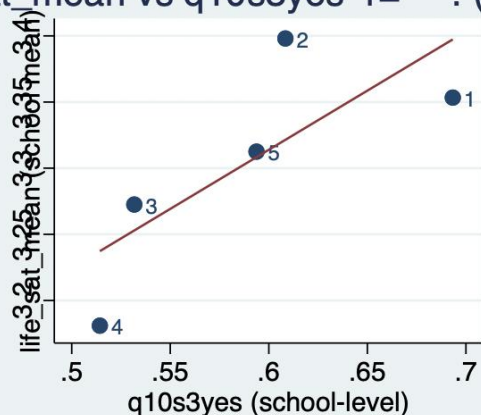
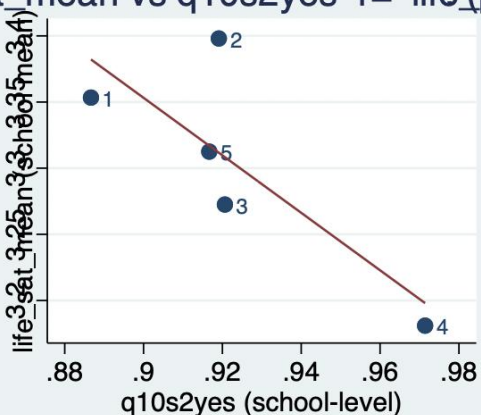
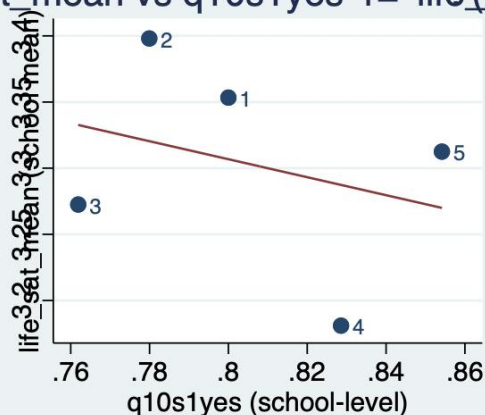
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

生活満足度と関連する要因

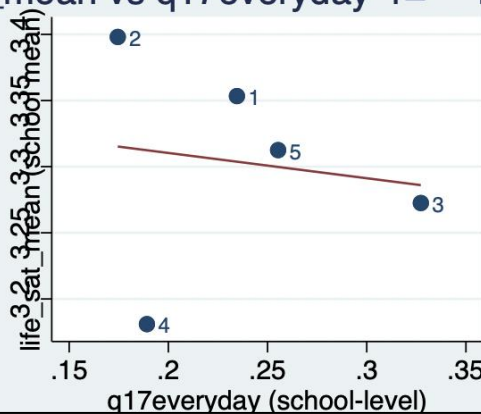
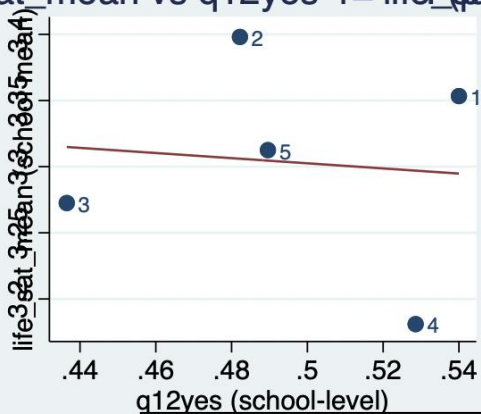
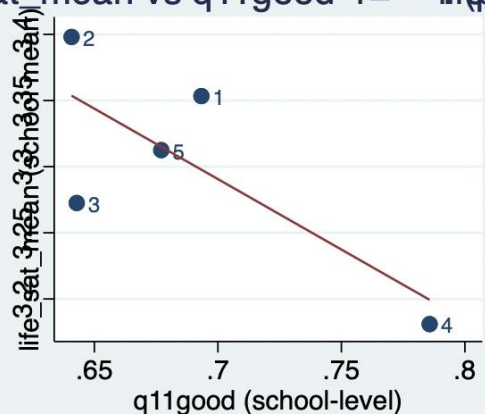


Top Irf by outcome: life_sat_mean (K=6)

life_sat_mean vs q10s1yes r= . (p= .) life_sat_mean vs q10s2yes r= . (p= .) life_sat_mean vs q10s3yes r= . (p= .)



life_sat_mean vs q11good r= . (p= .) life_sat_mean vs q12yes r= . (p= .) life_sat_mean vs q17everyday r= . (p= .)



* p<.05, ** p<.01

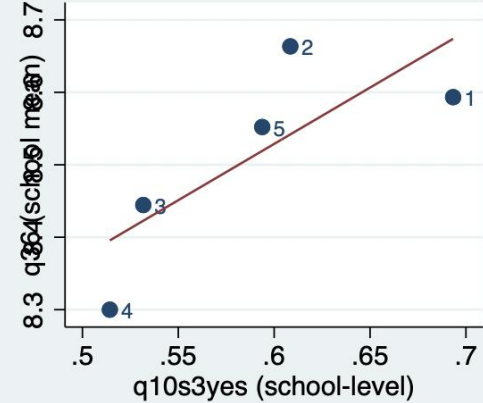
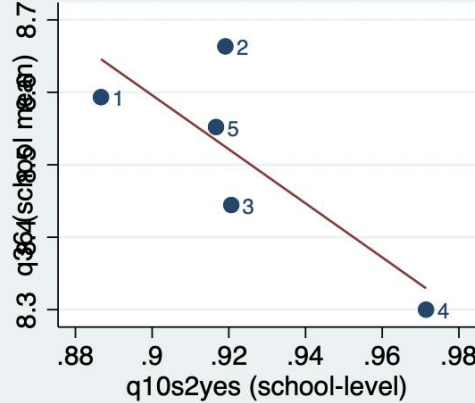
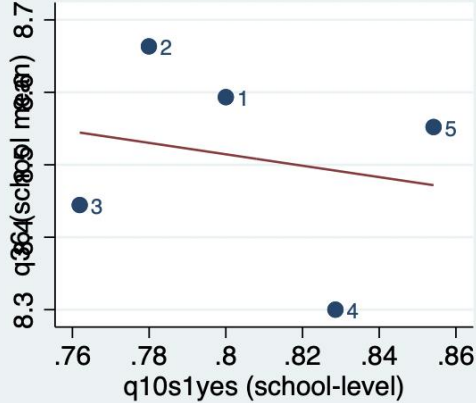
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

幸福感と関連する要因

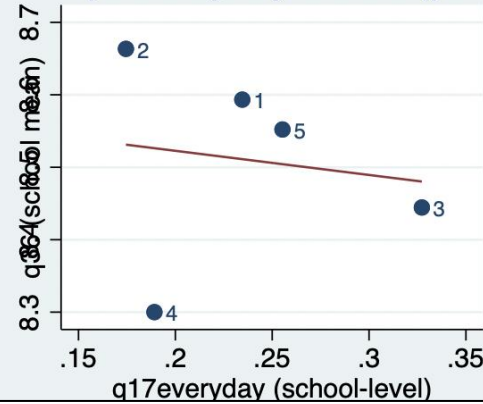
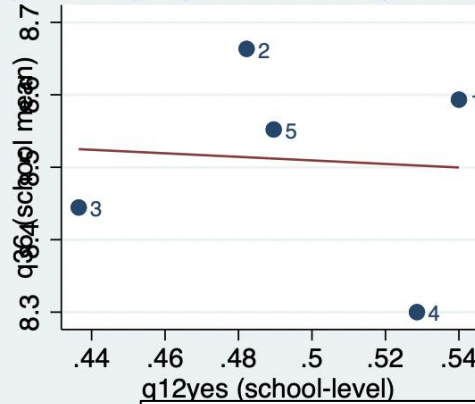
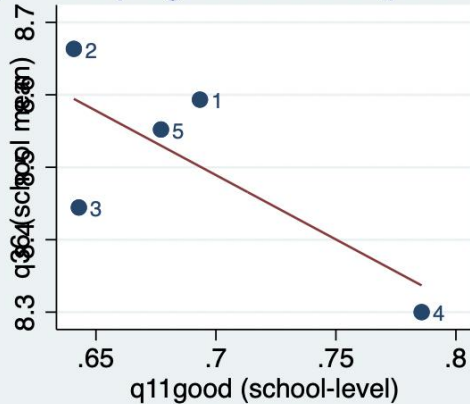


Top Irl by outcome: q36 (K=6)

q36 vs q10s1yes $r = .$ ($p = 0.7$) q36 vs q10s2yes $r = .$ ($p = 0.1$) q36 vs q10s3yes $r = .$ ($p = 0.12$)



q36 vs q11good $r = .$ ($p = 0.1$) q36 vs q12yes $r = .$ ($p = 0.9$) q36 vs q17everyday $r = .$ ($p = 0.8$)



* $p < .05$, ** $p < .01$

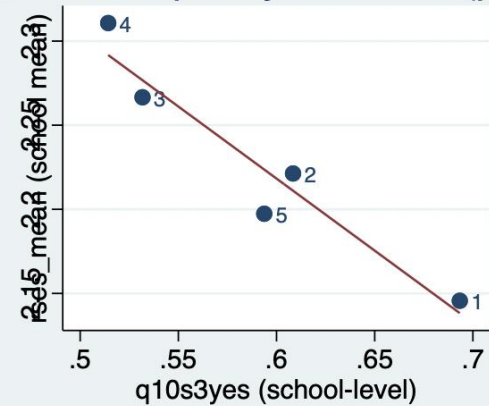
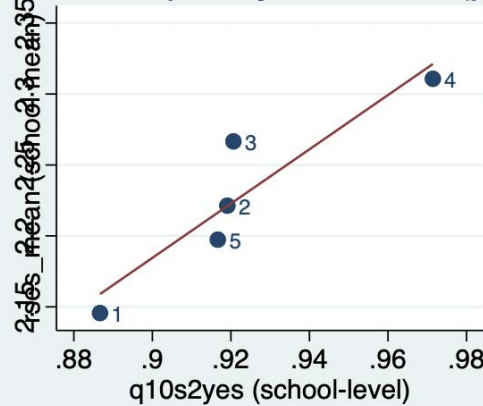
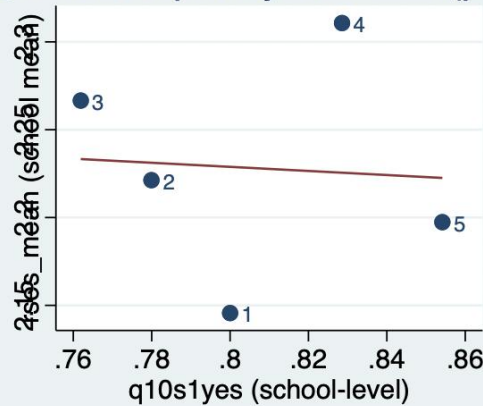
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

自己肯定感と関連する要因

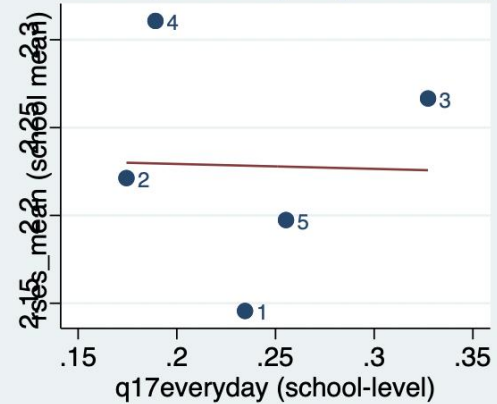
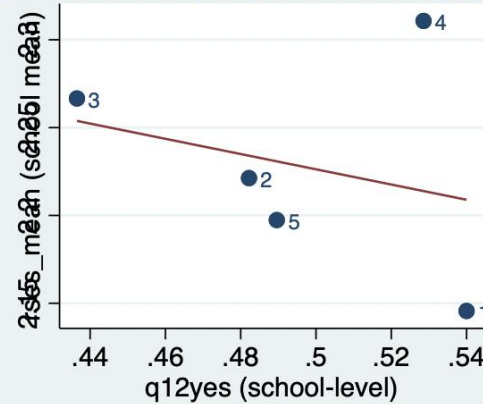
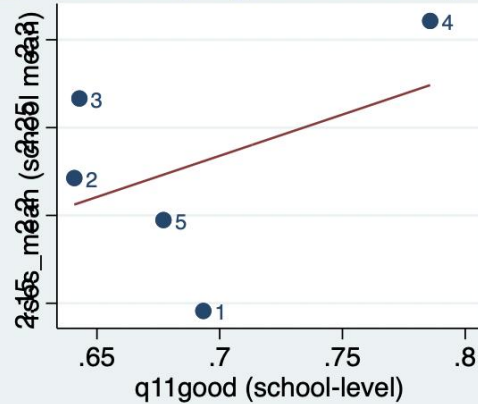


Top 1r1 by outcome: rses_mean (K=6)

rses_mean vs q10s1yes r = .48 (p = .001) rses_mean vs q10s2yes r = .71 (p < .001) rses_mean vs q10s3yes r = -.67 (p < .001)



rses_mean vs q11good r = .61 (p < .001) rses_mean vs q12yes r = -.41 (p = .001) rses_mean vs q17everyday r = .34 (p = .001)



* p < .05, ** p < .01

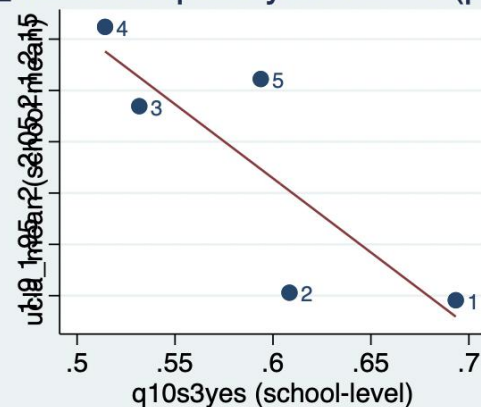
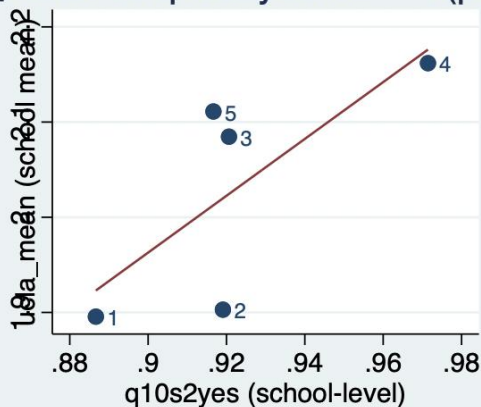
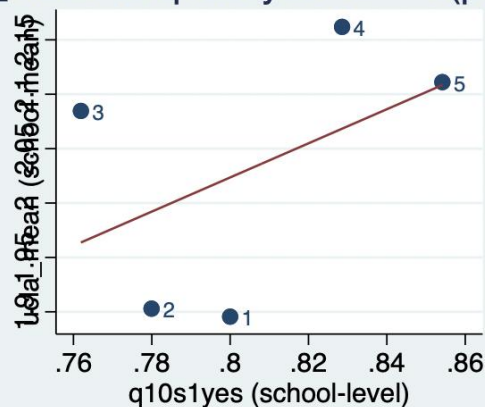
1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区

孤独感と関連する要因

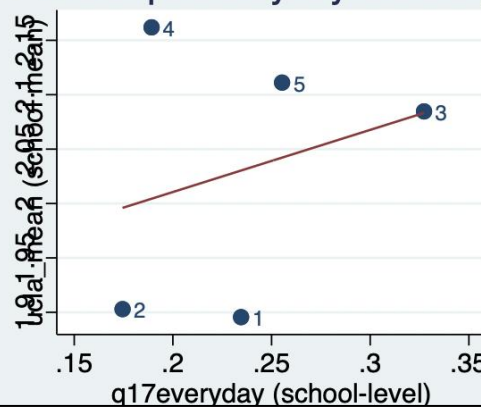
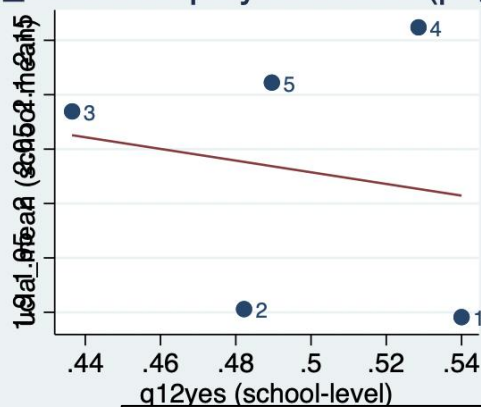
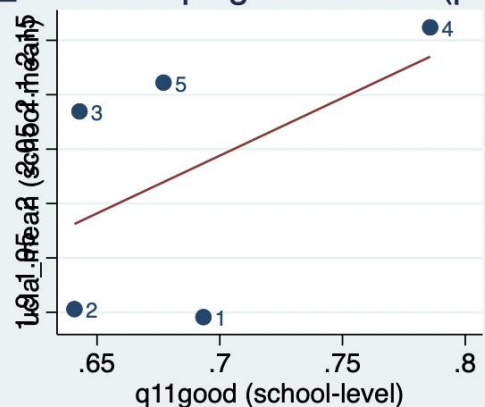


Top Irl by outcome: ucla_mean (K=6)

ucla_mean vs q10s1yes r = .41 (p = 0.000) ucla_mean vs q10s2yes r = .41 (p = 0.000) ucla_mean vs q10s3yes r = .41 (p = 0.000)



ucla_mean vs q11good r = .41 (p = 0.000) ucla_mean vs q12yes r = .41 (p = 0.000) ucla_mean vs q17everyday r = .41 (p = 0.000)



* p<.05, ** p<.01

1 高浜小学校区 2 吉浜小学校区 3 高取小学校区
4 港小学校区 5 翼小学校区